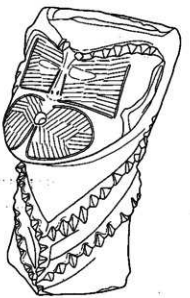
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第69集

角江遺跡 II

遺物編 1（土器・土製品）

平成３～７年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進
（中小）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1996

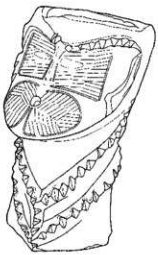
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第69集

角江遺跡 II

遺物編 1（土器・土製品）

平成3～7年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進
（中小）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1996

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

人面付壺形土器（弥生中期：SR01出土）

絵画土器（弥生中期から後期：SR01出土）

序

角江遺跡は、平成2年度の確認調査の結果をもとに現地調査3ヵ年（平成3年度から平成5年度）及び資料整理・報告書作成2ヵ年（平成6年度から平成7年度）の5ヵ年にわたる調査が実施された浜松市の佐鳴湖南西に位置する弥生時代中期から後期を中心とする遺跡である。今回の報告は、その調査により出土した遺物に関する成果をまとめたものであり、既刊の「角江遺跡」(1991年）に続くものである。本書は、「角江遺跡Ⅱ遺構編」(1996年）と並行し、「角江遺跡Ⅱ遺物編1（土器・土製品）」として、土器・土製品の成果を報告するものである。

角江遺跡から出土した弥生時代の土器・土製品、木製品、石器・石製品などの出土品は、種類・量共に豊富であり、角江遺跡が拠点集落であったことを推定させる内容である。土器・土製品に関しては、甕形土器の口縁内側に「シカ」の線刻が施された絵画土器、県内初例である銅鐸形土製品、東日本的性格を示す人面付壺形土器など、弥生時代の文化圏及び交流を探る貴重な資料があり、全国的にも注目されるものも少なくない。また、弥生時代の自然流路SR01を主として方形周溝墓、土器棺墓から出土した弥生時代中期中葉から後期前半を中心とする時期の土器・土製品は、静岡県西部の土器様相、中でも不明な点が多かった中期の土器様相を把握する上で重要な資料となろう。角江遺跡の調査に際し、今までの課題に迫る資料の探究とその成果の周知を図ることは私どもの使命であり、喜びでもあることを改めて感じる次第である。

なお、調査の実施及び報告書の作成・刊行にあたっては、静岡県浜松土木事務所・静岡県教育委員会・浜松市教育委員会の各位に深い理解ならびに多大な援助・協力を得ている。ここに関連機関各位に深く感謝の意を表すとともに、調査及び資料整理に従事した本所員ならびに作業に参加された多くの方々の労苦に感謝するものである。

1996年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1　本書は、静岡県浜松市入野町字角江に所在する角江遺跡の発掘調査報告書「角江遺跡Ⅱ・遺物編1（土器・土製品）」であり、角江遺跡出土土器・土製品の調査結果及び成果を報告するものである。なお、実測図版は、B4版別冊付図とした。

2　角江遺跡Ⅱの発掘調査報告書は、「遺構編」、「遺物編1（土器・土製品）」、「遺物編2（木製品）」、「遺物編3（石器・金属製品他）」の4分冊構成である。

3　調査は、二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進（中小）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　調査期間は、現地発掘調査3ヵ年（平成3年4月1日から平成6年3月31日）及び資料整理・報告書作成2ヵ年（平成6年4月1日から平成8年3月31日）である。

5　調査体制は、次のとおりである。

平成3年度（現地発掘調査）
所長　斎藤　忠　　常務理事　鈴木　勲　　調査研究部長　山下　晃
調査研究二課長　栗野克巳　　調査研究員　内藤朝雄　中山正典　塚本裕巳

平成4年度（現地発掘調査）
所長　斎藤　忠　　常務理事　鈴木　勲　　調査研究部長　山下　晃
調査研究部次長兼調査研究一課長　平野吾郎　　調査研究員　内藤朝雄　塚本裕巳
嘱託技術員　中嶋郁夫

平成5年度（現地発掘調査）
所長　斎藤　忠　　常務理事　鈴木　勲　　調査研究部長　檀松章八
調査研究三課長　佐野五十三　　調査研究員　塚本裕巳　中川律子（旧姓伊藤）
嘱託技術員　中嶋郁夫

平成6年度（整理作業・報告書作成）
所長　斎藤　忠　　常務理事　鈴木　勲
調査研究部長　小崎章男　　調査研究部次長　栗野克巳
調査研究二課長　佐野五十三　　調査研究員　中川律子（旧姓伊藤）　青木　修
嘱託技術員　中嶋郁夫

平成7年度（整理作業・報告書作成）
所長　斎藤　忠　　副所長　池谷和三　　常務理事　三村田昌昭
調査研究部長　小崎章男　　調査研究部次長　栗野克巳
調査研究二課長　佐野五十三　　主任調査研究員　中嶋郁夫
調査研究員　篠原充男　中川律子（旧姓伊藤）　岩本　貴
技術職員　勝又直人

6　本書は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。執筆分担は次の通りである。また、本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第１節（古墳時代から中世）……篠原充男

第Ⅱ章第２節（弥生時代）・第３節（縄紋時代）、第Ⅲ章（土製品）、第Ⅳ章……岩本　貴

7　遺物写真撮影（４×５判）は、楠華堂（楠木真紀子氏）に委託した。

8　すべての出土資料及び調査資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

9　資料整理・本書作成にあたり、出土資料に関して、次の方々に御教示及び御指導を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。

安藤広道　石黒立人　佐藤由紀男　佐原　眞　鈴木敏則　贄　元洋　春成秀爾　平野吾郎

松井一明　向坂鋼二

（五十音順、敬称略）

凡　例

本書の記述・表示については、以下の基準を設け、統一を図った。

1　実測図版の縮尺は、土器を３分の１、土製品を２分の１とした。

2　実測図において、「破断面」、「赤彩」、「炭化物」の部分については、スクリーン・トーンを用いて、次のように示した。

破断面	
赤　彩	
炭化物	

なお、拓本など図示不可能なものについては、文字で表示することにした。

3　本文中での実測図版（別冊）掲載の資料及び本書の挿図・挿表については、次の例のように扱った。

・本文中の「5-13」は「実測図版（別冊）の第５図13番の資料」を示す。

・本文中の「図５」は「挿図－第５図」を、「表５」は「挿表－第５表」を示す。

目　　次

巻頭カラー１　「人面付壺形土器（弥生中期）：SR 01出土」
巻頭カラー２　「絵画土器（弥生中期から後期）：SR 01出土」
序
例言
凡例

第Ⅰ章　資料整理の概要……1
第１節　資料の概要……1
第２節　資料整理の方法・経過……3
第Ⅱ章　土　器……6
第１節　中世から古墳時代……6
1　7区水田出土土器……6
2　中世水田面検出土坑出土土器……8
3　奈良時代不定形土坑出土土器……8
4　土堤状遺構を持つ土坑出土土器……10
5　中世素掘り井戸出土土器……11
6　奈良時代井戸出土土器……14
7　古墳時代井戸出土土器……15
8　奈良時代曲物井戸出土土器……15
9　平安時代曲物井戸出土土器……15
10　中世曲物井戸出土土器……16
11　中世曲物石組井戸出土土器……16
12　中世集石土坑出土土器……18
13　9区土器集積２（古墳時代）出土土器……20
14　3 SX 25（古墳）出土土器……21
15　3 SD 46出土土器……22
第２節　弥生時代……24
1　中期中葉から後葉の土器の形態分類……24
2　後期の土器の形態分類……27
3　方形周溝墓出土土器……30
4　土器棺墓出土土器……34
5　土坑・溝・その他出土土器……35
6　SR 01出土土器……41
第３節　縄紋時代……46
1　縄紋流路出土土器……46
2　縄紋微高地出土土器……47
3　突帯紋土器……47
4　条痕紋土器……47

第Ⅲ章　土製品……48
第１節　中世から古墳時代……50
第２節　弥生時代・その他……50
第Ⅳ章　まとめ……59
第１節　弥生時代……59
第２節　縄紋時代……62

挿図・挿表目次

第Ⅰ章　資料整理の概要

第1節　資料の概要

第2節　資料整理の方法・経過

・第1表　角江遺跡　土器・土製品整理作業工程表……3

第Ⅱ章　土　器

第1節　中世から古墳時代

・第2表　7区水田出土土器一覧表……7

・第3表　中世水田面検出土坑出土土器一覧表……8

・第4表　奈良時代不定形土坑出土土器一覧表……9

・第5表　土堤状遺構を持つ土坑出土土器一覧表……11

・第6表　中世素掘り井戸出土土器一覧表……11

・第7表　奈良時代井戸出土土器一覧表……14

・第8表　古墳時代井戸出土土器一覧表……15

・第9表　奈良時代曲物井戸出土土器一覧表……15

・第10表　平安時代曲物井戸出土土器一覧表……16

・第11表　中世曲物井戸出土土器一覧表……16

・第12表　中世曲物石組井戸出土土器一覧表……17

・第13表　中世集石土坑出土土器一覧表……18

・第14表　9区土器集積2（古墳時代）出土土器一覧表……21

・第15表　3 SX 25（古墳）出土土器一覧表……22

・第16表　3 SD 46出土土器一覧表……22

第2節　弥生時代

・第1図　中期中葉から後葉の土器の形態分類……26

・第2図　後期の土器の形態分類1……28

・第3図　後期の土器の形態分類2……29

第3節　縄紋時代

・第17表　突帯紋土器・条痕紋土器一覧表……49

第Ⅲ章　土製品

第1節　中世から古墳時代

第2節　弥生時代・その他

・第18表　土製品一覧表……54

第Ⅳ章　まとめ

第1節　弥生時代

・第4図　各時期の弥生土器1……60

・第5図　各時期の弥生土器2……61

第2節　縄紋時代

写真図版目次

図版1　7区4・5・6層水田　出土土器
図版2　7区6層水田・2 SF 32・3 SX 15・3 SX 17　出土土器
図版3　3 SX 17・3 SE 01・3 SE 02　出土土器
図版4　3 SE 02・2 SE 11　出土土器
図版5　2 SE 11・5 SF 06・5 SF 09・5 SF 12　出土土器
図版6　5 SF 12・5 SF 13・3 SE 04・3 SE 23・2 SE 03・2 SE 06　出土土器
図版7　2 SE 10　出土土器
図版8　7 SF 02・2 SF 09・3 SF 127　出土土器
図版9　3 SF 127　出土土器
図版10　3 SF 127・9区土器集積　出土土器
図版11　9区土器集積・3 SX 25　出土土器
図版12　3 SF 127・3 SD 46　出土土器
図版13　方形周溝墓　出土土器①
図版14　方形周溝墓　出土土器②
図版15　方形周溝墓　出土土器③（4号墓東溝・6号墓東溝）
図版16　方形周溝墓　出土土器④⑮
図版17　方形周溝墓　出土土器③④
図版18　方形周溝墓13号墓　出土土器⑤
図版19　方形周溝墓　出土土器⑤⑥
図版20　方形周溝墓　出土土器⑦
図版21　方形周溝墓　出土土器⑧⑨
図版22　方形周溝墓　出土土器⑨⑩⑪
図版23　方形周溝墓　出土土器⑪⑫
図版24　方形周溝墓　出土土器⑬
図版25　方形周溝墓　出土土器⑭⑮
図版26　土器棺①
図版27　土器棺①②
図版28　土器棺③
図版29　土器棺④
図版30　土器棺④⑤
図版31　弥生時代土坑　出土土器①
図版32　弥生時代土坑　出土土器②③
図版33　弥生時代土坑　出土土器③④
図版34　弥生時代土坑　出土土器④・土器埋置小土坑　出土土器
図版35　土器埋置土坑　出土土器・溝状遺構　出土土器①
図版36　溝状遺構　出土土器①②③
図版37　溝状遺構　出土土器③④
図版38　溝状遺構　出土土器④⑤

図版39　溝状遺構　出土土器⑤
図版40　溝状遺構　出土土器⑤・２区土器集積　出土土器①・2SD40　出土土器①
図版41　２区土器集積　出土土器①②
図版42　７区水田　出土土器・SR01第Ⅰ層　出土土器①
　　弥生湧水点上層、下層　出土土器
図版43　SR01第Ⅰ層　出土土器①②
図版44　SR01第Ⅰ層　出土土器③
図版45　SR01第Ⅰ層　出土土器④⑤⑥
図版46　SR01第Ⅰ層　出土土器⑥⑦
図版47　SR01第Ⅰ層　出土土器⑧⑨
図版48　SR01第Ⅰ層　出土土器⑩
図版49　SR01第Ⅰ層　出土土器⑩⑪
図版50　SR01第Ⅰ層　出土土器⑪⑫
図版51　SR01第Ⅰ層　出土土器⑫
図版52　SR01第Ⅰ層　出土土器⑫⑬
図版53　SR01第Ⅰ層　出土土器⑬・SR01第Ⅱ層　出土土器①②
図版54　SR01第Ⅱ層　出土土器②③④
図版55　SR01第Ⅲ層　出土土器①
図版56　SR01第Ⅲ層　出土土器①②
図版57　SR01第Ⅲ層　出土土器②③
図版58　SR01第Ⅲ層　出土土器③④⑤⑥
図版59　SR01第Ⅲ層　出土土器⑦⑧⑩⑪
図版60　SR01第Ⅲ層　出土土器⑪⑫
図版61　SR01第Ⅳ層　出土土器⑤⑧・SR01第Ⅴ層　出土土器②③
図版62　縄紋土器①
図版63　縄紋土器②
図版64　縄紋土器③・絵画土器①
図版65　絵画土器②
図版66　銅鐸形土製品・鳥形土器・筒形土器
図版67　人面付壺形土器
図版68　各種土製品
図版69　蓋形土器・瓦
図版70　ミニチュア土器①
図版71　ミニチュア土器②
図版72　台盤状土製品①
図版73　台盤状土製品②
図版74　土錘・土玉

別冊実測図版目次

（全114図）

別冊第1図	7区水田出土土器	1～6（4層）、7～19（5層）、20～24（6層）
別冊第2図	中世水田面検出土坑出土土器	1～8（2 SF 32）、9（2 SF 39）
	奈良時代不定形土坑出土土器	10～15（3 SX 15）、16～19（3 SX 17）
別冊第3図	奈良時代不定形土坑出土土器	1～27（2 SX 17）
	土堤状遺構を持つ土坑出土土器	28～29（2 SF 30）
別冊第4図	中世素掘井戸出土土器①	1（3 SE 01）、2～15・19（3 SE 02）、16・17（3 SF 142）、18（3 SF 134）、20（4 SD 09）
別冊第5図	中世素掘井戸出土土器②	1～16（2 SE 11）
別冊第6図	中世素掘井戸出土土器③	1（5 SF 06）、2（5 SF 09）
	奈良時代井戸出土土器	3～9・11・12・14～17（5 SF 12）、10（5 SF 11）、13（5 SF 13）
別冊第7図	古墳時代井戸出土土器	1（3 SE 04）
	奈良時代曲物井戸出土土器	2・3（2 SE 08）
	平安時代曲物井戸出土土器	6（3 SE 21）、7（3 SE 22）、8（3 SE 23）
	中世曲物井戸出土土器	4（2 SE 03）、5（2 SE 06）
	中世曲物石組井戸出土土器①	9～13（2 SE 10）
別冊第8図	中世曲物石組井戸出土土器②	1～22（2 SE 10）
別冊第9図	中世集石土坑出土土器①	1・2・4・6（7 SF 02）、3（10 SP 16）、5（3 SF 129）、7（2 SF 09）、8・9（3 SF 68）、10（10 SP 15）、11～17（3 SF 127）
別冊第10図	中世集石土坑出土土器②	1～21（3 SF 127）
別冊第11図	9区土器集積2（古墳）出土土器	1～18（9区土器集積2）
別冊第12図	3SX 25（古墳）出土土器	1～23（3 SX 25）
別冊第13図	3SD 46（古墳）出土土器	1～9（3 SD 46）
別冊第14図	方形周溝墓出土土器①	1（1号墓北溝）、2・3（2号墓西溝）4～7（2号墓南溝）
別冊第15図	方形周溝墓出土土器②	1・2（2号墓南溝）、3～7（3号墓北溝）、8・9（3号墓東溝）
別冊第16図	方形周溝墓出土土器③	1～3（14号墓東溝）、4・5（6号墓東溝）
別冊第17図	方形周溝墓出土土器④	1（6号墓南溝）、2・3（6号墓北溝）、4（7号墓南溝）、5（9・10号墓9 SD 47）、6（12号墓9 SD 51）、7（12号墓9 SD 46）
別冊第18図	方形周溝墓出土土器⑤	1～2（13号墓4 SD 02）、3～10（13号墓4 SD 01）、11・12（13号墓4 SD 11）
別冊第19図	方形周溝墓出土土器⑥	1・2（15号墓3 SD 34）、3（16号墓3 SD 67）、4～6（16号墓3 SF 179）、7・8（17号墓3 SD 44）9（18号墓3 SD 76）、10～12（18号墓3 SD 52）

別冊第20図	方形周溝墓出土土器⑦	1～12(14号墓 2 SD 10)
別冊第21図	方形周溝墓出土土器⑧	1～14(14号周溝墓 2 SD 10)
別冊第22図	方形周溝墓出土土器⑨	1～21(14号周溝墓 2 SD 10)
別冊第23図	方形周溝墓出土土器⑩	1～20(14号周溝墓 2 SD 10)
別冊第24図	方形周溝墓出土土器①	1～9・11(14号周溝墓 2 SD 10) 12(14号周溝墓 2 SD 28)、 10・13・14(14号墓 2 SD 11)
別冊第25図	方形周溝墓出土土器⑫	1～10(14号周溝墓 2 SP 174)
別冊第26図	方形周溝墓出土土器⑬	1～18(14号周溝墓 2 SP 174)
別冊第27図	方形周溝墓出土土器⑭	1(3 SD 47)、2～5(3 SD 48)、6(5 SD 25)、 7～14(3 SD 53)
別冊第28図	方形周溝墓出土土器⑮	1～4(3 SF 175)、5～8(3 SD 78)、 9(3 SD 51)、10(5 SD 17)、11・12(5 SD 18)、 13(5 SD 24)、14・15(5 SX 08)
別冊第29図	土器棺墓①	1～3(1号土器棺)、4～6(2号土器棺)
別冊第30図	土器棺墓②	1～3(2号土器棺)
別冊第31図	土器棺墓③	1～4(4号土器棺)、5・6(5号土器棺)
別冊第32図	土器棺墓④	1～4(6号土器棺)、5～7(7号土器棺)
別冊第33図	土器棺墓⑤	1(9号土器棺)、2(10号土器棺)、3・4(8号土器棺)
別冊第34図	弥生時代土坑出土土器①	1～8(2 SF 02)、9～19(2 SF 06)
別冊第35図	弥生時代土坑出土土器②	1～4(3 SF 154)、5～12(竪坑 SX 01)
別冊第36図	弥生時代土坑出土土器③	1～6(2 SF 10)、7～12(2 SF 17)、 13(2 SF 29)、14～16(3 SF 10)
別冊第37図	弥生時代土坑出土土器④	1・2(竪坑 SX 02)、3～5(2 SF 43)、6・7(5 SX 11)
別冊第38図	土器埋置小土坑出土土器①	1(2 SF 259)、2・4(3 SF 60)、3(3 SF 171)、 5(3 SP 190)、6(3 SP 338)、7(7 SF 16)
別冊第39図	溝状遺構出土土器①	1～18(3 SD 55)
別冊第40図	溝状遺構出土土器②	1～32(3 SD 55)
別冊第41図	溝状遺構出土土器③	1～15(3 SD 55)
別冊第42図	溝状遺構出土土器④	1～7(3 SD 55)、8～23(7 SD 55)
別冊第43図	溝状遺構出土土器⑤	1～18(7 SD 55)
別冊第44図	溝状遺構出土土器⑥	1～16(2 SD 40)
別冊第45図	溝状遺構出土土器⑦	1～6(2 SD 40)
	弥生時代土器集積2出土土器①	7～16
別冊第46図	弥生時代土器集積2出土土器②	1～21
別冊第47図	1区10層水田④出土土器	1～11(上層)、12～37(下層)
別冊第48図	7区上層水田出土土器	1～12(上層)、13～29(下層)
別冊第49図	8区下層水田畦畔出土土器	
別冊第50図	弥生湧水点上層出土土器	1～7(上層)、8～23(下層)
別冊第51図	弥生湧水点下層出土土器	1～11(1 SX 12)12～26(7 SX 02)
別冊第52図	SR 01　第Ⅰ層出土土器①	

別冊第53図　SR 01　第Ⅰ層出土土器②
別冊第54図　SR 01　第Ⅰ層出土土器③
別冊第55図　SR 01　第Ⅰ層出土土器④
別冊第56図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑤
別冊第57図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑥
別冊第58図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑦
別冊第59図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑧
別冊第60図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑨
別冊第61図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑩
別冊第62図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑪
別冊第63図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑫
別冊第64図　SR 01　第Ⅰ層出土土器⑬
別冊第65図　SR 01　第Ⅱ層出土土器①
別冊第66図　SR 01　第Ⅱ層出土土器②
別冊第67図　SR 01　第Ⅱ層出土土器③
別冊第68図　SR 01　第Ⅱ層出土土器④
別冊第69図　SR 01　第Ⅲ層出土土器①
別冊第70図　SR 01　第Ⅲ層出土土器②
別冊第71図　SR 01　第Ⅲ層出土土器③
別冊第72図　SR 01　第Ⅲ層出土土器④
別冊第73図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑤
別冊第74図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑥
別冊第75図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑦
別冊第76図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑧
別冊第77図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑨
別冊第78図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑩
別冊第79図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑪
別冊第80図　SR 01　第Ⅲ層出土土器⑫
別冊第81図　SR 01　第Ⅳ層出土土器①
別冊第82図　SR 01　第Ⅳ層出土土器②
別冊第83図　SR 01　第Ⅳ層出土土器③
別冊第84図　SR 01　第Ⅳ層出土土器④
別冊第85図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑤
別冊第86図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑥
別冊第87図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑦
別冊第88図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑧
別冊第89図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑨
別冊第90図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑩
別冊第91図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑪
別冊第92図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑫
別冊第93図　SR 01　第Ⅳ層出土土器⑬

別冊第94図　SR 01　第Ⅳ層①・第Ⅴ層出土土器①(第Ⅳ層)、(第Ⅴ層)
別冊第95図　SR 01　第Ⅴ層出土土器②
別冊第96図　SR 01　第Ⅴ層出土土器③
別冊第97図　縄紋流路①
別冊第98図　縄紋流路②、縄紋微高地
別冊第99図　突帯紋土器
別冊第100図　条痕紋土器①
別冊第101図　条痕紋土器②
別冊第102図　硯、瓦①
別冊第103図　瓦②
別冊第104図　蓋形土器
別冊第105図　ミニチュア土器
別冊第106図　台盤状土製品①
別冊第107図　台盤状土製品②
別冊第108図　台盤状土製品③
別冊第109図　台盤状土製品④
別冊第110図　台盤状土製品⑤
別冊第111図　有穴土器、耳付土器、紡錘車、土製円盤、ミニチュア土器
別冊第112図　絵画土器
別冊第113図　特殊土器
別冊第114図　土錘、その他土製品

第Ⅰ章　資料整理の概要

第1節　資料の概要

「人面付壺形土器」（弥生中期）

本遺跡では、縄紋時代から中世にいたる土器が多数出土している。特に弥生時代の自然流路SR01から出土した弥生時代中期から後期の土器の種類、量共に豊富である。以下に各時代の土器の出土状況について概述する。

中世から古墳時代　砂提列高所から南側斜面部にかけて鎌倉時代から室町時代を中心として、奈良・平安時代に及ぶ遺構（柱穴、土坑、溝、井戸など）が検出されている。なお、4層と5層を基盤層としており、砂提列南側低地部では、この4・5層で水田が確認された。土坑や井戸などの遺構に伴って多数の山茶碗などの陶器類が出土している。中世の遺構が前代の遺構及び包含層を破壊して構築されたため、遺構内の出土遺物は該当時期のものだけでなく、弥生時代の土器片など前時代の土器片が混在している。また、土器の外底面に墨書が見られる土器も出土しているが、記号と思われる墨書が多い。なお、土器の出土量に比べ、木製品の出土量は極めて少ないことを付け加えておく。

「絵画土器」（甕形土器・口縁内側の「シカ」・弥生中期後葉）

弥生時代　自然流路、水田、湧水地の遺構は南側低地部で、柱穴、土坑、溝、湧水地、方形周溝墓、土器棺墓などの遺構は砂提列高所とその北側及び南側斜面で検出され、それぞれの遺構に伴って土器が出土している。土器棺墓は5・6区を中心に7基検出され、土器棺は口縁部を欠いたものが多く、壺に甕で蓋をしたもの、胴下半部を欠いた大型壺を倒立させ埋納されているものも検出されている。また、5層の基本的堆積層からなる自然流路SR01からは、多量の土器と木製品及び石器が出土している。木製品が上層の第Ⅰ層、第Ⅱ層に集中しているのに対し、土器は各層から偏ることなく出土している。中でも、第Ⅰ層出土の「鳥形土器（弥生後期）」、第Ⅱ層出土の「甕形土器の口縁内側にシカの線刻が施された絵画土器片（中期後葉）」、「壺形土器の胴部に題材未確定の線刻が施された絵画土器（後期）」、第Ⅴ層出土の「人面付壺形土器（中期）」、「銅鐸形土製品（中期中葉）」、は、特筆すべき資料である。

「銅鐸形土製品」（弥生中期中葉）

この自然流路SR01を主として方形周溝墓、土器棺墓から出土した弥生時代中期中葉から後期前半を中心とする時期の土器・土製品は、静岡県西部の土器様相、中でも不明な点が多かった中期の土器様相を把握する上で重要な資料となる。また、他地域（愛知県以西）から運ばれたと推測される土器も若干量出土しており、当時の地域間交流を知る上で参考となる資料も認められる。

縄紋時代　縄紋時代後期から晩期に形成された自然地形である流路（SR02、SR03）と微高地の遺構が検出され、少量ではあるが縄紋土器（後期・晩期）が出土している。

話題を呼んだ角江遺跡の出土遺物

第2節　資料整理の方法・経過

角江遺跡の出土遺物の整理作業は、当研究所の「資料整理マニュアル」を原則として進められた。テンバコにして、約920箱に及ぶ多量の土器を限られた期間と労力で整理を進めるため、作業効率の面から改善を加えながら取り組んできた。

第1表　角江遺跡土器・土製品整理作業工程表

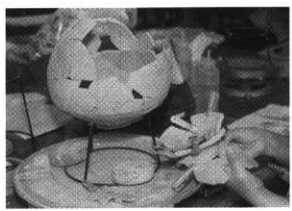
作業内容	平成3～5年度	平成6年度				平成7年度			
	現地	4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月	4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月
取り上げ	○								
登録	○								
水洗	○								
注記	○								
接合・復元		― ― ―	― ― ―	SR01― ―	― ― ―	― ― ―	― ―		
実測		― ― ―	― ― ―	→ SR01―	― ― ―	― ― ―	― ― ―		
実測図版組					―	― ― ―	― ― ―	― ―	
実測図版トレース						― ―	― ― ―	― ― ―	
写真用復元						― ―	― ― ―	―	
写真撮影						(1)	(2)	(3) (4)	
写真版組								―	―
カード作成			― ― ―	― ― ―	SR01― ―	― ― ―	― ― ―	― ― ―	― ―
コンピュータ登録									― ―
編集・校正									― ―
収納保管	○(一次収納)		二次収納―	― ― ―	― ― ―	― ― ―	― ― ―	保管1	保管2―
その他	人面土製、銅鐸形土製品記者発表						絵画土製記者発表	弥生土器検討会 県内巡回展示	

取り上げ・登録番号　調査で出土した土器は、包含層出土の場合には層単位・グリッド単位（20m四方）で取り上げ、遺構に伴う場合は遺構ごと・覆土別に取り上げた。主として遺構に伴う土器の出土状況は、実測と写真撮影で記録してから取り上げた。取り上げた土器には全て登録番号を付け、遺物台帳に登録した。なお、土器の登録番号は、遺物記号は用いず、取り上げ順に数字番号のみとし、土製品については遺物記号「Pt」を頭に数字番号を付け、登録番号とした。遺物台帳には、「登録番号」「遺物名」「取り上げた日付」「出土地点」「出土層位」「遺構名」「グリッド」を記録した。

水洗・注記・一次収納　多量の土器を傷つけずに効率よく水洗処理するには、水圧調節可能な動力噴霧機が欠かせない。水洗、乾燥後の注記は、水性のポスターカラー（白色）を用い、「遺跡記号－調査区－遺物番号」(例 TKE 3区 1129) を今後の整理作業に支障のない部位に小さく明瞭に記し、その上に透明ラッカーを塗り、消失を防いだ。注記の済んだ土器は、「調査地区」「グリッド」「層位」「遺構」ごとテンバコに収納（一次収納）し、接合作業を待つことになる。ここまでの作業を現地調査と並行して実施した。

接合・復元　現地調査終了後、整理事務所にて接合作業を開始した。上層の遺構に伴う土器からグリッドを単位に行った。出土土器の約6割を占める弥生時代の自然流路 SR 01（基本的堆積層Ⅰ～Ⅴの5層）出土土器は、上層よりグリッド単位に土器を器種（壺・甕・高坏・他）及び部位（口縁部・坏部・胴部・底部・脚部等）に分類し、同グリッドをはじめ隣接するグリッドと、のりしろを設けながら接合作業を続けた。接合が終了した土器は、実測するもの・拓本をとるものを選別し、実測に際し補強を要するも

のは石膏を入れ補強すると共に、可能な限り復元した。その他の土器は、グリッドごと器種・部位別にまとめテンバコに収納し保管となる。



土器接合・復元作業

実　測　B３判の方眼紙に行い、実測図には「図面番号」を付け、図面台帳に記録した。この図面番号がその土器の個体番号となるため、今後の整理作業において実測済み土器に使用する番号は図面番号を用いることになる。実測点数は、土器2705点（内 SR 01出土　1368点）、土製品298点（内 SR 01出土195点）を数える。実測図作成において、残存部をもとに欠損部分についても可能な限り作図・表現したため、反転復元の区別は図に示さなかった。実測済みの土器は「調査区」「遺構」「層位」等の基準でテンバコに入れ、テンバコ表面には収納土器の「図面番号」「調査区」「層位」「遺構」等を明示し、収納（二次収納）した。また、実測図は、遺物カード貼付用（原則として等倍）と実測図版組用（縮小 66.7%）の２種類のコピーを用意する作業もここで行った。

「人面付壺形土器」の実測作業と実測原図

写真撮影用復元・写真撮影　報告書掲載用として４×５判（モノクロ）で写真撮影する土器を選定し、写真撮影のための復元作業となる。ここでは、個体立面撮影のために、安定性を設けるための補強石膏入れと石膏復元した部分の彩色作業を行う。彩色作業では作業効率も考慮し、アクリル絵の具（水性）を使用し、グラデーションをつけず近似色単色塗りとした。アクリル絵の具は、ポスターカラーに比べ高価で彩色乾燥後は衝撃により剝離しやすいが、色づくりが容易で、のびがよく、塗りむらができず、

乾燥も早く、乾燥前後の色の差がほとんどない利点がある。写真撮影用の復元が終了した土器は、高さを基準に幅も考慮しながら、LL、L、M、S、SSの5サイズに遺構、層位等を超越して分類した。これは写真撮影の際、同サイズならカメラの位置設定を変えずに連続撮影が可能となるからである。写真撮影は、延べ7日間で、個体494カット集合12カットの撮影を実施し、ネガと報告書用と遺物カード貼付用の2枚のプリントを得ることを基本とした。また、どんなフィルムを使用しても退色、劣化は記録写真保存の課題である。そこで、記録写真を半永久的に保存可能な「フォトCD」でのデジタル保存も進めてきた。

図版作成　実測図版は仕上がりの縮尺3分の1、B4判無製本別冊とした。図版には、遺構及び層位を基準に出土土器を器種ごとに114図にまとめ、2096点の実測図を掲載した。実測図の番号は、図版ごとに1からの通し番号を与えた。写真図版は、実測図を掲載した土器から選択し、個体387カット、集合写真18カットを掲載し、74図となった。図版掲載の遺物写真の番号は、実測図に対応させ実測図版番号と実測図番号で示した。例えば、「実測図版第5図の12の実測図の遺物写真」には「5－12」の番号が与えられ、本文中での遺物を示す番号とも対応するものである。

遺物カード・コンピュータ登録　遺物カードは、遺物個々に作成し、その遺物に関する全ての情報を記録するものである。B4判横長サイズで、土器は水色、土製品はあさぎ色のカード台紙と、遺物ごと色分けされたカード台紙を使用している。また、遺物カードの情報はコンピュータに入力し、データベースを作成して、今後の検索活用が容易にできるようにシステム化を進めている。

収納・保管　調査・整理作業が終了した土器・土製品はテンパコに収納し、保管庫にて一括保管することになる。報告書掲載の土器・土製品は実測図版ごと、実測済み報告書未掲載の土器は遺構及び層位ごと、その他の土器は層位及びグリッドごと、土製品は器種ごとテンパコに収納内容を明示して収納、保管した。

広報・情報の公開　埋蔵文化財は県民をはじめ国民の共有の財産であり、埋蔵文化財事業は地域住民及び県民・国民の理解なくして円滑な運営は不可能と言える。当研究所では年に1回定期的に「静岡の原像をさぐる」と題して埋蔵文化財発掘調査報告会を開催したり、研究所報等を定期的（隔月）に発行したりと広報活動を実施している。研究所報では、検出遺構や出土遺物など現地調査や整理作業の成果を速報的に関係機関及び学校を中心に知らせている。本遺跡の発掘調査の成果に関しては、研究所報№36・42・43・47・50・53・59に掲載した。それらの機会や報告書の刊行のみならず、現地調査及び整理作業を通して主に地域住民や一般県民を対象とし機に応じて積極的に実施してきた。「人面付盌形土器」（平成5年11月）「銅鐸形土製品」（平成5年11月）「絵画土器」（平成7年9月）など重要資料となる遺物の出土・発見に際しては、記者発表会を設定しマスコミを通じて公開してきた。現地調査終盤（平成6年1月）には、発掘調査過程の紹介・出土遺物の展示や検出遺構の説明など発掘調査の成果を地元の浜松市立西都台小学校を会場に一般公開した。また、静岡県教育委員会の「平成7年度ふるさと文化財ふれあい事業」の一環として企画し県下の東部・中部・西部の3会場で実施した「埋蔵文化財巡回展」（平成7年10月から11月）では、「比べてみよう西の土器・東の土器」の展示コーナーを設け、本遺跡出土の土器を県西部出土の土器として紹介し、県東部出土の土器との紋様やスタイルなどの相違を示すことで一般の方にも理解しやすく、関心を引く展示をするなど広報・情報の公開に努めてきた。

第II章　土　器

今回の調査では、縄紋時代から中世にわたる時期の遺構・遺物が検出されている。特に土器棺墓や方形周溝墓、自然流路から出土した弥生土器・土製品は、質・量共に西遠江では近年例を見ないもので、従来、不明な点が多かった西遠江の土器を様相を把握する上で参考となる資料である。本章では土器について時代順・遺構別を原則に報告する。

第1節　中世から古墳時代

本節では、古墳時代以降の出土土器の中から図版掲載土器について図版番号・器種・法量・時期・産地等をまとめた一覧表を掲載し、個々の土器について器形、調整及び若干の所見を記述していく。なお土器の器種・時期・産地等について、当研究所の佐野五十三調査一課長、足立順司主任調査研究員、河合　修調査研究員、岩本　貴調査研究員、勝又直人技術職員の協力を得た。また、折戸53号窯式の年代については、楢崎彰一氏（1983）等に代表される編年案によるものであることを前置きしておく。

1　7区水田出土土器

7区4層水田　1-1・3・6は山茶碗である。1-3は体部が直線的に立ち上がり口縁端付近が外反している。底部外面には三巴が墨書されており、高台は扁平である。1-1・6は底部付近のみが残存し、1-6には底部外面に墨書の痕跡が認められ、高台は消滅している。

1-4・5は須恵器である。1-4は合子状坏蓋で、天井部は弓張り状を呈し、天井部と口縁部の境には明瞭な稜線と沈線が認められる。口縁部は直線的に下ろされ、口縁端部はやや外傾的に仕上げられている。1-5は高台の無い坏身である。全体的に弓張り状を呈し、体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部をやや外傾させ丸く仕上げており、底部外面には静止糸切り痕及び「大力」もしくは「大廿」とも判読できる墨書が観察される。

1-2は土師器・坏身である。器面の内外面共にヨコナデされており、赤彩の痕跡が遺る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部内側にわずかに稜線が認められる。

7区5層水田　1-8～11・15は須恵器・高台の無い坏身である。1-8は体部をやや内湾気味に立ち上げ、口縁端部を丸く仕上げている。1-10は体部が内湾して立ち上がり、底部は平坦であるが、摩滅気味で調整は不明瞭である。1-11は全体的に弓張り状を呈し、体部はやや内湾気味に立ち上がり、底部には同心円形の回転ヘラケズリが施されている。この3点より後出の要素が認められるのが、1-9・15である。1-9は体部が直線的に立ち上がり口縁端部は丸く仕上げている。底面外部には回転ヘラケズリがなされ、色調は黄灰色で焼成はやや不良と思われる。1-15も体部が直線的に立ち上がり、底部外面は回転ヘラケズリが施されており、底部中央の器厚は薄く仕上がっている。1-13は高台を有する坏身で、高台の断面形は四角形で、底部外面には墨書が認められる。1-16は須恵器・長頸壺の頸部である。やや外反気味に立ち上がり、肩がわずかに残る。口縁部と頸部との接合部内面には接合時のキザミメが残る。1-7は須恵器合子状坏蓋の完形品である。全体的に弓張り状を呈し、口縁部は直線的であり、天井部外面には渦巻き状の回転ヘラケズリが施されており、天井部にはヘラ記号が描かれている。1-14は須恵器・合子状坏身である。全体的に弓張り状を呈し、口縁部は内傾して立ち上がり、底部にはヘラケズリが施されている。

1-12は土師器・坏身である。体部はわずかに直線的に立ち上がるが、口縁部を外傾させている。内面

には稜線が認められる。器面は全体にヨコナデが施され、底部外面には墨書が認められる。

1-17～19の3点は混入品である。1-17は灰釉陶器である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で外反させている。高台の断面形は三日月形を呈し、底部外面には高台を張り付ける際にナデ調整が施されているが、中央部にはヘラケズリ痕が観察される。1-18は山茶碗の底部付近である。1-19は瀬戸・美濃系の足付皿と思われ、底部には糸切り痕が明瞭に観察される。

第2表　7区水田出土土器一覧表

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
7区4層水田								
1-1		山茶碗　碗		〈1.7〉	7.8	13C前	渥美・湖西	
1-2		土師器　無台坏	〈12.4〉	3.7	〈6.6〉	9C？		赤彩
1-3	1	山茶碗　碗	15.2	4.5	7.7	13C前	渥美・湖西	墨書土器(三巴)
1-4		須恵器　蓋	〈12.8〉	〈3.4〉		6C	湖西	
1-5		須恵器　無台坏	〈12.9〉	4.1	〈5.2〉	8C中	湖西	墨書土器
1-6		山茶碗　碗		〈1.8〉	〈7.3〉	13C後	湖西	墨書土器
7区5層水田								
1-7	1	須恵器　坏蓋	10.6	3.4		7C前	湖西	ヘラ記号
1-8		須恵器　無台坏	〈13.6〉	3.9		8C前	湖西	
1-9	1	須恵器　無台坏	12.1	3.7	7.6	9C前	湖西	
1-10		須恵器　無台坏	〈11.7〉	3.2	〈7.6〉	8C前	湖西	
1-11	1	須恵器　無台坏	〈13.9〉	4.5	5.0	8C前	湖西	
1-12	1	土師器　無台坏	〈11.2〉	3.2	〈6.4〉	8C後～9C前		墨書土器
1-13	1	須恵器　有台坏		〈1.5〉	〈7.0〉	8C	湖西	墨書土器
1-14		須恵器　無台坏	〈9.1〉	3.2		7C前	湖西	
1-15		須恵器　無台坏	〈14.8〉	5.4	〈9.0〉	9C？	湖西	
1-16		須恵器　長頸壺		〈11.0〉		8C	湖西	
1-17	1	灰釉　有台坏	〈14.0〉	〈4.0〉	6.8	10C後	猿投	折戸53号窯式
1-18		山茶碗　碗		〈2.0〉	〈7.2〉	13C前	渥美・湖西	墨書土器
1-19		陶器　足付皿		〈1.8〉	〈6.0〉	15C？	瀬戸・美濃	
7区6層水田								
1-20		須恵器　有台碗	〈17.4〉	5.7	〈10.0〉	8C後	湖西	
1-21		須恵器　皿	〈14.6〉	2.2	〈15.2〉	8C後	湖西	
1-22		須恵器　高坏		〈6.8〉	〈7.8〉	8C	湖西	脚部
1-23	2	須恵器　無台坏	〈11.2〉	3.7	6.0	8C前	湖西	
1-24	2	須恵器　長頸瓶		〈13.1〉	8.0	8C前	湖西	

7区6層水田　5点の須恵器を図版に掲載した。**1-20・21**は墨書土器である。**1-20**は碗で、平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を面取りした上で外方に引き出している。底部外面には低めの高台が貼り付けられている。**1-21**は皿で、口縁端部は面取りし、外傾させている。底部外面に回転ヘラケズリが認められる。**1-22**は高坏の脚部で、端部の外側を摘み上げて稜線を作り出している。**1-23**は高台の無い坏身で、全体的に箱形を呈し、体部を直線的に立ち上げる。底部外面には同心円状の回転

ヘラケズリが施されている。1-24は長頸瓶の胴部で、頸部から上は欠損しており、やや内湾気味に立ち上がり、肩部は緩やかに屈曲して頸部に至る。胴部下半部はヘラケズリが施され、やや高さがある高台が貼り付けられている。

2　中世水田面検出土坑出土土器

第３表　中世水田面検出土坑出土土器一覧表

2 SF32			法量 cm					
図版番号	写真図版	器種	口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
2-1		山茶碗　碗		〈1.9〉	6.6	13C後	渥美・湖西	墨書土器　転用硯？
2-2		山茶碗　碗		〈1.4〉	7.8	13C後	渥美・湖西	墨書土器
2-3		山茶碗　碗		〈1.4〉	〈5.7〉	13C後	渥美・湖西	墨書土器
2-4	2	山茶碗　小皿	8.1	1.4	4.9	13C後	渥美・湖西	墨書土器
2-5		山茶碗　碗		〈3.3〉	7.2	13C後	渥美・湖西	
2 6		山茶碗　碗		〈2.6〉	7.3	13C後	渥美・湖西	内面平滑　墨液痕？
2-7	2	山茶碗　小皿	7.8	2.0	4.5	13C前	渥美・湖西	
2-8		山茶碗　小皿	7.8	1.8	4.2	13C前	渥美・湖西	
2 SF39			法量 cm					
図版番号	写真図版	器種	口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
2 9		土師質土器　カワラケ	〈9.8〉	2.1		12C中～13C		

２ＳＦ32　2-1～4は底部外面に墨書が認められる山茶碗である。2-1～3は碗の底部で高台が消滅した段階の所産である。2-1は内面に墨が付着しており、転用硯の可能性がある。2-3の底部外面の墨書は「力」と読める。2-4は小皿で、底部外面に墨書が観察される。2-5・6は山茶碗・碗の底部と思われ、扁平な高台が貼り付けられている。2-6は内面の墨の付着から転用硯の可能性があり、高台は2-5と比べて高めである。2-7は比較的器高が高い山茶碗・小皿である。2-8も山茶碗・小皿で、体部はやや外反気味に立ち上がる。2-7・8以外は全て13世紀後半に位置付けられる。

２ＳＦ39　2-9はカワラケで、手捏ね成形と思われる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部をやや内傾させ、底部及び体部には指頭痕が明瞭に観察される。内面はナデにより指頭痕の大部分を消し、底部はかなり薄い仕上がりとなっている。色調は浅黄橙色で胎土には白色粒子を含む。

3　奈良時代不定形土坑出土土器

３ＳＸ15　2-10は合子状の坏部を有する須恵器・高坏で脚部は欠損している。口縁部は垂直に立ち上がり、内外面共にヨコナデが施されているが、外面下半部はヘラケズリを施している。2-11は須恵器・壺蓋で、口縁部の一部以外は欠損している。2-12は須恵器・壺の口縁部で直線的に立ち上がり、口縁端部は外傾気味に丸く仕上げている。口縁部と頸部との境には明瞭な沈線と稜線を巡らせている。2-14は須恵器・高坏で、脚部は欠損している。坏部は全体的に弓張り状を呈し、底部から内湾気味に立ち上がり、体部のほぼ中央で明瞭な稜線を設け、口縁部は外反して立ち上がる。体部下半部はヘラケズリとヨコナデによる調整が施されている。2-15は須恵器・甕で、肩部にはタタキメがわずかに残る頸部と肩部の境にはヘラケズリが施され、頸部は外湾気味に立ち上がる。口縁端部は下方に引き延ばし、頸部中位

の凸帯が消失しているが、口縁端部の形状は古い要素を持つ。8世紀代中頃の所産か。2-13は土師器・坏身で、須恵器の合子状坏身を模倣したものである。

第4表　奈良時代不定形土坑出土土器一覧表

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
3 SX15								
2-10		須恵器　高坏	〈10.0〉	〈3.3〉	〈3.2〉	6C末	湖西	
2-11		須恵器　壺蓋	〈12.3〉			7C後	湖西	
2-12		須恵器　壺	9.2	〈1.3〉		5C後～6C前	湖西	
2-13		土師器　坏	〈12.6〉	〈2.6〉		6C末		
2-14	2	須恵器　高坏	〈14.1〉	〈5.2〉		6C後	湖西	
2-15		須恵器　甕	〈21.8〉	〈6.3〉		8C	湖西	
3 SX17								
2-16		土師器　甑		〈7.6〉		6C後		
2-17		土師器　甕	24.2	〈3.1〉		8C		
2-18		土師器　甕	〈36.0〉	〈7.1〉		6C後		
2-19		土師器　甕	〈27.0〉	〈3.9〉		6C後		
3-1		須恵器　坏蓋	〈15.2〉	〈1.9〉		8C前	湖西	
3-2	2	須恵器　坏蓋	〈9.0〉	2.3		9C前	湖西	摘み最大径1.7cm　高さ1.5cm
3-3	2	須恵器　壺蓋	〈7.0〉	2.4		7C後	湖西	摘み最大径1.5cm　高さ0.9cm
3-4		土師器　坏蓋		2.5		8C		
3-5		須恵器　有台坏		〈2.2〉	〈10.4〉	8C中	湖西	
3-6		須恵器　有台坏	〈9.9〉	3.9	〈5.2〉	8C前	湖西	
3-7	2	須恵器　無台坏	〈13.4〉	3.0	〈8.6〉	8C末～9C初	湖西	
3-8		須恵器　無台坏	〈8.9〉	3.3	〈6.6〉	8C末～9C初	湖西	
3-9	2	須恵器　無台坏	〈12.3〉	5.8	〈8.7〉	8C末～9C初	湖西	
3-10		須恵器　無台坏	〈12.8〉	4.9	〈8.9〉	8C末～9C初	湖西	
3-11		須恵器　無台坏	〈12.2〉	5.0	〈8.8〉	8C末～9C初	湖西	
3-12	3	須恵器　無台坏	〈11.8〉	4.3	7.0	8C末～9C初	湖西	
3-13	3	須恵器　無台坏	〈14.5〉	6.6		8C末～9C初	湖西	
3-14		須恵器　無台坏	〈16.8〉	6.4	〈11.9〉	8C末～9C初	湖西	
3-15	3	須恵器　無台坏	〈10.1〉	4.3	〈4.8〉	8C前	湖西	双耳坏
3-16		須恵器　長頸瓶	〈5.9〉	〈9.1〉		8C後	湖西	
3-17	3	須恵器　皿	〈15.1〉	1.7	9.8	8C後	湖西	底部完形
3-18	3	須恵器　皿	〈15.8〉	3.9	2.9	8C後	湖西	
3-19		土師器　有台坏	〈12.1〉	5.5	〈6.4〉	8C前		赤彩
3-20		土師器　碗		〈1.7〉	〈7.2〉			赤彩
3-21		土師器　甕	〈13.0〉	〈5.8〉		7C？		
3-22		土師器　高坏		〈9.0〉		6C後		赤彩
3-23		土師器　鉢	〈15.7〉	〈7.6〉		7C？		
3-24	3	土師器　甕	〈17.2〉	〈11.7〉		6C		
3-25		土師器　皿	〈16.1〉	〈2.4〉		8C前		赤彩
3-26		土師器　皿	〈17.8〉	〈1.8〉	〈15.0〉	8C前		
3-27		土師器　甑		〈4.7〉	〈10.0〉	8C？		穿孔土器

3 S X17　この土坑からは多量の土器が出土しており、図版に掲載したのは須恵器19点、土師器14点である。そのうち須恵器の坏蓋は明らかに硯に転用されており、本章第3節の土製品で扱った。

3-1～3は須恵器・蓋である。3-1の摘みは欠損しており、蓋頂部付近に幅広くヘラケズリが施されている。3-2の摘みの形状は宝珠状で、体部中位までヘラケズリが施されている。3-3は遊蓋か。摘みの形状は乳頭状を呈し、体部中位までヘラケズリが施されている。かえりは内傾し、端部を丸く仕上げている。須恵器・坏身は11点掲載した。3-5は高台を有する坏身で、残存する底部外面に回転ヘラケズリが観察される。3-6も高台を有する坏身である。体部を直線的に立ち上げ、口縁端部を丸く仕上げている。3-7～14までは全体形が箱形を呈する高台の無いの坏身である。平坦な底部から体部を直線的に立ち上げている。3-9・11は渦巻き状に、3-7・8・10・12・14は同心円状にヘラケズリを施している。3-7の口縁端部は外傾させており、3-8は外面の周縁にヘラケズリが施されているが、その幅は3-7よりもさらに狭い。3-9は口縁端部を丸く仕上げ、3-10の口縁端部はやや膨らみのある仕上げとなっている。3-11の体部はやや直立気味に立ち上がり、3-12の外面の周縁はヘラケズリ後にナデが施されている。底部が欠損している3-13は、前記の坏身より外傾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りが施されている。3-15は双耳坏で、耳は欠損している。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反気味に仕上げている。底部外面は回転ヘラケズリが施され、外面の周縁はわずかにヘラケズリ後、ナデが施されている。3-16は長頸瓶の頸部である。肩部から外湾気味に立ち上がり、口縁部はさらに外反させている。3-17は皿で、口縁端部をやや下方に折り曲げている。底部外面は回転ヘラケズリが施され、周縁にはヘラケズリ後にナデが施されている。3-18も皿で、体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転ヘラケズリが施されている。

土師器は13点掲載した。2-16は甑で、残存しているのは把手付近のみである。2-17～19、3-24は甕である。2-17の口縁部は大きく外反し、口縁端部をわずかに外反させ、丸く仕上げている。内外面共にヨコナデが施されている。2-18の口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面共にヨコナデが施され、器面の一部に煤が付着している。2-19の口縁部はやや外反気味に立ち上げ、口縁端部を丸く仕上げている。端部直下にわずかに稜線を巡らし、体部内面にはハケ調整が施されている。3-24は甕で、口縁部はやや外湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。体部外面には縦方向の、内面には横方向のハケ調整が施されている。頸部外面まで縦方向のハケ調整が施されているが、ヨコナデにより消されている。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のハケ調整が施され、体部下半部には被熱のため赤色化し、一部に煤が付着している。3-4は蓋の摘みで、外面に赤彩が認められる。3-19は高台を有する坏身で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部をヨコナデによりわずかに外反気味に仕上げている。口縁直下には指頭痕が、体部内面から口縁部外面にかけては赤彩が観察される。3-17は高台を有する椀で、底部内面に赤彩の痕跡がある。3-21は鉢で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾している。口縁部外面はヨコナデを、内面はハケ調整後にヨコナデを施し、体部外面は縦方向のハケ調整の後にナデ、内面はイタナデを施している。体部外面には煤が付着している。3-23も鉢と思われ、口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ調整後、ヨコナデを施している。体部内面はイタナデが施され、外面下半部に煤と輪積みの痕跡がわずかに観察される。3-22は高坏で、坏部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。磨滅のため器面調整は不明であるが、坏部内面に赤彩の痕跡がわずかに観察される。3-25・26は皿である。3-25の体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げ、全面に赤彩が観察される。3-26の口縁端部はヨコナデにより面的に仕上げられ、全面にナデが施されている。3-27は甑の底部で、体部外面は縦方向に、内面は横方向にイタナデが施されている。

4　土堤状遺構を持つ土坑出土土器

２ＳＦ30　3-28は山茶碗・小皿で、体部は直線的に立ち上がり、器高は比較的高めである。底部外面に墨書と糸切り痕が観察される。3-29は山茶碗・碗の底部である。器厚は比較的肉厚で、内面には炭が

吸着している。色調は鈍い黄橙色で胎土の粒子が荒いが、技法的には渥美・湖西の系譜を引くものと思われる。3-30は須恵器・高台を有する坏身である。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。

第5表　土堤状遺構を持つ土坑出土土器一覧表

2 SF30									
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
3-28		山茶碗　小皿	8.2	2.3	5.6	13C前	渥美・湖西	墨書土器
3-29		山茶碗　碗		〈2.9〉	6.4	13C前	渥美・湖西	
3-30		須恵器　有台坏		〈1.3〉	〈10.2〉	8C	湖西	

5　中世素掘井戸出土土器

第6表　中世素掘井戸出土土器一覧表

3 SE01								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
4-1	3	山茶碗　片口鉢	〈26.4〉	〈10.8〉		12C後		
3 SE02								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
4-2	3	山茶碗　碗	〈15.4〉	5.4	〈8.5〉	12C中～後	渥美・湖西	
4-3	3	山茶碗　小皿	7.8	1.7	4.9	13C前～中	渥美・湖西	ほぼ完形　墨書土器
4-4	4	山茶碗　碗	〈15.6〉	5.6	7.4	13C前	渥美・湖西	
4-5	4	山茶碗　碗	14.8	5.2	6.2	13C前	渥美・湖西	完形
4-6	4	山茶碗　碗	〈16.8〉	〈7.2〉	5.3	13C前	渥美・湖西	
4-7	4	山茶碗　碗	〈14.9〉	5.2	6.6	13C前	渥美・湖西	
4-8	4	山茶碗　碗	〈15.3〉	〈7.0〉	〈5.4〉	13C前	渥美・湖西	
4-9	4	山茶碗　碗	13.7	5.0	6.1	13C前	渥美・湖西	完形
4-10		山茶碗　碗	〈15.2〉	4.4	6.0	13C前	渥美・湖西	
4-11		山茶碗　碗		2.5	6.4	13C前	渥美・湖西	
4-12		山茶碗　碗	〈2.6〉	〈2.6〉	6.8	13C前	渥美・湖西	底部完形
4-13		山茶碗　碗		〈2.8〉	〈7.3〉	13C前	渥美・湖西	底部完形
4-14	4	山茶碗　大平鉢	〈33.0〉	〈12.5〉		12C中	渥美・湖西	
4-15		弥生　壺	〈27.8〉	〈9.1〉		中期後半		
4-19		弥生　壺		〈7.7〉	11.3	6C？		
3 SF142								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
4-16		山茶碗　小碗	10.2	2.7	5.5	12C前	渥美・湖西	
4-17		土師質土器　托	〈17.0〉	5.4	7.4	11C後		
3 SF134								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
4-18		土師器　無台坏	〈10.6〉	3.5		8C前		

〈第6表　中世素掘井戸出土土器一覧表〉

4 SD09

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
4-20		弥生　甕	〈29.8〉	〈24.5〉		中期後半		

2 SE11

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
5-1	4	土師質土器　カワラケ	10.4	〈2.3〉		15C中～後		胴部に径0.5cmの穴
5-2		山茶碗　碗		〈2.5〉	5.6	13C中～後	渥美・湖西	
5-3		山茶碗　碗		〈1.9〉	6.0	13C中～後	渥美・湖西	
5-4		土師質土器　内耳鍋	〈23.0〉	〈5.6〉		15C後～16C前		
5-5		陶器　鉢	〈29.0〉	〈5.7〉		15C中	志戸呂(三ツ沢)	
5-6		土師質土器　内耳鍋	〈22.1〉	〈6.4〉		15C後～16C前		
5-7		陶器　鉢	〈26.8〉	〈11.4〉		15C中～後	常滑	
5-8		土師質土器　内耳鍋	〈20.0〉	〈11.2〉		15C後～15C前		
5-9		弥生　坩		〈6.6〉	〈6.0〉	後期		
5-10		弥生　壺	〈16.2〉	〈10.5〉		中期後半		
5-11	4	土師質土器　内耳鍋	〈25.5〉	〈12.2〉		15C後～15C		
5-12	4	須恵器　無台坏	〈9.4〉	〈4.5〉	4.0	5C後半	湖西	
5-13		弥生　壺	〈16.0〉	〈10.5〉		中期後半		
5-14	5	土師器　高坏		〈8.7〉	〈10.2〉	5C後半		
5-15		弥生　高坏		〈11.4〉		後期		三方すかし
5 16	5	弥生　壺	〈14.4〉	〈8.5〉		中期後半		

5 SF08

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
6 1	5	山茶碗　碗	15.4	4.7	8.3	13C前	渥美・湖西	墨書土器

5 SF09

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
6-2	5	山茶碗　碗	〈14.4〉	4.3	〈6.6〉	13C前	渥美・湖西	

3 SE01　4-1は片口鉢である。体部は直線的に立ち上がり、丸みを持つ口縁端部はやや面的に仕上げられている。注ぎ口は口縁端部を押し下げて作り、体部の下端部にはヘラケズリ痕が認められる。

3 SE02　出土土器から復元可能な15点を図版に掲載した。4-3は山茶碗・小皿で、口縁端部は丸く仕上げられている。底部外面の墨書は「＋」と判読され、糸切り痕も観察される。4-2・4～13は碗で、器形がわかるのは、4-7～10である。体部が直線的に立ち上がる4-5・9の他は、体部をわずかに内湾させ口縁部を外反させている。4-2は比較的器厚があり、高台にはもみ殻痕が明瞭に観察される。4-4は底部外面には扁平な高台が貼り付けられ、もみ殻痕も観察される。4-5は碗でほぼ完形である。底部外面には糸切り痕が、扁平な高台にはもみ殻痕が観察される。4-6は口縁端部を工具で面取りした後にヨコナデを施している。底部外面には糸切り痕が観察される。4-7の底部内面には炭化物が付着している。底部外面には糸切り痕が、高台にはもみ殻痕が観察される。4-8の底部外面には糸切り痕が観察される。4-9は底部から口縁部まで直線的に立ち上げられている。底部外面に貼り付けられた高台はつぶれており、もみ殻痕が観察され、糸切り痕はナデにより消されている。4-10の口縁端部はわずかに面的に仕上げられ、胎

土中に白色粒子を比較的多く含む。4-11～13は碗の底部であり、底部外面の糸切り痕はナデにより消され、4-13の扁平な高台には、もみ殻痕が観察される。4-14は大平鉢である。腰部はわずかに丸みを持ち、体部を内湾気味に立ち上げている。口縁端部はヨコナデにより外傾させ、丸く仕上げている。残存部下端には高台を貼り付けた痕跡があり、体部下半部にはヘラケズリが施されている。

なお、4-15・19の甕は、弥生時代中期後半の混入品である。

3 S F 142　4-16は山茶碗・小碗である。口縁部をやや強めにヨコナデを施した結果、体部中位にわずかに稜線が生じている。底部外面に高めの高台が貼り付けられ、断面はやや潰れた三角形状を呈している。糸切り痕はナデにより消されている。見込みには重ね焼きの痕跡が認められ、体部内面には自然釉が付着している。4-17はロクロ成形の土師質土器で、器種は托と思われる。坏部をわずかに外反気味に立ち上げており、口縁端部を丸く仕上げている。底部外面には糸切り痕が観察され、高台は高めで「八の字」状に貼り付けられ、内外面共にヨコナデが施されている。全体的に丁寧な作りで焼成も良好であり、坏部内面には炭が吸着している。

3 S F 134　4-18は土師器・坏身で、体部を内湾気味に立ち上げている。体部外面はナデが施され、輪積み痕が観察される。内面には横方向にハケ調整が施され、器厚は全体的に薄い。

4 S D 09　4-20の甕は、弥生時代中期後半の混入品である。

2 S E 11　5-1はほぼ完形のカワラケである。手捏ね成形で体部を内湾気味に立ち上げている。器面はナデ調整で全体に指頭痕が観察される。体部に1ヵ所穿孔が施され、焼成後に両側から穿孔されたものである。色調は浅黄橙色で、胎土は密である。5-2・3は山茶碗の底部で、底部外面はナデにより糸切り痕を消し、扁平な高台が貼り付けてある。

5-4・6・8・11は内耳鍋である。本遺跡で耳が残存するのは5-4だけである。体部は偏球形で、口縁部を「くの字」状に立ち上げ、口縁部は内外面共にヨコナデが施されている。体部外面の調整はユビナデ（5-6）とハケ調整（5-8・11）で、5-11の下半部は後からヘラケズリが施されている。内面の調整は、イタナデ・ハケ調整（5-8・11）とユビナデ（5-6）である。5-5は鉢で、体部を外反気味に立ち上げている。5-7も鉢で、体部を直線的に立ち上げ、口縁端部は内外側に向けて引き延ばしている。体部に指頭痕が、内面下半部に使用による磨滅が観察される。

5-12は須恵器・合子状坏身である。体部は弓張り状を呈し、口縁部は内傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部はヨコナデにより外傾させている。体部の下半部には回転ヘラケズリが施されている。5-14は古墳時代の高坏である。脚部は外湾気味に広げ、端部を丸く仕上げている。5-16は壺の口頸部で、口縁部中位に稜線を貼り付けている。なお、5-10・13は弥生時代中期後半、5-9・15は弥生時代後期、5-12・14・16は古墳時代中期後半の混入品である。

5 S F 06　6-1は山茶碗である。体部を直線的に立ち上げ、口縁部をわずかに外反させている。口縁端部は丸く仕上げ、底部外面には扁平な高台が貼り付けられ、糸切り痕と墨書が観察される。

5 S F 09　6-2は山茶碗である。体部を直線的に立ち上げ、口縁部をわずかに外反させている。口縁端部は面取りされ、底部外面には扁平な高台が貼り付けられている。

6　奈良時代井戸出土土器

第7表　奈良時代井戸出土土器一覧表

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
5 SF11								
6-10		灰釉陶器　碗		〈3.1〉	〈7.6〉	10C後半		
5 SF12								
6-3		土師器　皿	21.1	〈2.5〉		8C前		赤彩
6 4	5	須恵器　坏蓋	12.0	3.4		8C後	湖西	摘み　最大径1.5cm高さ1.4cm
6-5	5	須恵器　坏蓋	13.6	3.3		8C後	湖西	摘み　最大径2.0cm高さ1.0cm
6-6	5	須恵器　無台坏	8.8	〈3.3〉		7C前	湖西	ヘラ記号
6-7	5	須恵器　無台坏	11.5	3.7	7.8	8C後	湖西	
6-8	5	須恵器　無台坏	11.6	3.9	8.7	8C後	湖西	
6-9		須恵器　皿	15.0	2.9		7C後	湖西	
6-11	6	須恵器　長頸瓶		〈14.2〉	9.2	8C後	湖西	
6-12		須恵器　長頸瓶		〈11.0〉	〈11.4〉	8C前	湖西	
6 14		須恵器　長頸瓶		〈5.9〉	〈12.2〉	8C後	湖西	
6-15		弥生　壺	〈12.2〉	〈4.4〉		中期後半		
6-16	6	須恵器　平瓶	7.3	12.6	10.4	8C		把手付き
6-17		弥生　壺	〈23.2〉	〈3.9〉		中期後半		
5 SF13								
6-13	6	土師器　鉢	〈17.0〉	〈10.5〉	〈4.2〉	8C		

5 SF11　6-10は灰釉陶器で、碗の底部と思われる。底部外面に比較的高めの高台が貼り付けられ、高台は「八の字」状に開く。

5 SF12　多くの土器が出土しており、土師器1点、須恵器9点、他時期の混入品2点を掲載した。

6-3は土師器・皿である。体部は直線的に立ち上げ、口縁端部はヨコナデにより外傾気味に仕上げられている。器面全面にナデが施されており、赤彩されている。

6-4・5は摘みが宝珠状の須恵器・坏蓋である。全体が弓張り状を呈し、頂部から体部の中位までヘラケズリを施す。体部内面には重ね焼きの痕跡が顕著に観察される。6-6は台子状坏身である。全体的に半球状を呈し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に仕上げられいる。底部外面はナデが施され、焼成する前にヘラ記号が描かれている。6-7・8は高台の無い坏身である。全体が箱形を呈し、底面外面には同心円上の回転ヘラケズリが施されており、6-8は口縁端部をヨコナデでやや外傾気味に仕上げている。6-9は皿で、全体的に弓張り状を呈し、体部中位に屈曲部を持つ。口縁端部は面的でやや外方に張り出し、底面外面にはヘラケズリが施されている。6-11は長頸瓶の胴部である。胴部は全体的に丸味を帯びているが胴下半部はやや直線的でヘラケズリが施されている。底部外面には高台が貼り付けられ、糸切り痕が観察され、底部には窯体の一部が固着している。6-12も長頸瓶の胴部で全体的に逆台形である。胴部外面はヘラケズリとナデが施され、底部外面には扁平な高台が貼り付けられている。6-11より後出の器形である。6-14は長頸瓶の底部である。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部外面の周縁に貼り付けられ、高台断面は三角形である。6-16は平瓶で、全体形は丸味を帯びた算盤玉状を呈する。体部は

内湾気味に立ち上げられ、屈曲して天井部に至り、天井部には自然釉が付着している。把手の断面は長方形で、天井部に貼り付けられた後にヘラで成形されている。口頸部は斜位に開口するように付けられ、やや外傾気味に立ち上げ、口縁部は外反させている。口縁端部は丸く仕上げられ、体部はヘラケズリ後にナデが施されている。底部外面は回転ヘラケズリ後にナデが施されいる。胎土から湖西産と考えられ、猿投窯編年では同様の器形を呈する平瓶が8世紀代で認められている。

なお、6-15の甕は古墳時代の、6-17の甕は弥生時代中期後半の混入品である。

5SF13　6-13は土師器の鉢である。体部は直線的に立ち上げ、肩部付近で内湾させている。口縁部から外反させ、口縁端部は丸く仕上げている。体部外面には指頭痕と輪積み痕が観察され、内面にはイタナデが施されている。口縁部は内外面共にナデが施されている。

7　古墳時代井戸出土土器

第8表　古墳時代井戸出土土器一覧表

3SE04

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-1	6	土師器　甕		〈17.2〉		6C後		

3SE04　7-1は古墳時代中期後半の甕で、長胴気味の球状を呈する。体部外面には縦方向、内面には横方向のハケ調整が施され、体部外面には黒斑が認められる。

8　奈良時代曲物井戸出土土器

第9表　奈良時代曲物井戸出土土器一覧表

2SE08

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-2		須恵器　無台坏	〈10.8〉	4.2	〈9.1〉	8C中	湖西	墨書土器
7-3		須恵器　無台坏		〈8.4〉	〈8.8〉	8C中	湖西	墨書土器

2SE08　7-2は高台の無い坏身で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りされている。底部外面には同心円状の回転ヘラケズリが施され、墨書が認められる。7-3は坏身の底部である。底部外面には回転ヘラケズリが施され、墨書が認められる。

9　平安時代曲物井戸出土土器

3SE21　7-6はカワラケで、手捏ね成形で体部を内湾気味に立ち上げている。口縁部はヨコナデが施され、器厚は薄く仕上げられている。色調は鈍い橙色で胎土には砂粒が混入している。

3SE22　7-7は鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外面に向けて引き延ばしている。体部外面には指頭痕が顕著に認められる。

第10表　平安時代曲物井戸出土土器一覧表

3 SE21									
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-6		土師質土器 カワラケ	〈8.4〉	1.7		15C		
3 SE22								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7 7		陶器 鉢	〈25.3〉	〈10.2〉		15C中～後	常滑	
3 SE23								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-8	6	須恵器 無台坏	12.9	3.6	6.3	8C後	渥美・湖西	墨書土器・内面に自然釉顕著

3 S E 23　7-8は高台の無い坏身である。体部は外反しながら立ち上げ、口縁部は面取りが施されている。底部外面には糸切り痕と「×」の墨書が認められる。体部内面には自然釉が顕著で、外面には重ね焼きの痕跡が明瞭である。

10　中世曲物井戸出土土器

第11表　中世曲物井戸出土土器一覧表

2 SE03								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-4	6	山茶碗 碗	〈15.2〉	5.0	〈6.6〉	12C末～13C初		
2 SE06								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
7-5	6	土師質土器 羽釜	20.9	〈10.0〉		15C後～16C後		

2 S E 03　7-4は山茶碗である。体部はわずかに内湾し、口縁部を外反させている。底部外面には扁平な高台を貼り付け、わずかに糸切り痕が観察される。

3 S E 06　7-5は羽釜である。体部外面は斜方向のハケ調整後、体部上半部は横方向へハケ調整を、下半部は横方向へヘラケズリを施している。体部内面にはナデ、イタナデが施され、口縁部には穿孔が施されている。

11　中世曲物石組井戸出土土器

2 S E 10　この井戸からは多くの土器が出土しており、図版には27点を掲載した。

7-9～11は常滑産の甕の口縁部と思われる。7-9は外方に折り曲げられ、端部の外面を引き延ばしている。7-10・11の折り曲げられた口縁部は体部に密着している。7-12、8-5・6は鉢である。7-12は口縁部で、口縁端部を外方に引き延ばし、面取りが施されている。8-5は常滑産の鉢で、体部の立ち上がりは直

線的で、口縁端部を内外方向に向けて引き延ばしている。8-6は志戸呂産である。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部内面に稜を擁出している。8-1は天目茶碗である。体部はやや内湾気味に立ち上げ、口縁部を直立させている。口縁端部は丸く仕上げ、高台は削り出し技法によるものである。志戸呂産か。8-2は片口皿か。緑釉を施している。8-3は陶器の底部と思われる。見込みには三叉トチンの痕跡がある。8-4は折縁深鉢の底部で、足が底部外面周縁に3ヵ所均等に割り付けて貼り付けられている。

第12表　中世曲物井戸出土土器一覧表

2 SE10

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
7-9		陶器 壺		〈6.7〉		14C後	常滑	
7-10		陶器 壺	〈21.9〉	〈10.8〉		15C後～16C前	常滑	
7-11		陶器 甕	31.0	〈6.5〉		15C後～16C前	常滑	
7 12		陶器 鉢		〈10.1〉		14C～15C	古瀬戸	鉄釉
7-13		弥生 壺	〈25.0〉	〈11.7〉		中期後半～後期後半		
8-1	7	陶器 天目茶碗	11.4	6.4	4.3	15C後	志戸呂(三ツ沢)	
8-2	7	陶器 皿	〈10.2〉	2.2	〈5.8〉	15C中～後	瀬戸	緑釉
8-3		陶器 碗		〈1.8〉	5.2	15C中～後	瀬戸・美濃	内面釉付着
8 4		折縁深鉢		〈4.1〉	10.2	15C中～後	志戸呂(三ツ沢)	
8-5		陶器 鉢	〈26.0〉	9.8	〈10.2〉	15C中	常滑	
8-6		陶器 鉢	〈30.6〉	〈5.1〉		15C後	志戸呂(三ツ沢)	
8-7	7	土師質土器 内耳鍋	〈20.9〉	〈13.5〉		15C後～16C前		
8-8	7	土師質土器 カワラケ	〈8.8〉	1.2		15C		手捏ね成形
8-9	7	土師質土器 カワラケ	〈10.4〉	1.7		15C後		手捏ね成形
8-10	7	土師質土器 カワラケ	9.5	2.0		15C後		手捏ね成形
8-11		土師質土器 カワラケ	〈11.2〉	2.4	〈5.8〉	15C後		ロクロ成形
8 12		瓦質土器 火鉢		〈5.6〉		15C		
8-13	7	土師質土器 内耳鍋	24.2	〈13.2〉		15C後～16C前		
8-14		土師質土器 内耳鍋	〈25.0〉	〈12.3〉		15C後		
8-15	7	山茶碗 碗	15.0	5.0	6.3	13C初	渥美・湖西	
8 16		山茶碗 小皿	〈8.8〉	2.0	4.9	13C中	渥美・湖西	
8 17		山茶碗 碗		〈1.8〉	6.0	13C中	渥美・湖西	
8-18		山茶碗 碗		〈1.7〉	5.3	13C中	渥美・湖西	
8-19		山茶碗 碗		〈1.6〉	6.0	13C中	渥美・湖西	
8-20		山茶碗 碗		〈2.1〉	5.6	13C中	渥美・湖西	
8-21	7	山茶碗 大平鉢	〈30.4〉	11.9	〈13.6〉	12C後～13C	渥美・湖西	
8-22		山茶碗 大平鉢		〈8.5〉	〈15.2〉	12C後～13C	渥美・湖西	

8-7・13・14は内耳鍋である。8-13・14の器形は8-7と比較して扁平な偏球形を呈する。8-13・14の体部外面の上位は横方向の、中位は縦方向のハケ調整を施し、下位はヘラケズリを、内面は横方向のハケ調整を基調としている。8-7は外面の大半を縦方向のハケ調整で、下位にヘラケズリを、内面は横方向のハケ調整・ヘラケズリを施している。8-8～11はカワラケである。8-8～10は手捏ね成形である。8-8は底部が極めて薄い仕上がりである。8-9・10は体部の立ち上げの具合は同じであるが、法量が異なる。8-10は灰白色で焼成は良好である。8 11はロクロ成形で、体部をわずかに外反して立ち上げており、底部外面に糸切り痕が認められる。本遺跡ではロクロ成形のカワラケは8-11の1点のみである。8-12は瓦質の火鉢の破片である。

8-15～20は山茶碗である。8-15は体部が直線的に立ち上がるもので、口縁端部外面には面取りは施されている。8-17～20は山茶碗の底部である。8-19は回転糸切り痕ともみ殻痕が観察される。8-16は小皿で、口縁端部は丸く仕上げられている。8-21・22は鉢の底部である。8-21の体部は直線的に立ち上げ、底部外面に貼り付けられた高台の接地面には砂粒痕が認められる。8-22の体部外面の下半部にはヘラケズリが施され、底部外面には高めの高台が「八の字」状に貼り付けられている。

なお、7-13は弥生時代中期後半から後期前半の甕で、混入品である。

12　中世集石土坑出土土器

第13表　中世集石土坑出土土器一覧表

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径	器高	底径	時期	産地	備考
7 SF02								
9-1		山茶碗　碗		〈1.1〉	7.1	13C中	渥美・湖西	墨書土器
9 2	8	山茶碗　碗		〈2.0〉	6.2	13C中	渥美・湖西	墨書土器
9-4		山茶碗　碗		〈2.0〉	〈8.3〉	13C中	渥美・湖西	
9-6		山茶碗　大平鉢	〈19.4〉	〈5.6〉		12C後	渥美・湖西	
10SP16								
9-3		山茶碗　碗		〈1.3〉	6.8	13C中	渥美・湖西	墨書土器(女)
3 SF129								
9-5		山茶碗　碗		〈2.5〉	〈7.6〉	12C前	渥美・湖西	
2 SF09								
9-7	8	山茶碗　碗	14.7	4.6	7.0	13C前	渥美・湖西	
3 SF68								
9 8		山茶碗　小皿	〈9.4〉	1.9	5.9	13C前	渥美・湖西	
9-9		須恵器　長頸瓶		〈8.7〉	〈13.1〉	8C中	湖西	
10SP15								
9-10		須恵器　長頸瓶	〈11.2〉	〈10.4〉		7C末	湖西	

〈第13表　中世集石土坑出土土器一覧表〉

3 SF127								
図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径〈推定値〉	器高〈残存値〉	底径〈推定値〉	時期	産地	備考
9 11	8	土師皿 伊勢型	19.8	〈10.7〉		12C		
9-12	12	山茶碗　短頸壺	〈12.4〉	〈13.4〉		12C		灰釉末～山茶碗
9-13	8	灰釉陶器　長頸壺		〈15.9〉		10C	猿投	折戸53号窯式　猿投
9-14	8	灰釉陶器　長頸壺		〈14.8〉		10C	猿投	折戸53号窯式
9-15	8	須恵器　足		〈8.6〉		7C	豊嶋(二川)	
9-16	8	土師器　托	16.3	5.7	8.2	10C		
9-17	8	灰釉陶器　碗	〈16.4〉	5.6	〈7.0〉	11C前		折戸53号窯式
10-1	9	白磁　碗	〈14.6〉	〈5.4〉		12C代	中国(華南)	玉縁
10-2	9	山茶碗　輪花碗	〈15.9〉	〈5.9〉	7.2	12C前	渥美・湖西	高台径〈7.2cm〉
10-3		山茶碗　輪花碗	〈17.4〉	〈4.6〉		12C前	渥美・湖西	
10-4	9	山茶碗　小碗	10.8	4.0	5.5	12C前	渥美・湖西	高台径5.5cm
10-5	9	山茶碗　小碗	〈11.0〉	4.0	〈5.6〉	12C前	渥美・湖西	高台径〈5.6cm〉
10-6	9	山茶碗　碗	15.9	5.8	8.0	12C末	渥美・湖西	高台径8.0cm
10-7	9	山茶碗　碗	16.7	6.2	7.6	12C前	渥美・湖西	高台径7.6cm
10-8	9	山茶碗　碗	〈17.0〉	〈5.1〉	〈7.9〉	12C前	渥美・湖西	高台径〈7.9cm〉
10-9		山茶碗　碗	〈17.8〉	〈4.3〉		12C前	渥美・湖西	
10-10	9	山茶碗　碗	〈16.8〉	〈6.2〉	8.8	12C末	渥美・湖西	高台径8.8cm
10-11		山茶碗　碗	〈8.0〉	〈4.6〉		12C前	渥美・湖西	
10-12		山茶碗　碗	15.8	4.6		12C後	渥美・湖西	
10-13		山茶碗　碗	〈15.8〉	〈5.2〉		12C後	渥美・湖西	
10-14	9	山茶碗　小碗	11.1	5.3	5.4	12C前	渥美・湖西？	高台径5.4cm
10-15	10	山茶碗　短頸壺		〈18.9〉	18.1	11C代		
10-16	10	灰釉陶器　壺		〈19.1〉	15.0	11C代		
10-17		山茶碗　小碗	〈1.9〉	〈1.9〉		12C前	渥美・湖西	高台径〈5.3cm〉
10-18		山茶碗　小碗		〈2.2〉	〈4.7〉	12C前	渥美・湖西	高台径〈4.7〉cm
10-19		山茶碗　碗		〈2.4〉	〈8.7〉	12C前	渥美・湖西	高台径〈8.7〉cm
10-20	10	灰釉陶器　短頸壺	12.4	27.3	14.1	11C代		
10-21	9	山茶碗　片口鉢	〈31.7〉	12.9	13.8	12C中～後	渥美・湖西	

7 S F02　9-1・2・4は山茶碗の底部で、3点とも糸切り痕が観察される。9-2の墨書は、高台が剝がれた後に施されたものである。9-6は鉢で口縁端部は面取りが施されている。

10 S P16　9-3は山茶碗の底部で、底部外面の墨書は「女」と読める。

3 S F129　9-5は山茶碗の底部で、高めの高台が貼り付けられている。

2 S F09　9-7は山茶碗である。口縁部を屈曲させ、口縁端部は丸く仕上げている。底部外面には扁平な高台が貼り付けられ、糸切り痕が観察される。

3 S F68　9-8は山茶碗・小皿である。口縁端部は丸く仕上げられ、底部外面には糸切り痕が認められる。9-9は須恵器・長頸瓶で、残存する体部の外面にはヘラケズリが観察される。

10 S P15　9-10は長頸瓶の口頸部である。頸部は外湾気味に立ち上がり、口縁部を強く外反させてい

る。口縁端部はナデにより上下に引き延ばされている。

３ＳＦ127　この遺構からは多くの土器が出土し、図版には28点を掲載した。

土師質土器は**9-11・16**の２点である。**9-11**は伊勢型鍋で、体部上半部が残存している。口縁端部をわずかに内側に折り曲げている。全体が被熱しており顕部付近でナデが施されている以外、器面調整は確認できない。器形から伊藤裕偉氏の分類では仮Ａ段階に該当する。**9-16**は托である。ロクロ成形で体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。体部内面にわずかにナデが施され、高めの高台は「八の字」状に貼り付けられている。焼成は良好である。須恵器は**9-15**の甕の１点である。体部下半部はヘラケズリ、上半部にはナデが施されている。体部中位にはナデの後にクシ状工具による刺突紋が施されている。

10-1は白磁・碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は玉縁状を呈する。体部下半部外面にはヘラケズリが施されている。

9-12・10-20は短頸壺である。**9-12**の口縁部は緩やかに外反し、口縁端部を丸く仕上げている。体部外面には自然釉が顕著に観察され、肩部付近には窯体が付着している。**10-20**の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を直立させ、口縁端部を丸く仕上げている。**9-13・14**は長頸壺で、肩部から頸部にかけて残存し、頸部は外反気味に立ち上がる。肩の張り具合から２点とも折戸53号窯式に該当する。**9-17**は灰釉陶器である。体部をやや内湾気味に立ち上げ、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部を丸く仕上げている。

輪花碗は**10-2・3**の２点で器形・技法が共通する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。輪花はヘラ状の工具によるものである。底部外面には高めの高台が「八の字」状に貼り付けられ、糸切り痕が観察される。**10-4・5**は小碗である。**10-4**は体部を直線的に立ち上げ、口縁部を丸く仕上げている。**10-5**は体部を内湾気味に立ち上げている。２点ともヘラ状工具により輪花が施されている。**10-6～13**は碗である。**10-6・13**は体部中位を屈曲させ、口縁端部をわずかに外反させている。**10-6**の高台接地面にはわずかなもみ殻痕と糸切り痕が観察される。**10-7・8・9・11**の体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させている。**10-7・8**の底部外面には「八の字」状に広がる高台が貼り付けられ、糸切り痕が観察される。**10-10**も体部を内湾気味に立ち上げ、下部で屈曲させ、口縁部を外反させている。**10-14・17・18**は小碗である。**10-14**の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させている。底部外面には高めの「八の字」状に広がる高台が貼り付けられ、体部内面に重ね焼きの痕跡が認められる。**10-19**は碗の底部と思われる。

10-15は短頸壺で、口頸部が欠損している。体部外面にはほぼ全面に釉が観察される。**10-16**も壺で、体部外面下半部にはヘラケズリが施されている。**10-20**は短頸壺である。内湾気味に立ち上がる体部の外面下半部にはタタキが施されている。口縁部を直線的に立ち上げ、端部を丸く仕上げている。体部外面には釉が観察される。

10-21は片口鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りされている。口は口縁部を押し上げて作っている。体部下半部にはヘラケズリが施され、底部外面には高台が貼り付けられている。

13　９区土器集積出土土器

９区土器集積　土師器12点、須恵器６点を掲載した。出土した土師器の大半は甕と考えられる。口縁部のみ残存する資料については、甕と壺の判別が困難である。本報告では、頸部が直立する**11-11**を壺としている。

11-1・3・4・10・13・15～18は土師器の甕である。口縁部は外湾気味に開くもので、器形は球胴形に近い**11-3**と、**11-15**のような長胴形を呈するものとがある。体部外面は縦方向のハケ調整を基調としてい

第14表　9区土器集積中出土土器一覧表

9区土器集積

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
11-1	11	土師器　甕	〈45.6〉	〈9.0〉		6C後		
11-2		土師器　高坏		〈12.5〉	〈11.9〉	6C後		脚径〈11.9〉
11-3	11	土師器　甕	〈18.2〉	〈20.3〉		6C後		
11-4		土師器　甕	〈13.6〉	4.5		6C後		
11-5	10	須恵器　坏蓋	13.6	4.5		6C後	湖西	
11-6		土師器　坏身	14.4	3.9	〈6.6〉	6C前		
11-7	10	須恵器　坏身	15.0	5.0	5.0	6C前	湖西	
11-8	10	須恵器　坏身	14.4	5.0	4.0	6C後	湖西	
11-9	10	須恵器　坏身	12.0	4.0	5.9	6C後	湖西	
11-10	11	土師器　甕	〈19.8〉	〈12.1〉		6C後		
11-11		土師器　壺	20.5	〈6.0〉		6C後		
11-12	10	須恵器　高坏	12.0	〈8.6〉		6C後	湖西	
11-13	11	土師器　甕	〈19.2〉	〈8.3〉		6C後		
11-14	10	土師器　坏身	13.0	4.9	5.0	6C前		
11-15	11	土師器　甕	19.5	〈20.5〉		6C後		
11-16	11	土師器　甕	〈19.2〉	〈13.2〉		6C後		
11-17		土師器　甕	〈16.6〉	〈3.9〉		6C後		
11-18		土師器　甕	16.4	〈4.6〉		6C後		

るが、11-4の底部付近はイタナデが施されている。また、口縁部にナデを施すものとハケ調整を施すものがある。体部内面は横方向のハケ調整を基調とするが、イタナデも施す11-4とイタナデのみの11-3が存在する。11-2は高坏の脚部である。全体的に摩滅気味であるが、外面にイタナデ・指頭痕、内面にイタナデが観察される。坏部戸の接合部は中実とする。11-11は壺の口頸部である。頸部は直立し、口縁部はわずかに内湾して開く。口縁端部は丸く仕上げられ、頸部内外面ともにハケ調整が施されている。11-14は半球形を呈する坏身である。体部は内湾気味に立ち上がりナデが施され、口縁部は丸く仕上げられている。

11-5は須恵器・合子状の坏蓋である。体部は弓張り状を呈し、口縁端部は内傾している。天井部内面には当て具痕が観察される。11-6～9は須恵器・合子状の坏身である。11-6・7は口縁部を2回のヨコナデにより屈曲させ、体部下半部にはヘラケズリが施されている。11-8・9は口縁部の立ち上がりが直線的となる資料である。11-12は有蓋高坏である。坏部は11-7～9の坏身に類似し、口縁を直線的に立ち上げている。これらの土器は若干の時期差が認められるが、6世紀後半を中心とした時期に相当する。

14　3SX25出土土器

3SX25　12-1～3は、古式土師器・小型の二重口縁壺の口縁部破片である。内面はヨコナデ、外面は縦方向のミガキによって調整される。12-11・12・19はS字甕であり、12-9・14～18は台付甕である。14～17はその台部であるが、ハケ調整を主な調整方法とし、球形に近い胴部に「くの字」状に屈曲したヨコナデ調整の口頸部を有する12-18のような胴部形態になるものと推測される。12-21は、ほぼ直線的に広がる脚部を有する高坏である。12-23は中実の脚部を有する古墳時代中期以降の高坏であり、12-22は甕である。12-4～7・10の壺、12-8の甕、12-13の坩、12-20の高坏は、弥生時代後期のものである。

第15表　３ＳＸ25出土土器一覧表

３SX25

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
12-1		古式土師器 壺	〈12.2〉	〈2.5〉		5C～6C		
12-2		古式土師器 壺	〈14.6〉	〈1.3〉		5C～6C		
12-3		古式土師器 壺	〈13.6〉	〈1.8〉		5C～6C		
12-4		弥生 壺	13.6	〈3.2〉		後期		
12-5		弥生 壺	17.1	〈5.2〉		後期		
12 6		弥生 壺	〈16.2〉	〈4.8〉		後期		
12-7		弥生 壺	〈13.6〉	〈5.0〉		後期		
12-8		弥生 甕	〈12.0〉	〈6.8〉		後期		
12 9		土師器 甕	〈15.4〉	〈5.9〉		5C～6C		
12-10		弥生 壺	13.8	〈6.9〉		後期		
12-11		土師器 甕	〈15.0〉	〈2.6〉		5C～6C		
12-12		土師器 甕	〈16.5〉	〈7.0〉		5C～6C		
12-13		弥生 坩		〈6.1〉	〈4.0〉	後期		
12-14		弥生 甕		〈9.4〉	10.5	後期		
12 15		弥生 甕		〈7.1〉	〈9.5〉	後期		
12-16		弥生 甕		〈3.6〉	9.5	後期		
12-17		弥生 甕		〈4.4〉	〈8.9〉	後期		
12-18	11	弥生 甕	17.0	〈22.9〉		後期		
12-19		土師器 甕	〈38.4〉	〈13.4〉		5C～6C		
12-20		弥生 高坏		〈13.7〉		後期		
12-21		弥生 高坏		〈11.1〉	〈13.3〉	後期		
12-22	11	土師器 甕	〈29.0〉	〈21.9〉		5C～6C		
12-23		土師器 高坏		〈7.6〉		5C～6C		

15　３ＳＤ46出土土器

第16表　３ＳＤ46出土土器一覧表

３SD46

図版番号	写真図版	器種	法量 cm 口径 〈推定値〉	器高 〈残存値〉	底径 〈推定値〉	時期	産地	備考
13-1		土師器 甕	〈48.8〉	〈18.3〉		5C後半～6C		
13-2	12	土師器 高坏		〈11.1〉	〈11.9〉	5C後半～6C		
13 3		土師器 高坏		〈6.4〉	〈11.1〉	5C後半～6C		
13-4	12	土師器 壺	16.4	〈24.3〉		5C後半～6C		
13-5		土師器 高坏	16.1	〈6.6〉		5C後半～6C		
13-6		土師器 壺	13.4	〈7.8〉		5C後半～6C		
13 7	12	土師器 甕	16.4	〈7.3〉		5C後半～6C		
13-8	12	土師器 壺	〈18.8〉	〈36.3〉	7.9	5C後半～6C		
13-9	12	土師器 甕	16.4	28.0	6.7	5C後半～6C		

３ＳＤ46　13-1は、11-1と同様の大型の甕である。13-8は、屈曲の弱い二重口縁を呈する壺で、ハケ調整を施した球形の胴部に屈曲した頸部を有する。13-4・6・7・9は、いずれも口縁部内外面をヨコナデによって、頸部以下をハケないしイタナデによって調整する甕で長胴化の傾向が認められる。平底を呈する13-9以外の底部形態は不明であるが、肩部の張りが強いことから13-4・6などは台付甕となる可能性

が高い。高坏は坏底部と口縁部との境に不明瞭な稜線を有する13-3と、碗形の坏部を有する13-2などが認められる。これらの土器は、古墳時代中期後半から後期に相当すると推測される。

参考文献一覧

足立順司　1987　「内耳鍋の研究」『研究紀要　Ⅱ』　(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
足立順司　1991　「かわらけと内耳鍋について」『原川遺跡Ⅳ』　(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
漆畑　敏　1990　「伊場遺跡遺物編　5」　浜松市教育委員会
後藤建一　1987　「湖西・湖西中世古窯群」『マージナル　7』　愛知考古学談話会
後藤建一　1989　「湖西古窯群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　静岡県教育委員会
斎藤孝正　1994　「東海地方の施釉陶器生産―猿投窯を中心に―」
『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東　施釉陶器―』　古代土器研究会
中野晴久　1994　「生産地における編年について」『全国シンポジウム　中世常滑をおって　資料集』
檜崎彰一　1983　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』　愛知県教育委員会
松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」
『静岡県の古窯遺跡』　静岡県教育委員会
松井一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究　25』　静岡県考古学会
横田賢次郎・森田　勉　1987「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」
『研究論集　4』　九州歴史資料館
『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　X』　1991　瀬戸市歴史民俗資料館
『東海の中世窯―生産技術の交流と展開―』　1993　(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

第2節　弥生時代

弥生土器は、弥生時代中期から後期にわたる時期のものが主体であり、方形周溝墓、土器棺墓、土坑、溝、自然流路などから多量に出土している。本節では、煩雑を避けるために事前に壺、甕、高坏といった器種をその形態、施紋、調整方法などを基準に分類し、これをもとに各遺構出土土器の報告を行うこととする（後期については、梶子遺跡の形態分類（鈴木：1991）を援用する）。なお、絵画土器や人面付壺形土器などのように、土器に副次的な意義が付加されている土器については、「第Ⅲ章　土製品」で報告する。

1　中期中葉～後葉の土器の形態分類

前述のように、今回の調査では、弥生中期中葉から後葉を中心とした土器が多量に出土しており、図示したものだけでも数百を越えることから、事前に形態分類を行った上で報告する（第1図）。また、今回の調査では、他地域からの搬入または、その影響を受けて製作されたと推測される、外来系土器が認められるが、これについては、形態分類は行わず、適宜触れることとする。なお、この場合の外来形土器については、胎土分析などの検討は十分でないことを断わっておく。

壺形土器　壺形土器の形態分類は、口縁部形態を基準として行い、これに紋様構成による分類を加えることとする。

壺A　単純口縁を有するもの。

A1　口唇部をヨコナデによって若干外面へ肥厚気味に丸く収めるもの。

A2　口唇部に弱い面を持つか肥厚せずに丸く収めるもの。口縁部の外反度は、比較的弱いものが多い。

A3　口唇部に明瞭な面を持つもの。口縁部の外反度は、やや強いものが多い。

壺B　複合口縁を有するもの。

B1　内傾気味の複合口縁を有するもの。複合部外面は、連弧紋や沈線紋によって加飾することが多い。

B2　ほぼ直立した複合口縁を有するもの。複合部外面は、斜格子紋などによって加飾するものも認められるが、無紋のものが多い。

紋様a　研磨帯が顕著で、櫛描（ヘラ描）連弧紋を紋様最下段に施すものが多い。

紋様b　研磨帯は客体で、櫛描（ヘラ描）連弧紋を紋様帯の上位に施すものが多い。

紋様c　横位の櫛描直線紋を重畳させた後、それを縦位の櫛描直線紋（波状紋）によって区画するもの。

紋様d　横位の櫛描直線紋を重畳させた後、それを縦位の櫛描（ヘラ描）短線紋によって区画するもの。

紋様e　櫛描（ヘラ描き）斜格子紋を施すもの。櫛描直線紋やナデによって区画するものが多い。

紋様f　櫛描直線紋と波状紋を交互に施すもの。

甕形土器　甕形土器は、その機能に起因するためか、完形に復元できる資料が少ないことから、胴部

形態の変化については補足的に扱うにとどめ、口縁部及び、底部（台付きの有無）の形態を基準としてA～Dの4型式に分類する（第1図）。なお、胴部最大径が口径を凌駕するものについては便宜的に後期の形態分類を基準に分類する。

甕A　口縁部外面は、横方向の条痕によって調整する。口唇部は、内面の強いヨコナデによって丸く収め、単独圧痕を施すものが多い。また、口縁部内面に稜線を有するものが認められ、端部内面には、櫛描紋を施すものも認められる。

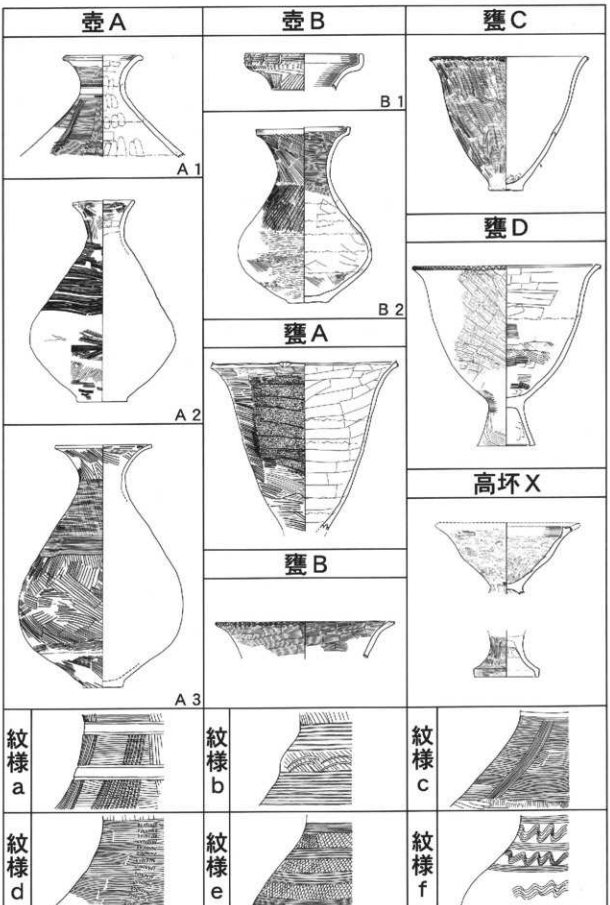
甕B　口縁部に粘土を付加するもの。口唇部には、粘土の接合痕を残し、キザミを施すことが一般である。口縁部内面は、ヨコナデするものが多い。

甕C　口唇部に明瞭な面をもち、単純に収束するもの。口唇部にキザミを施すことが一般である。胴部にやや張りが認められるようになる。

甕D　甕Cに台を付したもの。胴部上半の形態は甕Cに類似するため、底部を欠く資料では台付きの有無が判然としないことから、台付きのものに限り甕Dとし、それ以外は、便宜的に甕Cに含めることとする。なお、胴部最大径が口径を凌駕するものについては後期の分類に準じる。

高坏形土器　高坏形土器は、後期に基本的な器種として定着するが、中期後葉には鉢状口縁の高坏Xが出現している。

高坏X　鉢状に大きく外反する坏部を有するもの。脚裾部に段を有するものが一般である。

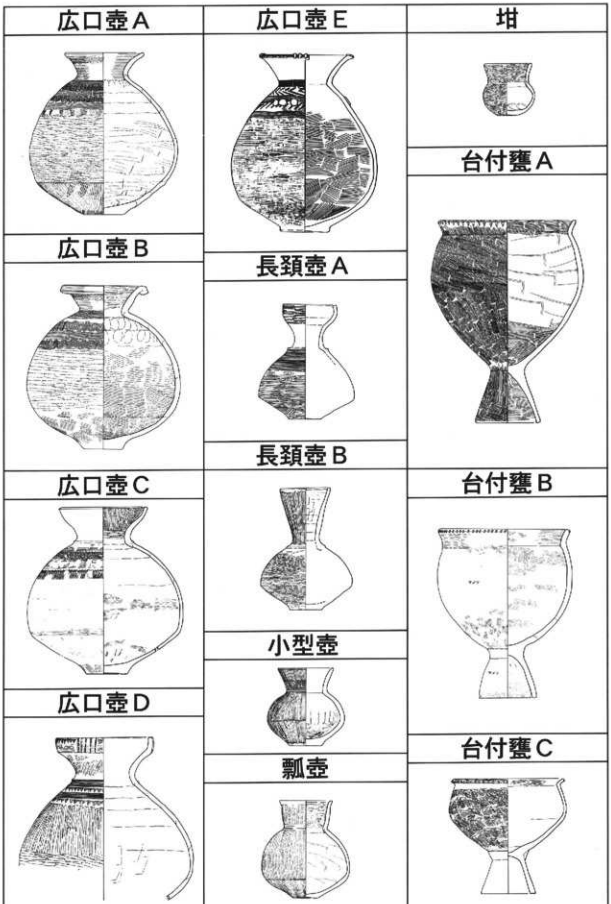


第Ⅰ図　中期中葉から後葉の土器の形態分類

2　後期の土器の形態分類

今回の調査では、中期の土器と共に後期の土器も多量に出土していることから、これについても煩雑を避けるために形態分類を行った上で報告する。なお、分類については、梶子遺跡の分類（鈴木：1991）を援用する（第2・3図）。

広口壺A　口縁部は外反し、口唇部は明確には加工されてない単純口縁を有するもの。
広口壺B　折り返し口縁を有するもの。
広口壺C　内湾する口縁を有するもの。
広口壺D　複合口縁を有するもの。
広口壺E　口唇部を上下もしくは一方向に拡張するもの。
長頸壺A　袋状口縁を有する細頸のもの。
長頸壺B　直線的に開く長い口縁部を有するもの。
小型壺　広口壺を小型化したような形態を有するもの。
鉢壺　内湾口縁で口唇部に内傾面を有するもの。
坩　偏球形の体部に太く長い口縁部を有する小型のもの。
台付甕A　体部が長いもの。
台付甕B　体部の高さと最大幅がほぼ等しい短胴のもの。
台付甕C　小型のもの。
高坏A　外反口縁の坏部に、ラッパ状の脚部を有するもの。
高坏B　椀型の坏部にラッパ状の脚部を有するもの。坏部は施紋されない。
高坏C　口縁部の断面形態がく字状を呈した椀型の坏部を有するもの。坏部は施紋しない。
高坏D　脚部が二段作りになる当地域特有の装飾高坏である。
高坏E　直口縁の有稜高坏である。脚部は下半が屈折して直線的に開くか、内湾気味に開くものであり、紋様は原則的に坏部、脚部ともに施さない。なお、便宜的に口唇部に内傾面を有する欠山型の高坏もこれに含める。
小型高坏　ワイングラス形の坏部を有するもの。
片口鉢A　体部が浅い椀型を呈するもの。
片口鉢B　体部が屈折もしくは稜を有するもの。
装飾鉢　扁平な体部に広く長い口縁部を有するもの。口縁部外面に櫛刺突羽状紋を施すことが一般である。
小型鉢　扁平な体部に広く長い口縁部を有するもの。
大型鉢　装飾鉢を大型化したような形態のもの。



第2図　後期の土器の形態分類1

第3図　後期の土器の形態分類2

3　方形周溝墓出土土器

1号墓北溝　14-1は、偏球形の胴部を有する壺B２である。短く直立する複合部外面は無紋で、肩部には比較的幅が狭い紋様ｃを施す。胴部外面は、ハケによって調整し、底部は、若干上げ底状を呈するもので、中期後葉に相当する。

2号墓北溝　15-3は、頸部から胴部上半にわたって紋様ｄを施す壺Ａ２である。口縁部内面及び、胴部下半は、ヨコハケを基調に調整している。15-4～6は、口唇部下端にキザミを施す甕Cである。いずれも胴部外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケによって調整する。甕Cは、胴部が張らない15-4と、やや張る15-5・6に大別できる。以上の土器は、いずれも中期後葉に相当する。

2号墓南溝　14-5は、口唇部下端に棒状工具による２個１組の圧痕を６ヵ所（推定）に施し、頸部以下に紋様ｃを施す壺Ａ１である。14-7は、胴部上半に櫛描直線紋を重畳させ、その最下段に櫛描波状紋を加える壺の胴部である。胴部下半は、ハケによって調整している。14-6は、胴部外面を丁寧なミガキによって調整する壺である。内湾する口縁部や胴部下半に稜線を有する点、底部が若干上げ底状を呈する点から東遠江系と推測される。なお、同様の理由から14-4も東遠江系の壺底部となる可能性がある。15-2は、口頸部形態が判明しないが、長胴で、やや低めの台部を有することから甕Dと推測され、壺と同様に中期後葉に相当する。

2号墓西溝　14-2・3は、胴部上半に横位の櫛描直線紋を重畳させる壺である。いずれも縦位の櫛描紋区画を持たないもので、胴部下半は、ハケによって調整している。14-2は、口唇部を丸く収め、口縁部の外反も少ない壺Ａ２に相当する。いずれも中期後葉に相当する。

3号墓北溝　15-7は、胴部上半に紋様ｅを施し、その上下端及び中位をヨコナデによって磨り消す中期後葉の小型の壺である。ハケを基調に調整する胴部下半には、弱い屈曲が認められる。

3号墓東溝　15-8は、胴部内面をハケによって調整し、外面には、粘土の接合痕を残す土器である。15-9は、やや肩が張り、口頸部が断面コ字状を呈する古墳時代後期の台付甕である。いずれのも３号墓北溝出土土器との間に時期的な齟齬をきたしており、混入品と推測される。

4号墓東溝　16-1は、紋様ｃの最下段に振幅の小さい櫛描波状紋を施す壺である。16-3は、若干突出する頸部から胴部上半にわたって紋様ｄを施し、ほぼ対向する２面に擬流水紋状のハ字沈線を４カ所に施す壺Ａ３である。胴部紋様の上端に櫛描直線紋とヘラ描き斜線紋を、下端にヘラ描き羽状紋を付加する。また、口縁部の外反はやや強く、明瞭な面を有する口唇部下端にはキザミを施す。16-2は、胴部上半に櫛状の工具による斜線（羽状）紋を施す壺である。口縁部外面も同様の工具で調整（紋様を意識か）している。底部は非常に不安定で、正立不可能である。¥紋様構成や内湾気味の口縁部などから東遠江系に類似した壺と推測される。これらはいずれも中期後葉に相当する。

6号墓北溝　17-2は、胴部外面をハケによって調整する無紋の壺である。17-3は、袋状口縁を有する無紋の長頸壺Aである。口縁部内外面をヨコナデし、頸部以下は、ミガキによって調整する。17-2は、中期後葉、17-3は、中期後葉～後期初頭に比定される。

6号墓東溝　16-5は、複合口縁部外面の4ヵ所にやや大きめの棒状浮紋を加える壺B2である。胴部上半には、上下端を押し引き紋で区画した紋様dを施す。16-4は、胴部上半に横位の多条沈線を施す壺である。いずれも紋様帯以外の胴部外面をハケによって調整するもので、中期後葉に比定される。

6号墓南溝　17-1は、胴部上半に紋様dを施し、口縁部内面及び、胴部下半をハケによって調整する壺A2である。胴部の上半と下半に接点が認められないが、ほぼ同一個体として間違いない。中期後葉に相当する。

7号墓東溝　17-4は、胴部上半に櫛描直線紋を重畳させる壺である。ハケによって調整する胴部下半には不明瞭ながら屈曲点が認められる。中期後葉に相当する。

9・10号墓9 SD47　17-5は、残存状況が悪く、紋様の有無や口縁部形態は不明であるが、胴部形態から中期後葉の壺と推測される。

12号墓SD51上層　17-6は、口唇部が外反する高坏Cである。外面はミガキによって調整し、脚部内面には明瞭なシボリ痕を残す。後期前半に相当する。

12号墓SD46　17-7は、胴部上半にヘラ状の工具による斜線紋を施す壺B2である。複合口縁の屈曲部分にはキザミを、胴部下半には、横方向の丁寧なミガキを施すもので、中期後葉に相当する。

13号墓4 SD01　18-7は、紋様eの下端に櫛描羽状紋を施す壺B2である。やや外傾する複合口縁部外面には、ヘラ描きの斜格子紋を施す。18-6は、胴部がやや丸みを帯びた無紋の壺A3である。肩部には粗いミガキを施すもので、焼成後、胴部中央部分に円窓を穿つ。18-4・8は、壺B2の口縁部破片である。複合口縁部外面は、櫛刺突紋を施す18-4と無紋の18-8が認められる。18-9は、口径が胴部最大径を凌駕する甕Cである。胴部外面は縦ないし、斜め方向に、口縁部内面は横方向を基調としたハケによって調整している。以上の土器は、中期後葉に相当すると推測される。なお、18-10は、台付坩、18-3は、台付甕の台部で、後期に比定される。

13号墓4 SD02　18-1は、胴部全面をハケによって調整する壺A2である。18-2は、口頸部を欠損する小型の壺である。肩部と胴部中位やや上の2ヵ所に紋様eを施す。いずれも中期後葉に比定される。

13号墓4 SD11　18-12は甕C、18-11は台付甕の台部である。外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケによって調整する。18-12は中期後葉、18-11は、後期に相当する。

15号墓3 SD34　19-1は、紋様dを施す壺A2、19-2は、胴部最大径付近に櫛描波状紋と竹管紋を施す凹線紋系または、その影響を受けた壺である。いずれも中期後葉に相当する。

16号墓3 SD67　19-3は、紋様dを施す中期後葉の小型壺である。ミニチュア土器の範疇に含められよう。

16号墓3 SF179　19-5は、内外面を板ナデによって調整する中期後葉の甕Cである。口径が胴部径を

凌駕し、胴部の張りがないことなど比較的古相を呈する。19-4は、粘土帯を付加した口唇部下端にキザミを施す甕Bである。横方向を基調とした調整を施す。19-6は、単純口縁を有する甕Cである。口縁部下端にやや大きめのキザミを施すことや、粗い原体による調整などから若干古相を呈すると言える。

17号墓3 SD44　19-7は、尾張系の細頸壺の口頸部破片である。外面に数条の波状紋を幅広く施紋することから、中期後葉の古い段階に相当すると推測される。19-8は、底部穿孔土器である。

17号墓3 SD76　19-9は、口縁部をヨコナデする後期後半の台付甕Bである。口縁部内面をヨコハケし、口唇部は無紋である。

18号墓3 SD52　19-11・12は、いずれも肩部がやや丸みを持つ壺である。19-11は、口唇部に明瞭な面を持ち口縁部の外反も強い壺A3に相当する。19-12は、胴部をミガキによって調整する。19-10は、球形に近い胴部に直口した口縁を有する壺である。いずれも中期後葉に相当するものであろう。

14号墓2 SD10　20-1、21-1～4・6は、単純口縁を有する広口壺Aである。20-1は、口唇部に棒状浮紋を、21-4は、口縁部内面に波状紋を、21-6は、扇形紋を施している。21-7は、折り返し口縁を有する広口壺Bである。口唇部に波状紋を、口縁部内面に櫛描波状紋と直線紋の交互施紋と竹管紋を施す。20-7は、これらの胴部に相当するものである。24-2は、口縁部外面に櫛刺突羽状紋を施す装飾鉢、24-5、6は、胴部外面をミガキによって調整する小型鉢である。21-8・11・13・14、22-1～15は、台付甕A、Cである。21-8・13、22-3・6・7・12は、口縁部内外面をヨコナデするもので、頸部はく字に屈曲するものが多い。22-8～11・13～15は、台付甕の台部である。直線的で、台部高もやや高めのものが多い。21-9・10・12は、大型の鉢とも言うべき形態のもので、台付甕と同様な台を付すと推測される。22-17、23-1・3～8は、高坏Aである。口縁部外面が無紋の23-1・8と口縁部外面に波状紋を施す22-17、23-3～7に大別できるが、いずれも口唇部を丸く収めるものが多い。22-16、23-2は、坏部を縦方向の丁寧なミガキによって調整する高坏Cである。22-19・20、24-4も高坏Cと同様に坏部を縦方向の丁寧なミガキによって調整する小型高坏である。22-19・20は、柱状部に櫛描直線紋を施し、裾部が外反する脚部を採用している。22-18・21は、脚部に大きな段を有する高坏Dである。脚部の突帯は、鋭く突出する22-18、幅広の低い22-21が認められる。23-9～20は、高坏の脚部である。23-16・17は、脚裾部が内湾気味になることから、やや後出的である。20-6・8は口縁部が内湾する壺、21-5は、細頸で大きく外反する単純口縁の壺、24-1は口縁部内面に紋様eを施す片口鉢（または台付鉢）で、東遠江系と推測される。以上の土器は、後期前半に相当するものである。

14号墓2 SD11　24-10は、口唇部下端にキザミを施す甕Cである。24-13は、口縁部をヨコナデする台付甕Bで、24-14のような台部が付くと推測される。24-10は、中期後葉、24-13・14は、後期後半に相当する。

14号墓2 SP174　26-6は、頸部に断面三角形の突帯を有する広口壺Aである。突帯の上位には、竹管紋が施されている。26-1は、胴部にLR縄紋を施す東遠江系の壺で、胴部下半をミガキによって調整し、底部は上げ底状を呈する。甕は、すべて台付と推測される。26-10・14・15は、やや高い台部を有する。25-1・2は、同一個体と推測される折り返し口縁を有する大型品である。

25-5は、端部はやや肥厚気味に収め、透かし孔もやや高い位置に穿つ高坏の脚部である。25-3は、脚

裾部に段を有する脚部である。以上の土器は、後期前半に相当するものである。26-8は凹線紋系の鉢で、いずれも中期後葉に比定される。

3 SD47　27-1は、口唇部に面を有し、肩部がやや丸みを帯びる無紋の壺Ａ３である。中期後葉に相当する。

3 SD48　27-3は、紋様ｃを、27-2は、紋様ｄを施す壺Ａ２である。27-4・5は、肩部が丸みを帯びた壺で、27-5は、横位の櫛描直線紋を、27-4は、縦位の曲線を横位の櫛描紋によって区画する紋様を施すものである。いずれも中期後葉に相当するが、若干の時期差が認められ、27-2・3は、比較的古相を呈するものである。

5 SD25　27-6は、胴部が丸みを帯び、底部が突出する壺である。頸部に櫛刺突直線紋を２条施す点は、東遠江系の壺に類似するが、胴部形態など、典型的な東遠江系の壺とは異なる点が多いことから模倣品の可能性が高い。後期に相当する。

11号墓3 SD53　27-9・10は、口唇部を丸く収める細頸の壺Ａ２、27-8は、口唇部が凹線状に凹むハケ調整の壺Ａ３である。口縁部内面は、ハケによって調整している。27-9は、口縁部内面に接合痕を、27-10は、頸部内面にシボリ痕を残す。27-12は、口縁部に最大径を持つ中期後葉の甕Ｃで、口唇部下端にキザミを施す。27-11・13・14は、いずれも台付甕になると推測されるもので、27-11は、口縁部内外面をヨコナデ調整することから、後期後半に下る可能性が高い。なお、27-13は、篦目痕を残している。27-7は、凹線紋系の口縁部破片で、垂下させた口唇部に３条の凹線を施す。これらは、後期に下る可能性が高い台付甕（27-11・13・14）を除けば中期後葉に比定されるものである。

3 SF175　28-1は、細く長い頸部に断面三角形の低い突帯を持つ無紋の壺、は、複合部外面に斜格子紋を施した後、３個１組の棒状浮紋を施す壺Ｂ２で、肩部には櫛描直線紋が認められる。28-4は、口縁部の外反が緩やかな大型の甕である。いずれも中期後葉に相当する。

3 SD78　28-5は、肩部に櫛描直線紋を施す壺Ａ２、28-8は、底部を欠損するが、口縁部に最大径を有する甕Ｃ（または、甕Ｄ）、28-6・7は、台付甕の台部である。いずれも中期後葉に相当すると推測されるが、28-6は、比較的高い台部を有することから、後期前半に下る可能性がある。

3 SD51　28-9は、台付甕の台部である。台部の開きが大きいこと、高さがやや低いことなどから中期後葉に比定される。

5 SD17　28-10は、太頸の壺Ａ３である。口唇部に明瞭な面を持ち、外面は縦方向のハケを基調に調整するものである。中期後葉に相当する。

5 SD18　28-11は、胴部上半に不揃いな縦位櫛描紋を施した後、それを横位の櫛描直線紋によって区画する壺である。28-12は、横位の櫛描直線紋を重畳させる壺である。いずれも中期後葉に相当する。

5 SD24　28-13は、古墳時代中期以降の鉢で、混入品と推測される。

5 SX08　28-14は、頸部が屈曲する広口壺A、28-15は、丁寧なミガキによって調整する坩である。いずれも後期前半に相当する。

4　土器棺墓出土土器

1号土器棺墓　29-1は、頸部から胴部上半にわたって横位の櫛描直線紋を重畳（縦位の櫛描紋区画の有無は不明）させる壺B２である。短く直立する複合部外面は無文で、紋様以外の胴部外面は、ハケによって調整している。29-2は、坏部外面を横位のミガキによって調整する台付の鉢である。台部は欠損しており、形態は不明である。29-3は、ハケによる調整を施す壺の底部である。いずれも中期後葉に相当する。

2号土器棺墓　30-1は、胴部上半に紋様ｃを施す壺Ｂ２である。胴部中位に最大径を持つ特大品で、短く直立する複合部は無文で、胴部下半はヨコハケを基調に調整する。30-2・3は、甕Ｃである。外面にススの付着が一切認められず、煮沸には使用していないと判断できる。いずれも口唇部下端にキザミを施し、外面を縦ないし斜め方向に、口縁部内面をヨコハケによって調整する。いずれも中期後葉に相当する。

3号土器棺墓　29-4は、口唇部に明瞭な面を持つ壺Ａ３である。接点は、認められないが、同一個体として間違いないと推測される。頸部から胴部上半にわたって紋様ｃを、その下端に振幅の大きい櫛描波状紋を施す。また、紋様最上段及び、波状紋の下端に沿って竹管紋を付加する。29-5・6は、共に口唇部下端にキザミを施し、胴部内外面をヨコハケを基調に調整する甕Ｃである。29-5は、胴部の張りが顕著であるのに対し、29-6は、胴部がほとんど張らないことから若干の形態差が認められるが、いずれも中期後葉の範疇に収まると推測される。

4号土器棺墓　31-4は、胴部最大径をその中位に持ち、口唇部下端にキザミを施す胴部が無紋の壺Ａ３である。口縁部内面をヨコハケ、胴部外面を、ハケによって調整する。31-3は、口唇部に粘土を付加し、その上下端にキザミを施す甕Ｂ、31-1・2は、共に口唇部下端にキザミを施す甕Ｃである。胴部外面は、甕Ｂがヨコハケを基調に、甕Ｃがタテハケないし、ナナメハケを基調に調整する。壺の形態的特徴からこれらの土器は、中期後葉に位置付けられる。

5号土器棺墓　31-5は、下方に拡張させた口唇部に３条の凹線を施す凹線紋系の壺である。頸部には櫛刺突紋を、それ以下の胴部最大径付近にまで紋様ｆを施す。また、胴部最大径以下は、ケズリによって調整する。なお、胴部中位に焼成後、丸窓を穿っている。31-6は、肩部～胴部上半に紋様ｆを施し、胴部下半をミガキによって調整する壺である。口縁部を欠損するが、口縁部の外反は、比較的強いと推測される。なお、櫛描紋は、31-5に比べて稚拙な印象が強い。いずれも中期後葉に相当する。

6号土器棺墓（土器集積４）　32-1は、胴部上半にやや間隔をおいて櫛描直線紋を施す壺で、中期後葉に相当する、肩部に豆粒状の浮紋を付加する。また、下膨れを呈する胴部最大径以下は斜め方向の丁寧なミガキの後、最大径付近を横方向のミガキによって調整する。32-3は、口径と胴部最大径がほぼ等しい台付甕Ａ、32-2は、胴部が丸みを帯び、口縁部内外面をヨコナデする台付甕Ｂ、32-4は、口縁部を水平方向に拡張する高坏Ｃで、後期以降に比定される。

7号土器棺墓　32-5は、複合部外面にヘラ描き斜格子紋を施した後、3個1組の棒状浮紋を6～7ヵ所に付加する壺B2である。頸部から肩部にわたって、紋様eを施した後、6ヵ所をJ字紋によって縦位に区画する。また、J字紋の上端には、櫛描扇形紋を付加する。32-7は、球形に近い胴部を有する壺で、外面は、ミガキによって調整する。32-6は、口径が胴部最大径を凌駕する甕Cで、台付甕となる可能性がある。これらは、いずれも中期後葉に相当すると推測される。

8号土器棺墓　33-3は、胴部最大径がやや高い位置にある壺の大型品である。胴部上半には、櫛描直線紋を重畳させ、胴部下半は、ハケによって調整する。33-4は、胴部外面をやや粗いヨコハケによって調整する甕Cである。口縁部内面は、ヨコハケによって調整する。いずれも中期後葉に相当するものである。

9号土器棺墓　33-1は、中期後葉～後期前半と推測される甕Cの胴部上半である。口唇部下端にキザミを施すもので、胴部内外面にはヨコハケを施す。

10号土器棺墓　33-2は、胴部上半に紋様eを施し、それ以下をハケによって調整する壺である。胴部最大径は、やや高い部分に位置し、丸みを帯びた胴部となっている。中期後葉に相当する。

5　土坑・溝・その他出土土器

2 SF02　34-4・8は、屈折する頸部を有する広口壺Bである。34-4は、口縁部内面に櫛刺突紋を、34-8は、口唇部に竹管紋を施す。いずれも頸部には、櫛描直線紋が残存する。34-1は、口唇部に外傾面を有する広口壺Cである。口縁部内面は、ヨコナデによって調整している。34-2は、細頸の折り返し口縁頸である。東遠江以東に類例が求められる。34-6は、胴部最大径に鈍い稜線を有する小型壺である。胴部は、横方向を基調とした丁寧なミガキによって調整している。34-5は、最大径を胴部にもつ台付甕で、34-7のようなやや高い台部が付くと推測される。これらは、ほぼ後期前半に相当するものである。なお、34-3は、中期後葉に比定される。

2 SF06　34-12は、肩部に紋様fを施す壺B2である。複合部外面には波状紋を施した後、2個1組の棒状浮紋を、口唇部には、ハケ状工具による刺突紋を施す。また、胴部下半は、横方向のミガキによって調整している。34-11・13は、やや胴部形態が典型例とは異なるが、胴部上半に縄紋を施すことから、東遠江系と推測されるものである。胴部下半は、横方向の丁寧なミガキによって調整している。また、34-10も胴部下半に稜線を有することから、東遠江系の可能性が高い。34-16・17は、凹線紋系、または、その影響を強く受けたと推測されるものである。34-17は、複合口縁状に上方に拡張させた口縁部に3条の凹線を施し、頸部には櫛刺突紋を、それ以下に櫛描波状紋と直線紋の交互施紋を行う大型壺である。34-16は、胴部がソロバン玉状に張る壺で、胴部上半に櫛描直線紋と扇形紋を施すものである。34-15・18・19は、いずれも最大径を胴部に持つ台付甕である。34-14は、このいずれかの台部になると推測される。以上の土器は、ほぼ中期後葉を中心とした時期に比定される。

3 SF154　35-4は、紋様dを施す壺Aである。紋様下端には縦位区画と同様の櫛状工具による押し引き紋を施す。35-2は、口唇部を丸く収める壺A2の口頸部破片である。35-1・3は、口縁部下端ないし、口唇部にハケ状の工具によってキザミを施す甕Cで、外面は、タテハケを基調に調整する。以上の土器は、施紋・調整方法などからほぼ中期後葉に相当すると推測される。

竪坑区 SX 01　35-9は、肩部に櫛刺突羽状紋を、それ以下に櫛描直線紋と波状紋を交互に施す広口壺Aである。口縁部内面には櫛描波状紋と結節縄紋を、口唇部には、斜位の櫛刺突紋を施した後、4個1組の棒状浮紋を4ヵ所に施す。頸部や胴部下半は、丁寧なミガキによって調整する。35-5～8・11は、胴部下半を欠損するが、台付甕または、台付の大型鉢になると推測される。35-8は、接合関係にはないが、同一個体の可能性が高い。35-10は、口縁部外面に2条の波状紋を施す高坏Aで、紋様以外の部分は、縦方向を基調とした丁寧なミガキによって調整する。以上の土器は、ほぼ後期前半に比定される。

2 SF 10　36-6は、口縁部をヨコナデする台付甕で、36-2のような台部を有すると推測される。36-3・5は、内湾気味の口縁を有する高坏Eに相当するものであるが、口唇部に内傾面を持たない36-3と、内傾面を有する36-5の2者に分類できる。なお、36-5は、焼成前の口縁部のひび割れを粘土で補修した後、焼成を行うという特異なものである。36-4は、椀状の坏部を有する高坏Dで、内湾する脚部を有し、縦方向を基調とした丁寧なミガキによって調整している。これらは、中期後葉に相当する凹線紋系の36-1を除けば、後期後半に比定されるものである。

2 SF 17　36-7は、口唇部を丸く収める壺A2である。外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケによって調整する。36-12は、口径が胴部最大径を凌駕する坩である。いずれも外面は、ハケによって調整する。36-10は、頸部の屈曲が強く、口縁部をヨコナデする台付甕、36-11はその台部と推測される。36-9は、口唇部に内傾面を有し、坏部内外面を縦方向の丁寧なミガキによって調整する高坏Eである。これらの土器は、36-7・8が中期後葉、36-9～12が後期後半に相当するものである。

2 SF 29　36-13は、胴部がソロバン玉状に強く張る壺で、胴部外面は、丁寧なミガキによって調整している。なお、胴部内面には指頭圧痕を顕著に残している。

3 SF 10　36-14は、複合口縁を有する壺B2である。複合部外面と胴部施紋下端に2個1組の浮紋を、肩部から胴部上半にわたって簾状紋に類似した櫛描による押し引き紋を7段、その下端に櫛描の半円形紋を施す。36-15は、肩部に櫛描波状紋と直線紋を交互に施し、胴部最大径付近とそれ以下をミガキによって調整する壺である。36-16は、椀状の坏部を有する高坏である。円盤充填による底部は剝離しており、脚部の形態は不明である。口縁部外面に3個1組の棒状浮紋を施す。36-14・16は中期後葉、36-15は、後期前半に相当するものである。

竪坑 SX 02　37-2は、肩部に紋様eを施した後、その下端に振幅が弱い櫛描波状紋を施す壺である。胴部は、丁寧な横方向のミガキによって調整するもので、中期後葉に比定される。37-1は、口縁部外面をヨコナデする甕である。頸部の屈曲がやや弱いことから、後期前半に相当すると推測される。

2 SF 43　37-3は、複合部外面にやや大きめの棒状浮紋を推定6カ所に付加する壺B2である。37-5は、紋様dを施す壺の胴部である。内面には接合痕を顕著に残す。これらは、いずれも中期後葉に相当する。37-4は、底部を欠損するが、胴部最大径が口径を凌駕することから台付甕になると推測される。胴部外面のハケ調整は、縦方向で統一されている

5 SX 11　37-6は、口縁部の外反がやや強く、口唇部に明瞭な面を持つ中期後葉の壺A3で、頸部から

胴部上半にわたって横位に櫛描直線紋を施す。なお、縦位の区画紋は認められない。**37-6**は、台付甕の台部である。**37-7**は、丁寧なミガキによって調整する後期前半の高坏Aである。坏と脚の接合部付近に1条の櫛描直線紋を施す以外は無紋である。なお、坏底部は、円盤充填によって成形されている。

2 SP 259　38-1は、口縁部内外面をヨコナデする甕である。後期に比定される。

3 SP 60　38-4は、胴部以下を横方向の丁寧なミガキによって調整する細頸の壺である。**38-2**は、口縁部に最大径をもつ甕Cで、胴部外面は、縦方向を基調とした粗い櫛状工具によって調整する。いずれも中期後葉に相当するものである。

3 SF 171　38-3は、口唇部上下端にキザミを施す大型の甕Cまたは、大型の鉢で、最大径を口縁部に有し、胴部内外面をハケによって調整する。口唇部の形態から中期後葉に相当すると推測される。

3 SP 190　38-5は、頸部～胴部上半に横位の櫛描直線紋を重畳させる壺A3である。胴部最大径が非常に低い位置にあり、紋様以外はハケによって調整する。中期後葉に相当する。なお、口縁部は、変形が著しい。

3 SP 338　38-6は、口径と胴部最大径が近接した中期後葉の甕（台付の有無は、不明）である。外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケによって調整する。

7 SF 16　38-7は、最大径を口縁部にもつ甕Cである。胴部外面を、斜め方向を基調としたハケ、口縁部内面をヨコハケによって調整している。

SD 55　SD55は、3区と7区で検出されおり、出土遺物も大量であることから、区ごとに報告を行う。また、3区SD55については、出土土器が中期中葉から古墳時代前期にわたることから、時期ごとに記述する。なお、量的に卓越し、溝の時期を示すと推測されるのは後期の資料である。

3 SD 55

中期中葉　**40-1**は、紋様aを施す壺胴部の破片である。太い沈線によって区画したやや狭い研磨帯を施す。**40-7**は、口唇部を丸く収め、外面を横方向を基調とした条痕によって調整する甕Aである。

中期後葉　壺は、壺B2の口縁部破片（**39-5**）や、紋様cを施す**40-3**、紋様e有するものは、紋様帯間をミガキないし、ナデによって調整する**40-5**、横位の櫛描直線紋で区画する40-2、沈線に区画された縦位の研磨帯で区画する**40-4**などが、紋様fを施すものでは**39-7**が認められるように数種類の胴部紋様が確認されている。また、丁寧なミガキによって調整する**39-14**も出土している。

甕は、口径が胴部最大径を凌駕する甕C（**40-18・20・21**）、凹線紋系の甕（**41-1**）が認められる。なお、鉢（**39-15**）も、胴部形態から中期後葉に相当する可能性が高いと推測される。

後期　広口壺A（**39-1・3、41-4**）、広口壺B（**39-4、41-3**）、広口壺D（**41-5**）のように口縁部形態に多様性が認められる。肩部に櫛描直線紋や波状紋を施し、球形または、下膨れの胴部（**39-13・16、41-7・9**）を有するものが一般である。**40-32**は、櫛描直線紋と扇形紋を施す小型壺、**40-26～28**は、ミガキ

によって調整する坩である。この他に駿河系の壺（39-6・12）などが認められる。

甕は、台接合部に粘土帯を付加するもの（40-16・17、41-8）と、これを持たないものが認められる。

高坏は、脚部に櫛描直線紋と刺突紋を交互に施す40-24、脚部が無紋の40-30、坏部や脚部に内湾指向が認められる40-22・29などが認められる。

古墳時代以降　古墳時代前期に相当するものとして、頸部が鋭く屈曲し、肩部にヘラ描きの沈線紋、櫛描直線紋を施す壺（39-17）、S字甕のC類（赤塚：1990）に相当する台付甕（40-9・13・14）、貫通孔をもたない器台（40-31）、ハ字に開く高坏の脚部（40-25）などが出土している。

7 SD 55　42-11は、肩部に櫛描直線紋と刺突紋を施す広口壺Aで、口唇部には、3個1組の棒状浮紋を3ヵ所に、口縁部内面には波状紋を施す。なお、胴部に色調の異なる胎土（灰黄色地に橙色）を用いて装飾的な意味を持たせている。42-8・9は、内湾する口縁を有する広口壺C、42-10は、広口壺Dである。43-10・15は、外面を縦方向を基調とした丁寧なミガキによって調整する小型壺である。

43-14は、口縁部外面に櫛刺突羽状紋を施す装飾鉢である。口縁部内面は、縦方向の丁寧なミガキによって調整している。42-15～21は、胴部最大径が口径を凌駕する台付甕である。

高坏Aは、口縁部外面に波状紋を施す43-1と無紋の43-6が認められる。高坏C（43-7・8・12）は、透かし孔が比較的高い位置にあり、脚部が内湾することから、同様に内湾を志向する高坏E（43-4・5・9・11）と共伴すると考えられる。

片口鉢A（43-17・18）は、いずれもミガキによって調整する。43-17は、器深が深く、やや弱い内傾面を持つことから後期後半に相当すると推測される。43-13は、頸部直下に櫛描直線紋と連弧紋風の波状紋を施す鉢で、外来系と推測される。なお、肩部に稚拙な紋様fを施す壺（42-12）、甕（42-22・23）は中期後葉に比定される。

2 SD 40　44-3は、複合部外面にヘラ描き斜格子紋を施す壺B2の口縁部破片である。竹管紋を施した2個1組の棒状浮紋を複合部外面の数ヶ所に施す。44-4は、複合鋸歯紋を連想させるヘラ描きの斜線紋を横位及び縦位の沈線によって区画するもので、東遠江系と推測されるものである。44-5は、複合口縁を有する太頸壺である。複合部外面に複合鋸歯紋を、頸部には櫛描直線紋を施すもので東遠江に類例が認められる。44-1は、中期中葉の東遠江系（嶺田式）に特有な沈線による紋様を口縁部外面に施すもので、表面を赤彩している。44-2は、口縁部下位に二枚貝による刺突紋を施す尾張系と推測されるものである。口縁部内面に指圧痕を残し、頸部には不揃いな櫛描直線紋を施す。44-6は、口縁部内面に断続的な櫛描直線紋を施す甕Aである。44-9・12は、口縁部外面を横方向の条痕によって調整する甕Bである。口唇部のキザミは、44-9が上下端に、44-12は、下端にのみに施している。44-7・8・10・11・13・15、45-2は、口径が胴部最大径を凌駕する甕Cである。いずれも、縦または、斜め方向を基調としたハケによって調整している。44-14・16は、台付甕の胴部、45-3・4は、台部である。45-4は、台部の広がりが大きく、高さも低いことなど中期的な要素が認められる。45-5は、口縁部外面に4条の凹線を施す凹線紋系の鉢である。45-6は、定型外の鉢である。以上の土器は、後期に比定される台付甕の一部を除けば、ほぼ中期後葉に相当するものである。

2区土器集積 2　45-15は、櫛描直線紋と波状紋を交互に施す広口壺の胴部である。胴部紋様の中程に4個1組の豆粒状の浮紋を4ヵ所に付加する。45-13は、口縁部内面に数条の櫛描波状紋を施し、口唇部下端にはハケ状工具によるキザミを施す広口壺Bである。頸部には、櫛描直線紋が認められる。46-20・

21は、小型壺または、坩の範疇で捉えられるもので、口径が胴部最大径とほぼ等しい46-21と口径が胴部最大径を凌駕する46-20の2者が認められる。46-18は、口縁部外面に櫛刺突羽状紋を施す装飾鉢。45-12は、竹管紋や口縁部を垂下させる特徴を有する広口壺で、三河に類例が認められる。45-10は、肩部以下に縄紋を施す東遠江系の細頸壺、45-14は、ソロバン玉状に強く張る胴部に紋様fを施す凹線紋系の壺である。

46-1は甕B、46-2・6は甕C、46-3～5・7は、台付甕である。45-9は、口縁部内面に突帯を持つ高坏X、46-11は、口縁部外面が無紋の、46-10・13は、口縁部外面に櫛描波状紋を施す高坏Aである。高坏の脚部は、脚裾部が広がるもの（46-12・14・15）と脚裾部が内湾するもの（46-16）が認められる。46-17は、外面をミガキによって調整する小型高坏である。脚部は、大きく開く形態を有する。45-9・14、46-1・2が中期後葉に相当するもので、それ以外は、ほぼ後期前半に相当するものである。なお、45-7は、口唇部が先細り気味になる壺で、古墳時代前期の混入品であろう。

1区上層水田　47-6は、ヘラ状工具による斜格子紋を地紋として、やや太めの沈線によって区画紋や連弧紋を施すもので、中期中葉に相当する。

47-4は、短く内傾した複合部外面にヘラ状工具による斜格子紋を施す壺B2、47-11は、脚裾部に段を有する高坏Xである。47-8は、口縁部外面に6条の凹線を、それ以下に櫛刺突紋を施す凹線紋系の鉢である。47-4・8・11は、いずれも中期後葉に相当するものである。

47-1は、頚部が屈曲する広口壺C、47-5・7は、共に櫛描直線紋と刺突紋を交互に施す壺の胴部である。47-9は、口縁部内面に結節縄紋を、口唇部に櫛刺突斜格子紋を施す東遠江系の折り返し口縁壺である。47-10は、台接合部に粘土帯を付加する台付甕の台部で、内湾気味のやや低い台部を有する。47-3は、口縁部外面に櫛描波状紋と直線紋を施す高坏Aの破片である。これらは、後期前半の新相から後期後半に相当するものである。

1区下層水田　47-15は、頚部に沈線による跳ね上げ紋を施す壺A1で、口唇部下端にはキザミを施す。47-14は、複合口縁部外面に沈線による連弧紋を施す壺B1、47-27は、胴部の屈曲点にキザミを施した低い突帯を有する尾張系の壺である。47-26は、突帯上に押し引き紋を施す壺の肩部である。47-19は、口縁部内面に連弧紋を施す甕A、47-31・33は、粘土帯を付加した口唇部に指圧痕を施す甕Bで、いずれも胴部外面は、横方向を基調とした条痕によって調整している。以上の土器は、中期中葉に相当するものである。47-24・25・28・30は、紋様cを施す壺、47-16は、複合部外面が無紋の壺B2、47-12は、袋状口縁を呈する口縁部外面に凹線と櫛刺突紋を施す凹線紋系の壺、47-34は、胴部外面を縦方向を基調としたハケによって調整する甕Cで、いずれも中期後半に相当する。

7区上層水田　48-5は、横位の3条の沈線紋の上にヘラ描の羽状紋を、下に縄紋を施す壺の胴部で、中期中葉に相当するものであろう。48-6は、短い複合部を有する壺B2、41-1は紋様e、48-2・4は、横位の櫛描直線紋と刺突紋で加飾する壺の胴部で、いずれも中期後葉に相当する。48-3・11は、口縁部が内湾する広口壺Cで口唇部は平坦に収める。48-12は、面取りを行った口唇部の上下端にキザミを施し、口縁部内面に円形浮紋を施す壺である。48-9は、外面を丁寧なミガキによって調整した無紋の小型鉢、48-10は、口縁部外面に櫛描波状紋を施す高坏A、48-7は、口縁部が短く屈折する高坏Cで、いずれも口唇部は、丸く収めている。以上の土器は、後期に相当するものである。なお、48-1・2・4～6・8・12は、中期中葉から後葉に相当すると推測される。

7区下層水田　48-21は、紋様aを有する壺、48-25は、縄紋を地紋とした爪形紋を施す東遠江系の壺で、いずれも壺と同様に中期中葉に比定される。

48-28は、複合部外面に棒状浮紋を全周させる壺B2である。また、胴部破片として、紋様（48-23）、紋様d（48-20）、紋様e（48-19）が出土している。48-27は、口唇部下端にキザミを施す甕Cである。48-26は、口縁部外面に5条以上の凹線を施す凹線紋系の鉢で、いずれも中期後葉に相当するものである。

1区大畦畔　49-13は、口唇部と口縁部内面に貝殻による刺突紋を施す壺A1である。口縁部内外面は、丁寧なヨコナデによって調整し、頸部外面にはヘラ状工具による跳ね上げ紋を施している。49-1は、肩部に紋様を持たない壺A3、49-17は、複合部外面に櫛状工具による刺突紋を施す壺B2である。49-6・12は、紋様eを施す壺の胴部破片で、49-6は、斜格子紋の区画に竹管紋を用い、胴部最大径付近には、竹管紋を充填した大型の円形浮紋を付加する。49-12は、ヘラ状工具による斜格子紋を太い沈線によって区画する。49-2・16は、口唇部に粘土帯を付加する甕B、49-4・7・8・20は、口唇部下端にキザミを持つ甕C、49-14・15は、台付甕の台部である。なお、49-19は、定型外の台付甕ないし、台付鉢の台部と推測される。49-10・11は、口縁部に穿孔を有する鉢の口縁部破片である。49-3は、縦位の櫛描波状紋を2条の横位沈線紋によって区画する鉢で、口縁部には穿孔（2個1組か）が認められる。以上の土器は、49-13が中期中葉に相当する以外は、中期後葉に比定されるものである。

2 SD25

上層　50-1は、胴部上半に櫛描直線紋と波状紋を交互に施紋する広口壺の胴部、50-4は、断面三角形の突帯の上下に竹管紋を施す広口壺の頸部の破片である。50-2は、最大径を胴部に有する台付甕で、50-3のような台部が付くと推測される。

50-6は、口縁部外面に櫛描波状紋を施す高坏A、50-7は、柱状部に4条の櫛描直線紋を施す高坏の脚部である。これらは、いずれも後期前半に相当する。なお、50-5は、紋様eの下位に先端が丸い棒状のものを束ねた工具による押し引き紋を施すもので、中期後葉に比定される。

下層　50-9は、胴部上半に紋様cを施す壺、50-11は、複合部外面に2個1組の棒状浮紋を付加する壺B2である。50-8は、直口した口頸部を有する壺A3で、縦方向の丁寧なミガキによって調整する。50-12・16は、口径が胴部最大径を凌駕する甕C、50-22は、定型外の高坏の脚部と推測される。外来系土器は、口縁部外面に3条の凹線を施す凹線紋系の鉢（50-23）、三河に類例が多い柱状部を有する台付甕の台部（50-21）が認められる。以上の土器は、中期後葉の時期に相当する。なお、中期中葉以前に相当するものとして、円弧紋を基調とした沈線紋を施す東遠江系の壺（50-14）、口唇部にハケ状工具による刺突を施す甕（50-13）が、後期前半以降に相当するものとして台付甕（50-15・18・20）、東遠江系の台付鉢（50-10・19）などが認められる。

1 SX12　51-3・4は、共に紋様dを施す壺の胴部破片である。特に、51-3は、頸部に相当する部分に∩形の沈線紋を挟み込む紋様構成となっている。51-1は、幅の狭い複合部外面にヘラ描き斜格子紋を施す壺B2である。

51-6は、口縁部内面に櫛描直線紋を2条施す甕A、51-7は、口縁部下端にキザミを施す甕Cである。51-10・11は、台付甕の台部であるが、51-11は、台部高が低く、端部内面に粘土のはみ出しが認められること、底部を円盤充填することなどから比較的古相に位置付けられる。

51-2は、頸部に楕円形の刺突紋を施す点が、中期中葉の東遠江系に類似するが、口唇部に明瞭な面を

持つことや、ハケによる調整方法が卓越することなどから中期後葉に相当すると推測される。
以上の土器は、中期中葉以前に比定される51-5・6・8を除けばほぼ中期後葉に相当するものである。

7 SX02　51-12は、複合部外面にヘラ描きの斜格子紋を施す壺B2である。51-15は、紋様d、51-16は、押し引き紋を施す壺の胴部破片である。
51-17・20〜22は、口縁部に粘土帯を付加する甕Bである。51-21は、口縁部外面を横方向の条痕によって調整するもので、口唇部の粘土帯は突帯状になることから、時期的に遡る可能性が高い。51-18は、口唇部にハケ状工具による刺突を施す甕Cである。51-24・25は、台付甕の台部である。
51-13・14は、やや拡張した口唇部に3〜4条の凹線を施す壺、51-26は、口縁部外面に同様の凹線を施す鉢である。

6　SR01出土土器
SR01から出土した土器は、煩雑を避けるために、注目すべき遺物以外は、形態分類をもとに、要点のみを記述する。SR01は、大きく5層に別れ、土器の取り上げもこれをもとに行っていることから、層位ごとに記述を進めることとする。しかし、自然流路という遺構の性格上、各層の遺物が時期的に截然と分離されてはいないのが現状であり、若干の混入品が伴う余地を認めざるをえない。従って、ここでは、各層で主体となる土器群によって時期を決定し、これを中心に報告する。

第Ⅰ層　第Ⅰ層は、泥炭質粘土の堆積層であり、土器の残存は比較的良好で、完形に復元できた資料も少なくない。後期前半を中心とした土器が出土している。

壺形土器　広口壺A〜Dが認められる。大半は、後期前半に相当するものであるが、後期後半の資料も若干含まれている。胴部は、頸部が屈折し、肩部が丸みを帯びた球形に近い形態を有するものが一般で、口縁部をヨコナデし、胴部下半は、丁寧な横方向のミガキによって調整するものが多い。
広口壺Aは、口縁部内面に櫛描紋を施すもの（52-20、53-3・5〜12・17・20）と無紋のもの（52-3・6・9・15・17・18・21・22、53-1・2・4・18・20、54-3〜8・10〜12・14、55-2）が認められる。広口壺B（53-7・11・13〜15・19、54-9）は口縁部内面に櫛描波状紋を施すものが多い。広口壺C（52-11・13・19、54-2など）は、口唇部の形態や胴部施紋などから、後期後半に下る可能性が高い。広口壺D（55-11・13・16・56-1）は、いずれも複合部外面に櫛刺突紋を施す。
56-5〜9、13〜18は、縄紋や櫛刺突羽状紋を施すことから、東遠江系に、釣り針状の浮紋を施す壺の肩部（56-10）、複合部外面に棒状浮紋を施す大型の複合口縁（56-12）は、駿河系に比定される。

甕形土器　台付甕A〜Cが主体に出土している。口頸部形態では頸部がの屈曲が緩やかなもの（57-9、58-20・24など）、明確に屈折するもの（57-4・10・11）、口縁部内外面をヨコナデするもの（57-2・12・14、58-19〜21・23・26）など諸形態が認められる。なお、58-21は、受け口状の口縁を有するもの、57-6は、台付甕Cである。また、西遠江に特有な台接合部に粘土帯を付加するもの（58-13〜15）が若干認められる。

高坏形土器　62-15〜18・21・23は、高坏Xの脚部、56-19・20・22は、その坏部になると推測される。高坏Xは中期後半のものであろう。高坏Aは、口縁部外面が無紋の59-4〜7と、櫛描波状紋を施す59-1、60-1・4・5・7・13・15・16・18・20に大別できる。また、口縁部形態は、端部に面を持つものと丸く収

めるもの、横方向の引き出しが強いものと弱いものなど、諸形態が認められるが、完形資料が少ないために、脚部形態を含めた型式学的な検討は容易でない。脚部は、脚端部を肥厚気味に収め、比較的高い位置に透かし孔を穿つ脚部が主体であるが、脚端部を丸く収めるもの（61-2・5・6・8・14）も認められる。59-2、62-10・14は、高坏Eの坏部で、内湾する脚部（62-8、11～13）が付くと推測される。高坏B（59-9）、高坏C（59-8・10～15）小型高坏（60-11・17）は、縦方向の丁寧なミガキによって調整するもので、脚部に櫛描紋などの装飾は認められない。脚部形態が判明する資料では、いずれも脚端部を肥厚気味に収めるものが多いことから、後期前半のやや新しい時期に相当すると推測される。高坏Dは、全形を知り得る資料が認められないが、有段の脚部（60-8、14・19）や脚部の上半が広がる61-23がこれに相当する。

60-2は、脚部に円形の透かし孔を多数穿つものである。胎土も他の土器と明らかに異なることから搬入品の可能性が高い。

鉢形土器　小型鉢（63-34）、装飾鉢（63-28・32・33、64-1・2・4・5・8）は、口縁部が外反するものと内湾するものの2者が認められる。内湾するものは、後期後葉に下る可能性がある。

片口鉢A（63-29～31・36、64-10）は、ミガキ、ハケ、板ナデなどによって調整するものが認められるが、ミガキ調整が基本となるものが多い。ほとんどに注ぎ口が設けられている。この内63-31は、器深が深い特異なもので、64-15は、それに台を付した形態である。64-13は、口縁部外面に縄紋を施すことから、東遠江系の片口鉢と判断される。

第Ⅱ層　第Ⅱ層は、中期後葉から後期初頭を中心とした土器が出土していることから、これを中心に報告する。砂層に起因するためか、第Ⅰ層のような良好な残存状況は示さない。

壺形土器　紋様e、fを施すものが主体となる。壺A2（65-2～4・7・8・11・18）は、口唇部にやや弱い面を有するもので、口縁部の外反は少ない。壺A3（65-13・16）は、口唇部下端にキザミを施すもので、口縁部の外反は、壺A2よりも強い。壺B2は、口縁部外面が無紋の（65-1・6）、斜格子紋を施す（65-9）、斜位の櫛刺突紋を施す（65-12）などが認められ、中期中葉に典型的な複合部に太い沈線紋を施す壺B1は客体である。

袋状口縁を有する65-5や口唇部に凹線を施す65-14、胴部がソロバン玉状に張り、紋様fを施す65-16、頸部に斜位の櫛刺突紋を施す65-15は、凹線紋系または、その影響を強く受けたものである。なお、後期に比定されるものとして、広口壺A（65-28）、広口壺B（65-25）、東遠江系として、やや内湾気味の口縁を有し、頸部に沈線を施すもの（65-10）や口唇部及び口縁部内面に縄紋を施すもの（65-26）が認められる。

甕形土器　大半が台付甕である。頸部が緩やかに外反し、口唇部の下端にキザミを施すものが多い。また、口径が胴部最大径を凌駕する深鉢形を呈するもの（66-8・14・18、67-3・6）も認められるが、平底の底部が接合する例は認められない。68-21は、頸部がく字に屈折する凹線紋系の甕である。胴部外面は、タタキの後、縦方向のハケによって調整している。なお、台接合部が柱状となる66-6・9は、三河系の可能性がある。

高坏形土器　67-10・15は、坏部内外面をミガキによって調整する高坏Xである。坏部と脚部が接合するものは認められなかったが、裾部段が直立ないし、外傾する67-17～21のような脚部が付くと推測され

る。67-14・16は、凹線紋系として捉えられるものである。67-14は凹線を、67-16は波状紋を口唇部に施すもので、特に後者は、坏部外面をケズリによって調整している。67-7は、柱状の脚部を有するもので、三河のものに類似する。

鉢形土器　68-5・8・11・12は、口縁部外面に数条の凹線を施す凹線紋系の鉢である（台付きの有無は不明）。このうち、68-5は、底部付近までの調整方法が判明するもので、内面をケズリによって調整していることは注目される。片口鉢A（68-10）は、口縁部が無紋で、外面をミガキによって調整することなどから後期に下る可能性が高い。65-22～24、68-6は、口縁部外面に縄紋を施す東遠江系の鉢（または台付鉢）で、後期前半に相当するものである。

第Ⅲ層　第Ⅲ層は、中期後半を中心とした土器が出土していることから、これらを中心に報告する。本層は、泥炭質の粘土の堆積層であり、土器の残存状況は、比較的良好であった。

壺形土器　69-15は、肩部が突出し紋様bを施すもの、73-8は、口縁部外面にヘラ状工具による跳ね上げ紋を施す壺A1である。69-1～4・8・10・13、70-8・10・12、71-5は、紋様c、dなどによって加飾する壺A2である。70-4～6・13～15、71-1～4・6・8・11・17は、壺A3に相当する。72-18・23は、中期中葉の壺B1に相当する。口縁屈曲部にやや大きめのキザミを施すもので、複合部外面には斜位の櫛描紋を施している。72-1・8・10・13～15・17は、複合部が直立する壺B2に相当する。72-9は、頸部に円形の刺突紋を施すもの、69-6は、棒状工具による沈線紋を頸部と口縁部内面に施す中期中葉の東遠江系で、いずれも赤彩している。69-9・11は、肩部に低い段を有する中期後葉の無紋壺で、同じく東遠江系に比定されるものである。外面は、縦方向の丁寧なミガキによって調整している。72-6・11・19、73-5は、凹線紋系、72-20は、外傾する複合口縁から三河系と推測される。また、71-10は、頸部から胴部最大径付近にわたって、直線紋、扇形紋、斜格子紋を、胴部下半は、ケズリによって調整する外来系土器である。施紋、調整方法などかなり忠実に製作されている。

甕形土器　甕Cは、口径が胴部最大径を大きく凌駕するものが多く、櫛状工具による粗い調整痕を残したり、口唇部の上下端にキザミを施すものも認められる。台付甕は、口径と胴部最大径がほぼ等しいか、後者が前者を凌駕するものが多い。台部は、高さが著しく低いもの（74-1・2・6）と通常のものが認められ、前者がより初源的なものである。74-23、78-6・8は、凹線紋系の甕に相当するもので、いずれも口唇部にキザミを施す。74-23、78-8は、胴部外面をタタキによって調整した後、タテハケ調整している。74-7・16は、柱状の脚部を有し、外面をナデによって調整することから、三河系の可能性がある。

高坏形土器　79-23は、口縁部内面に突帯を有する高坏Xである。坏部内外面は、横方向を基調としたミガキによって調整している。79-16・17・19は、坏と脚の接合部に施紋を持たない脚部である。脚裾部段は、直立ないし、外傾し、段屈曲部の高さも低いものが多い。79-21・22は、椀型の坏部を有する高坏で、裾広がりの脚部を有する点で共通している。79-26は、口唇部に凹線を、口縁部内面に突帯を施す凹線紋系の高坏である。

鉢形土器　80-4・11・12は、内湾気味の口縁部を有する片口鉢Aで、いずれも注ぎ口を有する。胴部は、横方向を基調としたミガキによって調整している。80-5～10は、内湾する口縁を有する鉢の口縁部破片である。いずれも口縁部直下に2個1組と推測される穿孔を穿っている。外面は、ヘラ描き紋によっ

て加飾している。80-20は、上げ底を呈する厚い底部を有する鉢である。外面は、縦方向の丁寧なミガキによって調整している。80-26は、口縁部外面に３条の凹線を施す凹線紋系の鉢である。

第Ⅳ層　第Ⅳ層は、中期中葉から中期後葉を中心とした土器が出土している。第Ⅱ、Ⅲ層と比較すると、中期前葉以前の資料が含まれているが、これにらの一部については、次節で報告する。

壺形土器　壺Ａ１（81-2・5～7・10～12、85-5～7・13、86-12、87-12・15～17）は、口縁部外面に跳ね上げ紋（81-2、85-13、87-12・16）や斜位の櫛描紋（81-6・10、85-5）を施したり、口唇部にキザミを施すもの（81-12・15・16）が認められる。壺Ｂ１（81-19・21～25）は、複合部幅がやや広く、直立ないし内傾するものである。壺Ａ１と同様に口頸部に跳ね上げ紋を施すものが多い。また、口縁屈曲部にキザミを施すもの（81-21～25）と無紋のもの（81-19）の２者が認められる。後者は、後述する壺Ｂ２（82-4）に近い形態とすることができる。これらには、紋様ａ（81-8・13・14・17、85-2・3・20）や紋様ｂ（81-9・16、82-2・3、85-4、86-16）を施す胴部が付くものと推測される。壺Ａ２（82-5・11～14・16・18・21・24、85-10・17、86-4・6・7・9～11・13・19、87-21）は、紋様ｃ、ｄによって加飾する傾向が強い。幅がやや狭く、直立ないし、外傾する複合部を有するＢ２（81-15、82-4・15、85-9、87-2・5・6・8）が認められる。前者は沈線紋、後者は櫛描紋によって加飾するものが多い。81-1、82-7、84-14～29、85-15・18、88-2、94-3～５・７・８は、沈線紋や円形刺突紋、爪形紋などを施す東遠江系の細頸壺である。赤彩するもが圧倒的に多い。なお、82-21・29は、同一個体の可能性が高い。84-5は、内外面をナデによって調整した後、櫛描波状紋と縦位の櫛描押し引き紋を施すもので、三河系の可能性がある。84-1～3・6～8・13、85-1、86-14、88-1は、受け口状口縁の外面に櫛描波状紋や貝殻による刺突紋を、胴部には研磨帯と櫛描紋を施す尾張系と推測されるものである。83-18は、やや拡張した口唇部に３条の凹線を施すものである。一部が片口状に窪められており、その部分の凹線は消えている。

甕形土器　中期中葉に相当する甕Ａ（89-1・7、90-1・16・17、91-1・2・5～12、92-8）は、横方向を基調とした条痕または、粗いハケによって調整し、口縁部内面に櫛描連弧紋や直線紋を施したり、口唇部に単独圧痕を施すもの、口唇部に押し引き状のキザミを施すものが認められる。

90-10は、口縁部内外面をヨコハケを基調に調整する甕Ｂである。中期後葉に相当すると推測される甕Ｃ（88-6・7・10、89-3・6・9・10、90-11～13・15、93-12・15）、甕Ｄ（88-8・9・11、93-11）は、胴部外面を、甕Ａ、Ｂよりもやや細かいタテハケないし、ナナメハケによって調整する。93-6は、頸部がく字に屈折する凹線紋系の甕である。口縁部内外面は、ヨコナデによって調整している。

高坏形土器　92-19は、屈折部分にキザミを施す高坏の坏部である。坏部は、ミガキとユビオサエによって調整し、赤彩している。93-1・3・4は、口縁部内面に突帯を持ち、脚裾部に段を有する高坏Ｘである。以上の土器は、中期後葉に相当するものである。93-2は、坏と脚の接合部に断面三角形の突帯を２条施すことから、後期前半の東遠江系に比定される。

鉢形土器　91-13は、内湾する口縁部を有する無紋の鉢、91-14・15・18は、櫛刺突羽状紋（91-15）や紋様ｃ（91-14）、紋様ｅ（91-18）によって加飾する鉢で、口縁部直下に穿孔を施す。93-5・8は、口縁部に３～４条の凹線を施す凹線紋系の鉢である。いずれも中期後葉に相当するものである。

第Ⅴ層　第Ⅴ層は、中期初頭から中期中葉を中心とした土器が出土している。本層は、SR01の最下層

に相当するが、破片資料が多く土器の残存状況は、必ずしも良好とは言えない状況であった。なお、中期前葉以前の資料の一部については、次節で報告する。

壺形土器　94-20・22は、口唇部に押し引き紋やキザミを施す壺Ａ１である。94-22は、口縁部内面に８字状の浮紋を付加する。95-1～3・6は、複合部外面を沈線紋や棒状浮紋によって、頸部外面を沈線による跳ね上げ紋によって加飾する壺Ｂ１である。このうち95-6は便宜的に壺Ｂ１に含めたが、複合部が外傾すること、跳ね上げ紋をはじめとする紋様が簡素化していることなどから、95-7のような壺Ｂ２と共に中期後葉に並行するものと推測される。研磨帯によって区画した紋様を有する95-13・17は、これらの胴部上半になると推測される。以上の土器は、一部を除けば、中期中葉に相当するものである。94-24、95-4・5・16・18・22は、中期後葉に比定されるものである。94-24は、口唇部にキザミ、頸部には、２条以上の沈線を施すもので、非常に細かなハケによって調整されている。95-8は、内湾口縁を有し、胴部が無紋であることから、東遠江系の細頸壺に比定される。95-4・5・19は、口唇部に明瞭な面を持たない壺Ａ２である。95-4は、無紋、95-5・22は、紋様ｃを胴部に施すものである。

甕形土器　甕Ａ～Ｄが認められる。94-26、96-10・11は、条痕または、粗いハケによって調整する甕Ａである。94-26は、口縁部内面に波状紋を、96-10・11は、口唇部に単独圧痕が認められる。94-15は、口縁部に粘土帯を付加して口縁部を形成する甕Ｂである。口唇部上端に棒状の工具によるキザミを施している。96-5～8・13・14は、単純口縁を有する甕Ｃである。いずれも外面は、タテハケを基調に調整するものであるが、口唇部にキザミを施す96-8・12・13と、無紋の96-5～7が認められる。

参考・引用文献

鈴木敏則　1991　「第５章　出土遺物と遺構の検討」　梶子遺跡Ⅷ　浜松市文化協会

赤塚次郎　1990　廻間遺跡　愛知県埋蔵文化財センター

池本正明　1990　岡島遺跡　愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人　1990　阿弥陀寺遺跡　愛知県埋蔵文化財センター

漆畑　敏　1983　「第５章　Ｄ、Ｄ′層遺物について」　国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報　浜松市遺跡調査会

佐藤由紀男　1994　「中期弥生土器における朝日遺跡周辺と天竜川周辺以東との対応関係」　朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）　愛知県埋蔵文化財センター

第３節　縄紋時代

今回の調査で出土した縄紋土器は、前期、後期後半、晩期後半のほぼ３時期に限定できる。大半が自然流路からの出土であるため、明確な共伴関係は不明であるが、遺跡周辺における旧地形の形成時期を推測する上で参考となる資料も含まれている。また、SR 01からは、突帯紋土器と条痕紋土器が若干量出土しているが、破片資料が多く、各層から混在した出土状況を示すことから、これらの一部については層位を限定せずに一括図示することとした。なお、出土層位は、第　表に示している。

１　縄紋流路出土土器

縄紋流路から出土した縄紋土器は、大沢スコリアの上部（大沢スコリア上層とする）から出土した樫王式と下部（SR 02下部とする）から出土した後期後半～末（前期の土器を若干含む）の土器に大別される。

大沢スコリア上層　97-13は、口唇部に面を持ち、胴部外面を二枚貝によって横方向に調整する樫王式の深鉢である。

SR 02下部　97-1は、縁帯部分の外面に２条の太い沈線を施すもので、後期後半に相当するものである。97-2は、口縁部からやや下った位置に太い沈線を施すもので、元住吉山Ⅱ式に相当する。97-3は、口唇部を内側へ肥厚気味に丸く収めるもので、胴部内面をナデ、外面を巻貝によって調整する後期末葉の深鉢である。97-4は、頚部が緩やかに外反した後、口縁部付近が立ち上がる形態を呈するもので、口縁部外面に１条ないし、２条の細い沈線が認められる。胴部外面は、巻貝によって調整している。後期中葉の元住吉山Ⅰ式に相当するものである。97-5は、波状口縁の波頂部の破片で、口唇部は、内側に幅広く肥厚している。口縁部外面には沈線紋を施し、波頂部には、刺突を施した浮紋を施している。後期末葉に相当する。なお、胎土には、雲母が多量に含まれている。97-6は、口縁部外面に３条の櫛描波状紋を施すもので、口唇部は、内側へ肥厚気味に収めている。後期末葉に相当するものである。97-7は、口唇部を内側へ肥厚気味に丸く収め、胴部外面は、巻貝によって、内面はナデによって調整している。後期に相当するものである。97-8は、粗製深鉢の胴部破片である。胴部外面は、巻貝によって調整していることから、後期に相当するものであろう。97-9は、口唇部を若干内面へ肥厚気味に収めるもので、後期に相当するものであろう。97-10は、口唇部に面を持つ粗製深鉢の口縁部破片である。後期に相当するものであろう。97-11は、口唇部に面を持つ深鉢の破片である。胴部外面は、巻貝によって調整していると推測される。後期に相当する。97-12は、口唇部にやや弱い面を持ち、胴部外面をミガキによって調整するもので、後期に相当するものである。98-1は、口唇部に面を持つ後期の深鉢である。胴部外面は、巻貝によって調整している。なお、口縁部は、波状を呈している。98-2は、口唇部を丸く収める深鉢で、突出しない平底の底部を有するものである。胴部外面は、摩滅が著しく判然としないが、ケズリないし、巻貝による調整を施すもので、後期末葉に相当するものであろう。なお、内面には、炭化物の付着が顕著に認められる。98-3は、口縁部外面にヘラ状工具による２条の波状紋を施すもので、胴部外面は、巻貝とみられる原体によって調整している。後期末葉に相当する。98-5は、口縁部に設けた縁帯外面に櫛状工具による波状紋を施すもので、胴部は、巻貝とみられる原体によって斜位に調整している。後期末葉に相当する。なお、胎土には雲母を多量に含んでいる。98-6は、羽状縄紋を施す胴部破片である。前期に相当するものであ
る。98-7は、口唇部にキザミを、口縁部外面に縄紋を施すもので、前期前半に相当する。98-8は、口縁

部外面に爪形紋を施す前期前半の北白川下層Ⅰ式に相当するものである。

2　縄紋微高地出土土器

基盤砂層　98-12は、粗製深鉢の口縁部破片である。口唇部を内側へ肥厚気味に収めることから、後期に相当する。98-13は、外面に縄紋を施すもので、前期前半に相当する。

泥炭層　98-10・11は、平行する2条の沈線やその下位に縦位の沈線が認められることから、後期後半の伊川津式に相当する。

湖沼堆積層　98-4は、内外面をミガキによって調整する後期中葉の深鉢である。口縁部は、丸く収めている。98-9は、口縁部外面に沈線を施し、口唇部には竹管状工具による円形刺突を施している。後期後半の宮滝式に相当するものであろう。

SP 249　98-15～17は、口唇部に棒状工具によるキザミを、口縁部外面に二枚貝による刺突紋を施すもので、前期前半に相当する。

SP 255　98-14は、98-15～17と同様に、二枚貝による刺突紋を施すもので、前期前半に相当する。

3　突帯紋土器

99-3・4・9は、口縁部突帯にキザミを施すものである。99-4は、口唇部を丸く収めることから、若干新しい様相を呈する。99-6は、頚胴部に屈曲を持つもので、口唇部にやや弱い面を有する。以上の土器は、突帯紋Ⅰ期（野口：1992）に相当するものであろう。99-1・5・7・10・12・13・15は、素紋の低位突帯を持つもので、口縁部の外反は、強いものが多い。99-11・16は、これらの頚胴部の屈曲部分に相当する。99-2・8・14は、低位突帯にキザミを施すものである。これらは、突帯紋Ⅱ期（野口：1993）に相当するものであろう。

4　条痕紋土器

条痕によって調整する土器を一括して報告するが、形態などから明らかに中期後葉に下るものも含んでいる。

壺形土器　100-1は、拡張した口唇部に縄紋を、口縁部内面に櫛描紋を施す口縁部である。外面には、横方向を基調としたまばらな条痕調整の後、太い沈線紋を施すものである。このような壺の類例は多くないが、形態、調整などから中期中葉に相当する在地産の土器と推測される。100-2は、口頚部外面を羽状条痕によって調整した後、頚部に直線紋を縦位に区画した紋様を施すもので、中期前葉～中葉に相当する。なお、100-1と同様に口縁部内面には直線紋を施している。100-3・4・12は、条痕調整の受け口状口縁である。典型的な中期前半の受け口状口縁は、分布の東限が豊川流域付近までであること、口縁部の屈折部に必ず隆帯を伴うことから、これに該当しない100-3・4・12は、中期中葉に下る可能性が高い。100-5・8は、棒状のものを束ねたような工具による条痕を施すものである。いずれも頚部に直線紋を施すもので、中期前葉～中葉に相当するものであろう。100-8は、口唇部に直線紋を施す。100-6・22は、肩部に圧痕を施す突帯を有するもので、櫛状の工具によって調整する。胴部の下半に条痕が認められないこと、工具や突帯の形状などから、いずれも中期中葉に相当する可能性がある。100-18・21は、口縁

部外面に圧痕を施した突帯を、口唇部に押し引き紋を施すものである。口縁部内面に100-18は斜位の条痕を、100-21は直線紋を施すもので、中期初頭～前葉に比定される。100-7・19は、壺でありながら外面に多量のススが付着しており、煮沸に用いられた中期前葉～中葉の資料として注目される。なお、100-13は、粗い条痕などの外見的な特徴から樫王式に相当する可能性がある。

甕形土器　100-15は、胴部外面を横位の条痕によって調整するもので、口縁部内面には、波状紋を施す。101-4は、口唇部と口縁部内面に押し引き紋を施すものである。これらは、いずれも中期前葉に相当するものである。

以下の資料は、中期中葉に相当する可能性が高いものである。101-1は、外面を縦位の羽状条痕によって、口縁部内面及び、口唇部を間のびした押し引き紋によって調整する。101-2・6・18は、口唇部を丸く収めるもので、胴部外面を横位の条痕によって調整する。101-2・6は、口縁部内面に押し引き紋を施す。101-9・13は、上方に面を持つ口唇部に押し引き紋（101-13）、直線紋（101-9）を施すものである。101-9は、口縁部内面に直線紋を施す。101-8・10は、口唇部に面を持つものである。101-8は、口縁部外面を条痕調整、101-10は、外面を縦方向の櫛状の条痕、内面に山形紋を施す。101-3は、口唇部に押し引き紋を施すもので、数ヶ所を上下からつまむ。

内傾口縁土器　100-9～11は、内傾口縁土器である。口唇部を内面に肥厚する101-9・10と肥厚しない101-11が認められる。なお、101-9は、胎土の違いから搬入品の可能性がある。

参考・引用文献
野口哲也　1993　「突帯紋土器」　突帯紋土器から条痕紋土器へ　東海埋蔵文化財研究会
佐藤由紀男　1990　「「丸子式」と「岩滑式」の間」　転機　第3号

第17表　突帯紋土器・条痕紋土器一覧表

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
99-1		深鉢	SR01	V層	
99-2		深鉢	SR01	Ⅳ層	
99-3		深鉢	SR01	V層	
99-4		深鉢	SR01	V層	
99-5		深鉢	SR01	Ⅳ層	
99-6		深鉢	SR01	Ⅲ層	
99-7		深鉢	SR01	V層	
99 8		深鉢	SR01	V層	
99-9		深鉢	SR01	V層	
99 10		深鉢	SR01	V層	
99-11		深鉢	SR01	V層	
99-12		深鉢	SR01	V層	
99-13		深鉢	SR01	V層	
99-14		深鉢	SR01	V層	
99-15		深鉢	SR01	Ⅱ層	
99-16		深鉢	SR01	V層	
100-1		壺	SR01	Ⅳ層	
100-2		壺	SR01	Ⅳ層	
100-3		壺	SR01	Ⅳ層	
100-4		壺	SR01	Ⅲ層	
100-5		壺	SR01	Ⅳ層	
100-6		壺	SR01	Ⅳ層	
100 7		壺	SR01	V層	
100-8		壺	SR01	Ⅳ層	
100-9		内傾口縁土器	SR01	Ⅳ層	
100-10		内傾口縁土器	SR01	Ⅲ層	
100-11		内傾口縁土器	SR01	Ⅳ層	
100-12		壺	SR01	Ⅱ層	
100-13		壺	SR01	Ⅳ層	
100-14		壺	SR01	Ⅲ層	
100-15		甕	SR01	V層	
100-16		壺	SR01	Ⅲ層	
100-17		壺	SR01	Ⅲ層	
100-18		壺	SR01	Ⅳ層	
100-19		壺	SR01	V層	
100-20		壺	SR01	Ⅳ層	
100-21		壺	SR01	Ⅲ層	
100-22		壺	SR01	Ⅳ層	
100 23		壺	SR01	Ⅳ層	
100-24		壺	SR01	Ⅳ層	
100 25		甕	SR01	Ⅳ層	
101-1		甕	SR01	Ⅳ層	
101-2		甕	SR01	Ⅳ層	
101-3		甕	SR01	V層	
101-4		甕	SR01	V層	
101-5		甕	SR01	V層	
101-6		甕	SR01	Ⅳ層	
101-7		甕	SR01	V層	
101-8		甕	SR01	Ⅱ層	
101-9		甕	SR01	Ⅳ層	
101-10		壺	SR01	Ⅳ層	
101-11		壺	SR01	V層	
101-12		壺	SR01	V層	
101-13		壺	SR01	V層	
101-14		壺	SR01	V層	
101-15		壺	SR01	V層	
101-17		台	SR01	Ⅳ層	
101-18		甕	SR01	V層	
101-19		甕	SR01	V層	
101-20		甕	SR02	下部	

第Ⅲ章　土製品

ミニチュア土器や銅鐸形土製品をはじめとする土製品と、絵画土器のように土器に何らかの副次的行為が付加されたものを一括して報告する。なお、出土遺構、層位については、第　～　表に示している。

第１節　中世から古墳時代

転用硯　102-1・2は、内面にわずかな墨痕が認められることから、須恵器坏蓋を転用した転用硯と推測される。102-1は、天井部の約１／２付近までヘラケズリ調整するもので、８世紀に相当する。

瓦　102-3・4・6は丸瓦である。いずれも凸面にタタキメを施した後、ヨコナデし、さらに、縦方向の丁寧なケズリを行うものである。凹面は、布目痕を残すが、瓦製作後に凹面の布を抜き取りやすくするためと推測される縄（直径５前後）が布に縫いつけられた痕跡が認められる。

102-5・7、103-1～4は平瓦である。凸面には、はなれ砂の痕跡が認められることから、凹面台で製作されたことがわかる。凹面は、ヨコナデした後に縦方向のヘラケズリによって調整しているが、一部には、斜め方向の糸切り痕が認められる。

丸瓦、平瓦ともに端部は、丁寧に面取りされている。いずれも瓦としては、小型であることから、小規模な寺院や持仏堂といった比較的小規模な建物の屋根に葺かれたものと推測される。糸切り痕や、調整方法、焼成などから、15～16世紀に比定される。

獣足　114-34は、獣足である。表面は、縦方向のヘラケズリによって面取りを行っている。

土馬　114-38は、土馬である。脚部などは欠損している。図示していないがこの他に２点出土している。

土人形　114-29は、土人形である。裏面は凹面状を呈し、布目痕が認められることから、型押しによって製作されたことがわかる。上半部を欠損する。

第２節　弥生時代その他

蓋形土器　104-2～10・13・14は、円盤状を呈するタイプの蓋で、ツマミ状の突起を付す104-2・10・13以外はすべて対向する箇所に２個１組の穿孔が認められる。104-11・12は、伏せ鉢状を呈する蓋のツマミ部分である。104-12は、ツマミ部分に２個１組の穿孔が認められる。104-1は、断面がキノコ形を呈する蓋である。ツマミ部分は、欠損している。

台盤状土製品　106-8～19、107-1～12・14、110-9は、円柱状を呈するもの、106-20、108-2～18、109-1～11、110-1～8は、脚台状を呈するものである。後者は、器壁が厚く、ナデを主体に調整するもの（106-20、108-4～12・15～18、109-7～11、110-1～8）と、外面をハケによって調整し、甕Ｄの台上部を平坦に収めたような形態を呈するもの（108-2・3、109-1～6）に分類可能である。また、これ以外に簡状で、内面の中程に平坦面を有するもの（107-13）が認められる。なお、106-1～6、108-1は、台盤状土製品と同様に平坦面を上にして図示しているが、ミニチュア土器となる可能性が高い。

把手　114-25・30は、U字状を呈する把手と推測されるものである。いずれも丁寧なナデによって調整する。114-27は、先端が丸い棒状の把手と推測される。表面は、丁寧なナデによって調整する。

ミニチュア土器　105-1～61、106-1～7は、ミニチュア土器である。通常の土器の紋様を模倣したもの（105-32・38・59）や、ナデによって製作するものが認められる。

筒形土器　113-7は、口縁部が斜縁を呈すると推測されるもので、筒状の胴部を有し、中央が膨らんだ不安定な平底を呈するものである。沈線によって区画された沈線鋸歯紋帯を胴部上半に２段以上施し、胴部内外面は、共に丁寧なミガキによって調整する。

114-30は、底部の破片である。底部付近に５条の凹線を、その上位に斜格子または、鋸歯状の線刻が認められる。

鳥形土器　113-2は、引き上げられた尾部の側面形態や、ハケ調整の方向などから鳥形土器と判断した。手捏ねによって中空の体部を成形し、外面をハケとナデによって調整している。頭部以上を欠損するが、類似例から、頭部は持たず、筒状に開口すると推測される。

穿孔を有する土器　80-5～9、110-10～12・16、111-1は、口縁部直下に穿孔を有する鉢である。穿孔は、２個１組のものが多い。19-8、110-13～15、111-2～9・12・13は、底部に穿孔を有するものである。111-10・11は、口縁部下位に環状の耳を有するもので、80-16は、これらと同一個体の可能性が高い。

記号紋を施す土器　73-12は、壺胴部に、81-12は、壺Ａの口縁部内面に三叉紋を施すものである。いずれも中期中葉～後葉に比定される。

シカの絵画土器　112-7～11は、中期後葉の甕Ｃの口縁部内面にシカの線刻を施すものである。いずれの破片も接合関係は認められなかったが、口縁部の形状から同一個体としてほぼ間違いないと考えられ、口縁部内面にシカが全周する構図と推測される。なお、112-11は、シカが向かい合う部分である。

112-5は、櫛描斜格子紋を施した後、これを縦位のナデによって区画する中期後葉の東遠江系と推測される壺の胴部にシカを線刻するものである。シカの胴部は、複線で表現されている。

112-3は、振幅が大きい櫛描波状紋を施す中期後葉の壺の胴部に線刻が認められる。上半身を欠損するが、シカの線刻と推測される。

その他の絵画土器　112-6は、後期に比定される広口壺Ａの肩部に題材不明の線刻が認められる。線刻は、胴部のミガキ調整後に施しているが、線刻した後にも線刻に伴うバリ状の粘土のはみ出しを消去するためにミガキを粗く加えている。左上部分には、漏斗状の突出部を設け、蛇行する胴部の中程に先端が尖った３本の突出部を有する。本例は、三重県津市六大Ａ遺跡（穂積：1995）の絵画土器に類似する。

112-2・4は、壺の胴部に屈曲する線刻が認められるが、題材は不明である。なお、器壁の調整方法から時期は中期後葉と推測される。

112-1は、緩やかに外反する甕の頸部付近に線刻を施すものであるが、欠損部分が多く、その題材は不明である。

112-12は、口縁部内外面をヨコナデする甕または、鉢の頸部直下にキ字状の線刻を施すものである。線刻の題材については不明である。

114-36は、壺の肩部に植物の茎のような柔らかいものを束ねた工具によって線刻を施したものである。残存する部分には、２つの題材が認められる。左側は、半円状のものから下方に５本以上の直線が加えられている。右側は、ヒトにもみえる線刻が認められるが、胴部を１本線で表現するなど、一般的な絵画とは異なる点が多い。しかし、これをヒトとした場合、向かって右側の腕に相当する部分から数本の垂下した線が認められ、何らかの行為を示すものとして注目される。土器の時期は、色調などから弥生中期後半と推測される。

人面付壺形土器　**113-8**は、人面付壺形土器である。口縁部に明確な人面部分を作り出し、キザミを施した隆帯やヘラ描きによって人面の表現を行っている。目と口の部分には、面と推測される線刻が認められる。また、後頭部には、髪を表現したとも推測できる羽状の沈線、首に相当する部分にはキザミを施した隆帯が認められる。胴部以下を欠損するため胴部形態については不明である。中期中葉の時期に相当するものと推測される。

銅鐸形土製品　**113-3**は、銅鐸形土製品である。型持の孔と鈕孔が穿たれており、鰭も明確に作り出すなど、比較的忠実な作りとなっている。身の外面は、縦方向の丁寧なミガキによって調整している。鈕と身の下半を欠損する。

匙状土製品　**113-4・5**は、匙状土製品である。柄は、いずれも身に対して水平に付けられている。**113-4**は、先端部が尖る柄を持つもので、身の周縁部を欠損する。**113-5**は、柱状の柄を持つもので、身の周縁と柄の先端部を欠損する。表面は、いずれもナデないし、ミガキによって平滑に調整している。

舟形土製品　**113-6**は舟形土製品である。表面は、丁寧なナデによって平滑に調整する。舳先の欠損部分を除けば約半分が残存する

土製紡錘車・加工円盤　**111-14・15・20～22**は土製紡錘車である。端部に面を持つ**111-14・20**と、面を持たない**111-15・21・22**が認められる。

111-17は、土器の胴部破片を利用した加工円盤である。周縁は丁寧に研磨し、明瞭な面を持つ。

111-16は、円盤状の土製品で、土器片を転用した111-17とは違い、本来的に円盤として製作されている。手捏ねによって製作され、端部は丸く収めている。

土錘・土玉　**114-1～24**は、土錘または、土玉と推測されるものである。土錘・土玉は、形態変化に乏しく、明確に時期を特定することができた資料は皆無である。**114-1～3**は、中世以降の土錘と推測される。

不明土製品　**113-1**は、一見、銅鐸の飾耳を連想させる半円形を呈する板状の土製品で、一面には形状に沿った櫛描のU字紋を、もう一面には櫛描直線紋を施している。欠損面に剝離したような痕跡が認められることから、何らかの土器・土製品に把手状に付加されていたと推測される。管見による限り類例が認められないことから、器種の断定は困難である。SR01第Ⅰ層から出土していることから、弥生後期前半に近接した時期が推測される。

114-35は、丸みを帯びた形態が推測される土製品で、２ヵ所に穿孔が認められる。外面は丁寧なナデ、内面は、粗いハケによって調整する。

114-37は、脚状の土製品で、一方を平坦に、他方を窪ませる形態を有する。胴部は長軸方向の丁寧なナデによって調整する。細片であることから、器種の断定は困難である。

114-26は、塊状の土製品で、表面は摩滅が著しい。台盤状土製品の可能性がある。

114-32・33は、断面がL字ないしコ字状を呈する土製品であるが、器種は不明である。**114-32**は外面をナデ、内面をハケによって、**114-33**は、外面をナデ、内面を丁寧なミガキによって調整する。

参考・引用文献
穂積裕昌　1995　「II　六大A遺跡」　一般国道23号線中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報VII　三重県埋蔵文化財センター
春成秀爾　1991　「絵画から記号へ」　国立歴史民俗博物館研究報告　35
林　泰通　1989　「台付甕の出現　—愛知県下の資料をもとに—」　古代文化　第41号-11

本報告で人面付壺形土器と報告した資料は、頸部が筒状に長いことから人面付壺形土器としてほぼ間違いないが、人面部を明確に造り出すこと、頸部の成形が土器製作に特徴的な粘土紐の接合ではなく、粘土板の接合によることなど土偶形容器に近い製作技法をとっているという指摘を石川日出志明治大学文学部助教授・設楽博己国立歴史民俗博物館助教授からいただいた。本資料が、土偶形容器に類似した製作技法を採り入れていることを付言しておく。

第18表　土製品一覧表

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
102 1		転用硯	3SX17	覆土	
102-2		転用硯	3SX17	覆土	
102-3	69	丸瓦	3区	包含層	
102-4	69	丸瓦	2SE10	覆土	
102-5	69	平瓦	3区	包含層	
102-6	69	丸瓦	2SE10	覆土	
102-7	69	平瓦	2区	包含層	
103-1	69	平瓦	3区	包含層	
103-2	69	平瓦	3区	包含層	
103-3	69	平瓦	3区	包含層	
103-4	69	平瓦	2SE10	覆土	
104-1	69	蓋	SR01	第Ⅰ層	
104-2	69	蓋	3SX20	覆土	
104 3	69	蓋	2区	4層	
104-4		蓋	SR01	第Ⅰ層	
104-5	69	蓋	3区	5層	
104-6		蓋	SR01	第Ⅱ層	
104-7	69	蓋	SR01	第Ⅰ層	
104-8	69	蓋	SR01	第Ⅳ層	
104-9		蓋	2SF29	覆土	
104 10	69	蓋	SR01	第Ⅳ層	
104-11	69	蓋	SR01	第Ⅱ層	
104-12	69	蓋	SR01	第Ⅴ層	
104 13	69	蓋	SR01	第Ⅳ層	
104-14	69	蓋	SR01	第Ⅴ層	
105 1		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-2		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-3	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-4	71	ミニチュア土器	1区上層水田	10層	
105-5		ミニチュア土器	SR01	第Ⅱ層	
105-6	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105 7		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-8	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-9	71	ミニチュア土器	5号墓	覆土	西周溝
105-10	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105 11		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-12		ミニチュア土器	竪SX01	覆土	
105-13	70	ミニチュア土器	3SD65	覆土	
105-14	70	ミニチュア土器	3SX25 1	覆土	
105-15		ミニチュア土器	2区	包含層	
105-16	71	ミニチュア土器	1区下層水田	10層	
105-17	71	ミニチュア土器	竪SX01	覆土	
105-18	71	ミニチュア土器	7区水出	5層	
105-19		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-20	71	ミニチュア土器	3SD61	覆土	
105-21	71	ミニチュア土器	3SD140	覆土	
105 22	71	ミニチュア土器	3SX25-1	覆土	
105-23		ミニチュア土器	9SD40	覆土	
105 24		ミニチュア土器	SR01	第Ⅴ層	
105-25		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-26		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ	

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
105-27		ミニチュア土器	3SD140	覆土	
105-28		ミニチュア土器	SR01	第Ⅰ層	
105-29		ミニチュア土器	SR01	第Ⅱ層	
105-30		ミニチュア土器	SR01	第Ⅴ層	
105-31	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-32	70	ミニチュア土器	SR01	第Ⅰ層	
105-33		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-34	70	ミニチュア土器	5・6区	包含層	
105-35	70	ミニチュア土器	7区水田	5層	
105-36	71	ミニチュア土器	2SE11	覆土	
105-37	71	ミニチュア土器	3SD140	覆土	
105-38	70	ミニチュア土器	SR01	第Ⅱ層	
105-39		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-40	71	ミニチュア土器	2SE07	覆土	
105-41		ミニチュア土器	2SD29	覆土	
105-42		ミニチュア土器	SR01	覆土	
105-43	71	ミニチュア土器	2SD16	第Ⅱ層	
105-44	70	ミニチュア土器	SR01	覆土	
105-45		ミニチュア土器	1区	包含層	
105-46		ミニチュア土器	SR01	第Ⅰ層	
105-47		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-48		ミニチュア土器	1区	第Ⅲ層	
105-49		ミニチュア土器	2SF16	覆土	
105-50		ミニチュア土器	2区	包含層	
105-51	73	ミニチュア土器	2区	包含層	
105-52	71	ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-53		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
105-54	70	ミニチュア土器	SR01	第Ⅴ層	
105-55	71	ミニチュア土器	2SF16	覆土	
105-56	70	ミニチュア土器	SR01	覆土	
105-57	70	ミニチュア土器	SR01	第Ⅱ層	
105-58	70	ミニチュア土器	3SX25-1	覆土	
105-59		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
105-60	70	ミニチュア土器	11SD48	覆土	
105-61		ミニチュア土器	SR01	第Ⅱ層	
105-62	70	ミニチュア土器	SR01	Ⅳ層	
106-1		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
106-2		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
106-3		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
106-4		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
106-5		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
106-6		ミニチュア土器	SR01	第Ⅳ層	
106-7		ミニチュア土器	SR01	第Ⅲ層	
106-8	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅰ層	
106-9		台盤状土製品	SR01	第Ⅳ層	
106-10	72	台盤状土製品	3区	5層	
106-11	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅳ層	
106-12	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅱ層	
106-13	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅱ層	
106-14	72	台盤状土製品	2区	包含層	
106-15		台盤状土製品	2区	包含層	
106-16	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅴ層	

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
106-17	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
106-18		台盤状土製品	SR01	第IV層	
106-19		台盤状土製品	SR01	第IV層	
106 20	72	台盤状土製品	SR01	第IV層	
107-1	72	台盤状土製品	SR01	第V層	
107-2	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
107-3		台盤状土製品	SR01	第IV層	
107-4		台盤状土製品	SR01	第II層	
107-5		台盤状土製品	SR01	第II層	
107-6	72	台盤状土製品	SR01	第IV層	
107-7	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
107 8	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
107-9	72	台盤状土製品	2SD29	覆土	
107 10		台盤状土製品	SR01	第I層	
107-11	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
107-12	72	台盤状土製品	SR01	第V層	
107-13		台盤状土製品	SR01	第IV層	
107 14	72	台盤状土製品	3区	4層	
108-1		ミニチュア土器	SR01	第III層	
108 2		台盤状土製品	SR01	第III層	
108-3	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
108-4	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
108-5	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-6	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
108-7		台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-8		台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-9	72	台盤状土製品	SR01	第IV層	
108 10	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-11	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
108 12	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
108-13	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
108 14		台盤状土製品	SR01	第III層	
108-15	72	台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-16		台盤状土製品	SR01	第IV層	
108-17	73	台盤状土製品	SR01	第II層	
108-18		台盤状土製品	SR01	第IV層	
109-1	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
109 2	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
109-3	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
109 4	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
109-5	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
109 6	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
109-7	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
109-8	73	台盤状土製品	SR01	第V層	
109-9	73	台盤状土製品	SR01	第IV層	
109-10		台盤状土製品	SR01	第IV層	
109-11		台盤状土製品	SR01	第I層	
110-1		台盤状土製品	竪穴区	5層	
110-2	73	台盤状土製品	SR01	第III層	
110-3	72	台盤状土製品	SR01	第III層	
110-4	72	台盤状土製品	SR01	第II層	
110-5	73	台盤状土製品	SR01	第III層	

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
110-6		台盤状土製品	SR01	第Ⅰ層	
110-7	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅲ層	
110-8	72	台盤状土製品	SR01	第Ⅲ層	
110-9		台盤状土製品	SR01	第Ⅳ層	
110-10		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110 11		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110-12		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110-13		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110-14		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110-15		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
110 16		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
111-1		穿孔土器	SR01	第Ⅲ層	
111-2		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
111-3		穿孔土器	SR01	第Ⅱ層	
111-4		穿孔土器	SR01	第Ⅲ層	
111-5		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
111-6		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
111-7		穿孔土器	SR01	第Ⅳ層	
111-8		穿孔土器	SR01	第Ⅲ層	
111-9		穿孔土器	SR01	第Ⅴ層	
111-10		耳付土器	SR01	第Ⅳ層	赤彩
111-11		耳付土器	7SR01	第Ⅲ層	
111-12		穿孔土器	SR01	第Ⅱ層	
111-13		穿孔土器	SR01	第Ⅱ層	
111-14	68	土製紡錘車	7区下層水田	覆土	
111-15	68	土製紡錘車	SR01	第Ⅳ層	
111 16	68	土製円盤	SR01	第Ⅲ層	
111-17	68	土製円盤	SR01	第Ⅲ層	
111-18		ミニチュア土器	2SX02	覆土	
111-19		ミニチュア土器	2SE11	覆土	
111 20		土製紡錘車	SR01	第Ⅰ層	
111-21	68	土製紡錘車	1区	7、8層	
111-22	68	土製紡錘車	1区	10層上層	
111-23		ミニチュア土器	3SD36	覆土	
112-1	65	絵画土器	SR01	第Ⅱ層	題材不明
112-2		絵画土器	SR01	第Ⅰ層	題材不明
112-3	65	絵画土器	SR01	覆土	シカ？
112-4	65	絵画土器	SR01	第Ⅲ層	題材不明
112-5	65	絵画土器	SR01	第Ⅰ層	シカ
112-6	64	絵画土器	SR01	覆土	題材不明
112 7	65	絵画土器	SR01	第Ⅲ層	シカ
112-8	65	絵画土器	SR01	第Ⅱ層	シカ
112-9	65	絵画土器	1区下層水田	10層	シカ
112 10	65	絵画土器	SR01	第Ⅱ層	シカ
112-11	65	絵画土器	SR01	第Ⅱ層	シカ
112-12	65	絵画土器	3SX17	覆土	題材不明
113-1	68	不明土製品	SR01	第Ⅰ層	把手？
113-2	66	鳥形土器	SR01	第Ⅰ層	
113-3	66	銅鐸形土製品	SR01	第Ⅴ層	
113-4	68	匙状土製品	SR01	第Ⅳ層	
113-5	68	匙状土製品	SR01	第Ⅲ層	
113-6	68	舟形土製品	SR01	第Ⅱ層	

実測図版番号	写真図版	遺物名・器種	地区・遺構名	層位	備　　考
113 7	68	筒形土器	SR01	第Ⅱ層	
113-8	67	人面付壺形土器	SR01	覆土	赤彩
114-1	74	土錘	3区	5層	中世
114-2	74	土錘	3SD140	覆土	中世
114-3	74	土錘	3SF28	覆土	中世
114-4	74	土錘	7区	包含層	土玉？
114 5	74	土錘	SR01	覆土	土玉？
114-6	74	土錘	2区	包含層	土玉？
114 7	74	土錘	SR01	覆土	土玉？
114-8	74	土錘	3区	5層	土玉？
114-9	74	土錘	SR01	覆土	土玉？
114-10	74	土錘	SR01	覆土	土玉？
114-11	74	土錘	1区	16層	土玉？
114-12	74	土錘	SR01	第Ⅳ層	
114-13	74	土錘	2区	6層	土玉？
114-14	74	土錘	9区	4層	
114-15	74	土錘	9SF25	奈良層	
114-16	74	土錘	9区	4層	
114-17	74	土錘	7SF09	覆土	
114-18	74	土錘	3区	5層	
114 19	74	土錘	1区	10層上層水田	
114-20	74	土錘	9区	4層	
114 21	74	土錘	9区	奈良層	
114 22	74	土錘	9区	奈良層	
114-23	74	土錘	9SF20	覆土	
114 24	74	土錘	9区	奈良層	
114-25	68	把手	2SD24	覆土	把手？
114-26	68	不明土製品	2SF25	覆土	台盤状土製品？
114-27	68	把手？	2SD10	覆土	把手？
114-28		把手	SR01	第Ⅳ層	把手？
114-29	68	土人形	3SD140	覆土	裏面布目痕
114-30	68	把手	SR01	第Ⅰ層	把手？
114-31	68	把手？	SR01	第Ⅲ層	
114-32	68	不明土製品	SR01	第Ⅳ層	
114-33	68	不明土製品	SR01	第Ⅱ層	
114-34	68	獣足	SR01	第Ⅱ層	
114-35	68	不明土製品	SR01	第Ⅱ層	
114-36	68	絵画土器	SR01	第Ⅲ層	ヒト？
114 37	68	不明土製品	7区	5層水田	把手？
114-38	68	土馬	3区	包含層	

第Ⅳ章　まとめ

第１節　弥生時代

今回の調査では、自然流路、方形周溝墓、土器棺墓などから、大量の弥生土器が出土した。しかし、土器の共伴関係が明確な資料は、土器棺墓や方形周溝墓、土坑の一部に限られ、層位的に前後関係が判明する資料も皆無である。ここでは、当遺跡から出土した土器の時期的変遷について概観する（第４・５図）。

中期前葉　丸子式に相当する段階である。破片資料が多く、仔細には触れることができない。

中期中葉　瓜郷式に相当する段階である。壺は、壺Ａ１、壺Ｂ１が主体となる。破片資料が多いことから、胴部形態などの比較は困難であるが、紋様構成では、紋様ａから紋様ｂに変化することが既に指摘されている。甕は、口縁部内面に波状紋や連弧紋を施し、口唇部に単独疵を施す甕Ａが認められる。

中期後葉　下長山式、長床式に相当する段階である。壺は、壺Ａ２、壺Ａ３、壺Ｂ２が主体となり、胴部紋様は、紋様ｃ～ｆが認められるようになる。また、調整工具のうち、ハケについては、原体の痕跡が浅く細かいものが散見されはじめるのも本段階である。甕は、胴部外面の調整が、横方向を基調としたものから、縦方向を基調としたものへという大まかな変化が認められるようである。しかし、土器の共伴関係や層位論に基づく検証は困難であり、系譜的な問題も考える必要があろう。甕Ｄ（台付甕）が出現し、甕Ｃと共に煮沸としての機能を担うようである。また、高坏も一定量認められるようになる。

後期　伊場式（山中式）、欠山式に相当する段階である。壺は、広口壺の口縁部に多様性が認められること、台付甕や高坏、長頸壺、装飾鉢といった器種が定型化するように、器種の分化が進む段階として位置付けられる。伊場式（山中式）から欠山式への変化は、壺の紋様構成の変化や、高坏端部の内湾化によって区分できる。

参考・引用文献

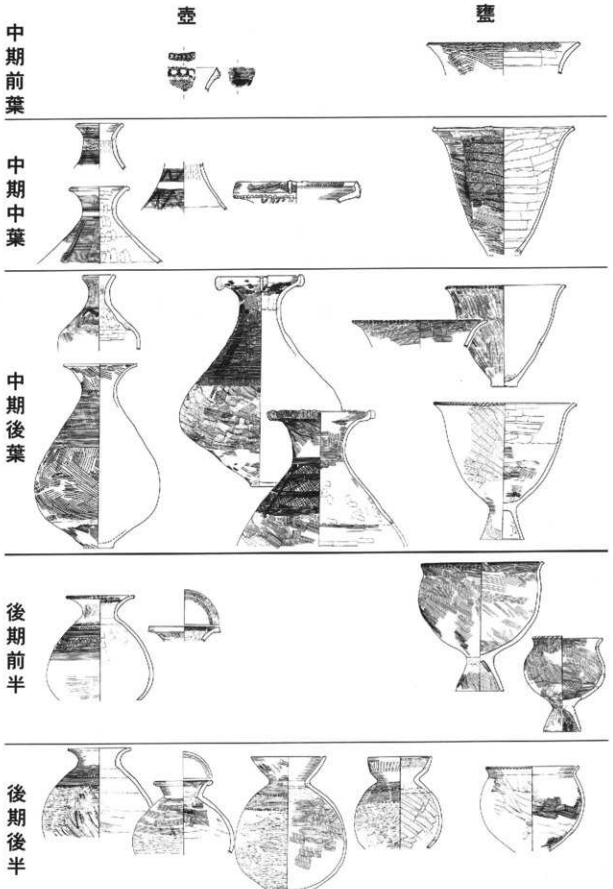
池本正明　1990　岡島遺跡　愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人　1990　阿弥陀寺遺跡　愛知県埋蔵文化財センター

漆畑　敏　1983　「第５節　Ｄ、Ｄ'層遺物について」　国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報　浜松市遺跡調査会

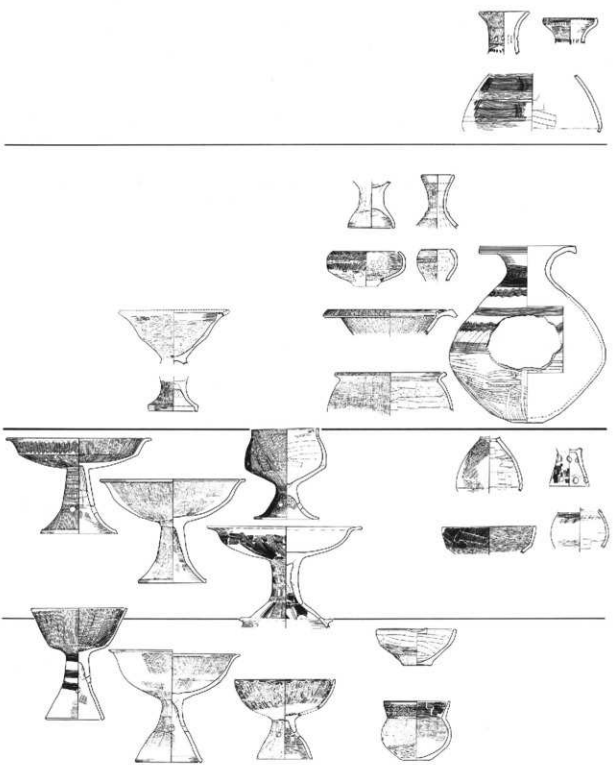
佐藤由紀男　1990　「丸子式」と「岩滑式」の間　転機第３号

佐藤由紀男　1994　「中期弥生土器における朝日遺跡周辺と天竜川周辺以東との対応関係」朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）　愛知県埋蔵文化財センター



第4図　各時期の弥生土器Ⅰ

高坏　　その他・外来系



第5図　各時期の弥生土器2

第2節　縄紋時代

縄紋土器は、前期と後期後半、晩期後半の資料が認められたが、縄紋流路（SR 02）をはじめとして、各時期の組成などを示す良好な一括資料は皆無であった。しかし、SP 249から出土した前期前半の土器については、その遺構が掘削された基盤層の形成年代を特定する判断材料になるものであり、晩期後半の土器についても、SR 01以外に出土遺構は認められなかったものの、今回調査された弥生時代中期後葉以降の方形周溝墓、土器棺墓をはじめとする遺構が形成される以前の資料として注意しなければならない資料である。今後の資料の蓄積が待たれるところである。

突帯紋土器と条痕紋土器

今回の調査では、突帯紋土器、条痕紋土器が若干量出土した。これらの編年的位置付けから当遺跡の時間的変遷を概観すると、縄紋時代晩期に比定されるいわゆる五貫森式、馬見塚式段階の資料が一定量存在し、次段階の樫王式、水神平式の資料が欠落している。そして、中期前葉に相当する段階に至って再び資料数が増加するという傾向が認められる。今回の調査では該期の資料の出土は非常に少なく、これをもって遺跡の評価を議論することは困難であるが、縄紋時代晩期以降、弥生時代前期（樫王式、水神平式）を除けば、縄紋時代晩期以降、弥生時代後期にわたって連綿と遺跡が継続していたという評価が可能であろう。

本章の執筆に当たり、以下の方々の御指導、御協力を賜りました。ここに記して深甚の感謝をささげます。

池端清行　柴田　稔　白澤　崇　永井義博　穂積裕昌　松井一明　森　泰通　渡辺康弘

（五十音順・敬称略）

図　　版

1-3

1-12

1-7

1-9

1-11

1-13

1-17

7区4・5・6層水田　出土土器

1-23

1-24

2-4

2-7

2-14

3-2

3-7

3-3

3-9

7区6層水田・2SF32・3SX15・3SX17　出土土器

3-12

3-17

3-18

3-13

3-24

3-15

4-1

4-3

4-2

3SX17・3SE01・3SE02　出土土器

4-4

4-5

4-6

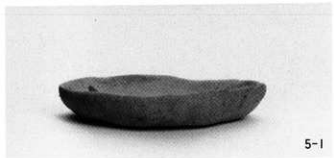
4-7

5-11

4-8

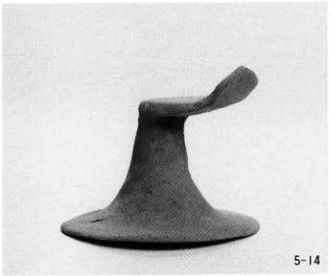
4-9

4-14


5-1

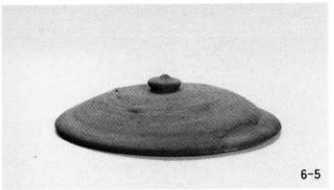
5-12

3SE02・2SE11　出土土器


5-14

5-16

6-1


6-5

6-6

6-2

6-7

6-4

6-8

2SE11・5SF06・5SF09・5SF12　出土土器

6-11

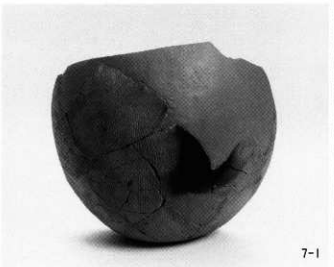
7-4

6-13

7-5

6-16

7-8


7-1

5SF12・5SF13・3SE04・3SE23・2SE03・2SE06　出土土器

8-2

8-1

8-8

8-15

8-9

8-13

8-10

8-7

8-21

2SE10 出土土器

9-7

9-11

9-14

9-13

9-15

9-16

9-17

9-2

7SF02・2SF09・3SF127　出土土器

10-1

10-7

10-2

10-8

10-4

10-10

10-5

10-14

10-6

10-21

3SF127 出土土器

10-15

10-16

10-20

11-5

11-9

11-7

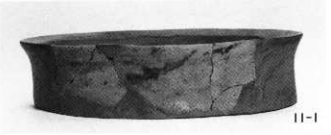
11-8

11-14

11-12

3SF127・9区土器集積　出土土器

11-13


11-1

11-10

11-15

11-16

12-18

11-3

12-22

9区土器集積・3SX25　出土土器

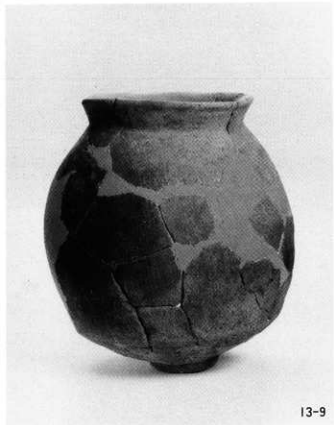
9-12

13-7

13-8

13-2

13-4


13-9

3SF127・3SD46　出土土器

14-5

14-2

14-3

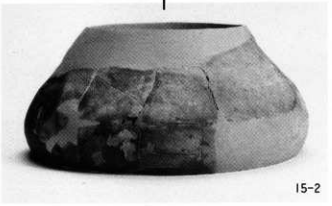
14-7

14-6

14-1

方形周溝墓　出土土器①

15-2


15-2

15-8

15-4

15-9

15-6

15-7

方形周溝墓　出土土器②

16-1

16-3

16-2

16-5

方形周溝墓　出土土器③（4号墓東溝・6号墓東溝）

17-1

17-3

28-1

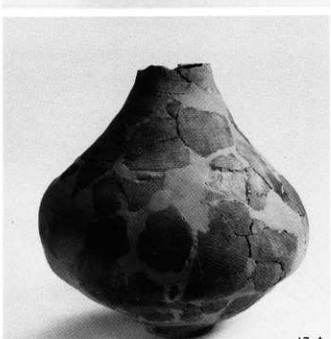
方形周溝墓　出土土器④⑮

16-4

17-2

17-5

17-6


17-4

17-7

方形周溝墓　出土土器③④

18-2

18-1

18-7

18-6

方形周溝墓13号墓　出土土器⑤

18-10

19-6

19-3

19-12

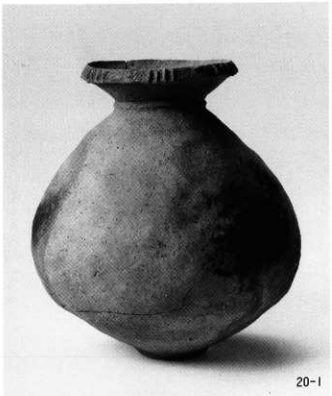
19-10

19-11

方形周溝墓　出土土器⑤⑥

20-4

20-5


20-1

20-3

21-13

21-14

方形周溝墓　出土土器⑦

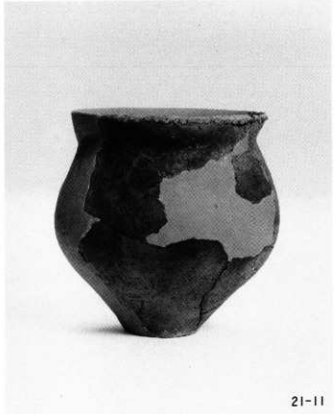
22-6

22-19

22-1

22-16

21-8


21-11

方形周溝墓　出土土器⑧⑨

24-4

23-13

22-20

23-9

22-18

22-21

方形周溝墓　出土土器⑨⑩⑪

25-8

24-10

24-12

方形周溝墓　出土土器⑪⑫

26-10

26-1

26-9

方形周溝墓　出土土器⑬

27-1

27-4

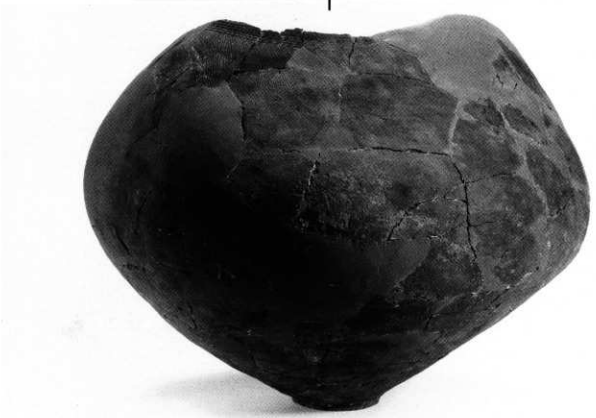
27-5

27-6

28-10

28-13

29-1



29-1

29-5

29-6

土器棺墓①

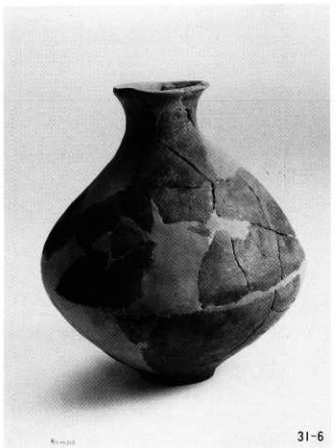
30-1

30-2

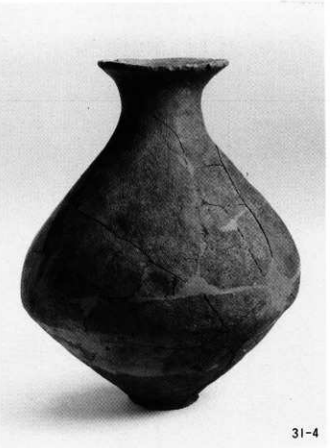
29-4

土器棺墓①②

31-5



31-6



31-4

土器棺墓③

32-5

32-1

土器棺墓④

33-3

32-2

33-2

土器棺墓④⑤

34-12

34-17

34-13

34-16

34-5

34-18

弥生時代土坑　出土土器①

35-9

35-10

35-5

35-8

36-13

36-15

弥生時代土坑　出土土器②③

36-16

36-12

36-14

37-1

37-2

37-8

弥生時代土坑　出土土器③④

37-7

37-7

38-4

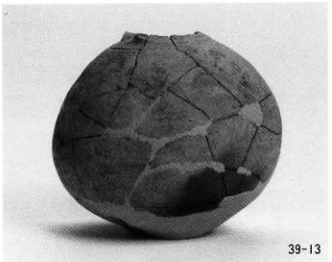
38-6

38-2

38-5

38-7

弥生時代土坑　出土土器④・土器埋置小土坑　出土土器


39-13

39-14

39-16

39-12

38-3

土器埋置土坑　出土土器・溝状遺構　出土土器①

39-3

39-4

40-15

41-13

39-15

39-17

40-29

40-31

溝状遺構　出土土器①②③

42-11

42-10

41-6

41-7

41-8

41-9

溝状遺構　出土土器③④

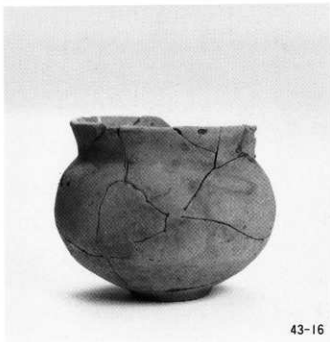
42-17

42-19

42-18

42-21

42-20


43-16

溝状遺構　出土土器④⑤

43-18

43-8

43-1

43-5

43-11

43-12

溝状遺構　出土土器⑤

45-6

44-1

45-1

43-9

43-3

43-4

溝状遺構　出土土器⑤・2区土器集積　出土土器①・2SD40　出土土器①

45-13

45-7

46-15

46-19

46-14

46-17

2区土器集積　出土土器①②

48-9

50-8

52-21

52-13

52-22

52-19

7区水田　出土土器・SR01第Ⅰ層　出土土器①　弥生湧水点上層、下層　出土土器

53-10

52-11

53-16

53-15

53-17

53-20

SR01第Ⅰ層　出土土器①②

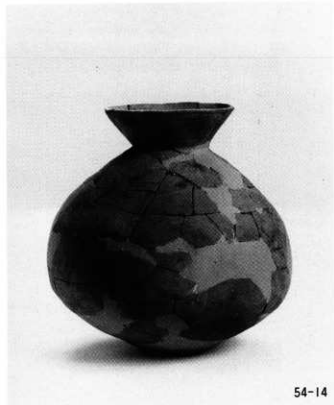
54-3

54-11

54-2

54-5

54-12


54-14

SR01第Ⅰ層　出土土器③

55-14

55-16

56-1

56-2

56-4

57-12

SR01第Ⅰ層　出土土器④⑤⑥

57-11

57-10

57-6

57-8

58-23

58-26

SR01第Ⅰ層　出土土器⑥⑦

59-1

59-4

59-14

59-15

60-15

60-20

SR01第Ⅰ層　出土土器⑧⑨

60-2

60-19

60-11

60-17

60-12

60-18

SR01第Ⅰ層　出土土器⑨

61-11

61-23

61-19

61-20

62-6

62-15

SR01第1層　出土土器⑩⑪

62-19

62-22

63-36

63-27

63-19

63-33

63-31

62-13

SR01第Ⅰ層　出土土器⑪⑫

63-12

63-16

63-11

63-17

63-21

63-22

SR01第Ⅰ層　出土土器⑫

63-4

64-14

63-24

63-25

63-26

63-34

SR01第Ⅰ層　出土土器⑫⑬

65-28

66-18

64-4

66-20

64-15

64-16

SR01第Ⅰ層　出土土器⑬・SR01第Ⅱ層　出土土器①②

66-7

68-10

67-11

68-9

67-4

67-18

SR01第II層　出土土器②③④

69-11

69-15

69-8

69-13

69-17

69-20

SR01第III層　出土土器①

69-14

70-5

70-13

70-12

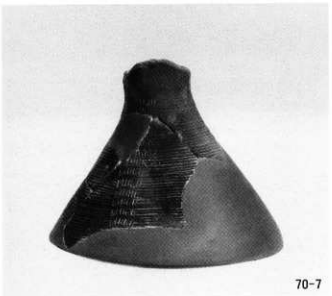
70-10

69-19

SR01第III層　出土土器①②

70-8

70-1


70-7

70-9

71-9

71-5

SR01第III層　出土土器②③

72-10

74-9

73-4

72-12

71-7

71-6

71-10

71-14

SR01第III層　出土土器③④⑤⑥

76-3

79-22

75-1

75-6

78-2

76-5

SR01第III層　出土土器⑦⑧⑩⑪

80-16

80-14

79-23

80-13

80-1

80-11

80-4

SR01第Ⅲ層　出土土器①②

85-9

95-22

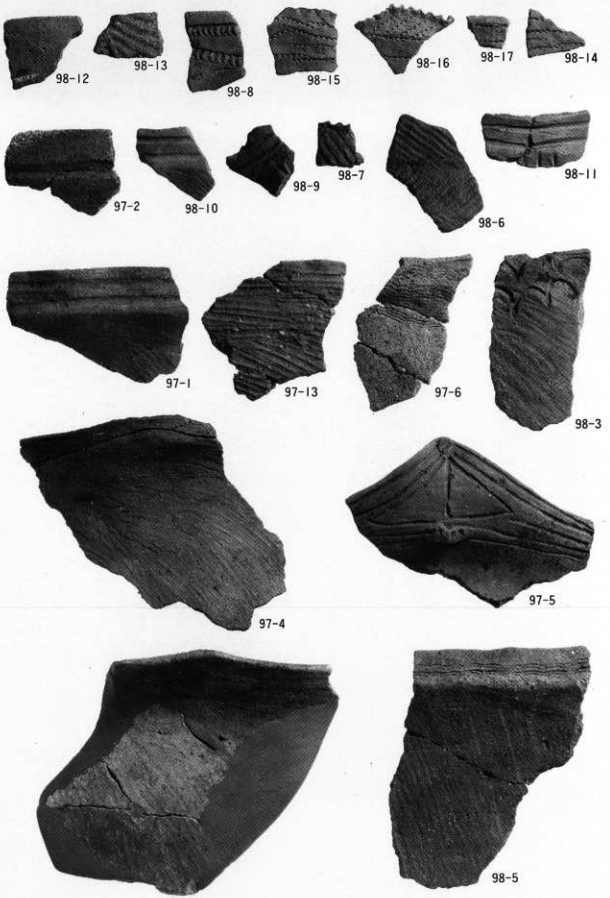
95-4

96-7

88-10

88-6

SR01第Ⅳ層　出土土器⑤⑧・SR01第Ⅴ層　出土土器②③


98-12
98-13
98-8
98-15
98-16
98-17
98-14
97-2
98-10
98-9
98-7
98-6
98-11
97-1
97-13
97-6
98-3
97-4
97-5
98-5

縄紋土器①

97-12

97-11

97-9

97-10

98-4

97-7

97-8

97-3

縄紋土器②

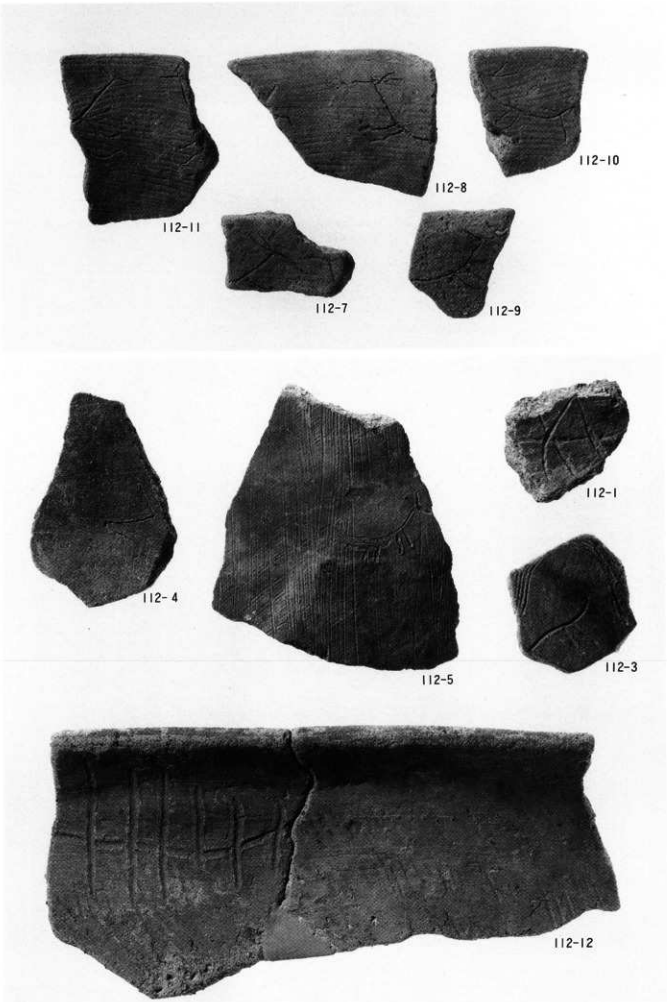
98-1

98-2

112-6

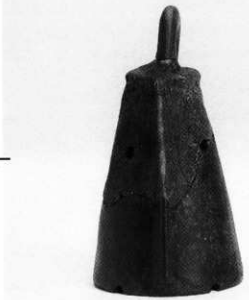
113-3

縄紋土器③・絵画土器①



絵画土器②

113-3



113-3

113-2

113-7

銅鐸形土製品・鳥形土器・筒形土器

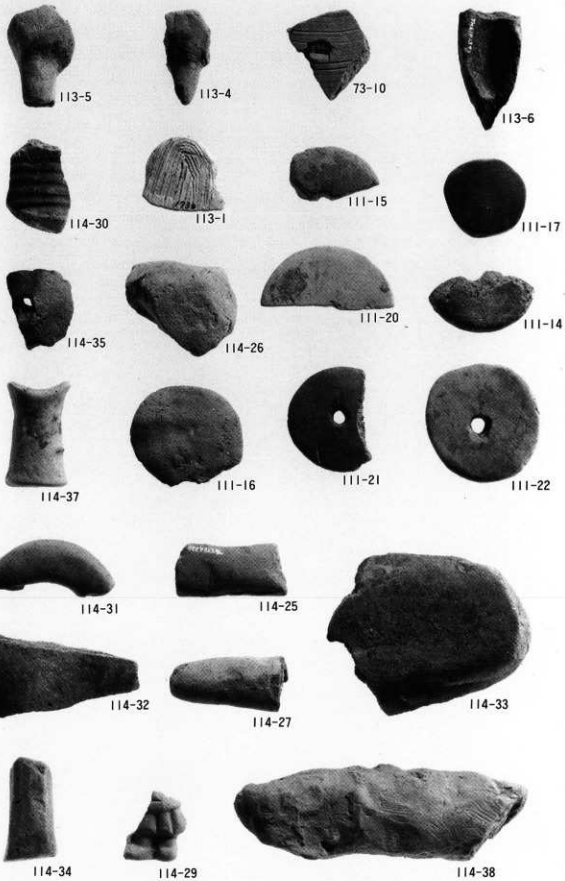
113-8

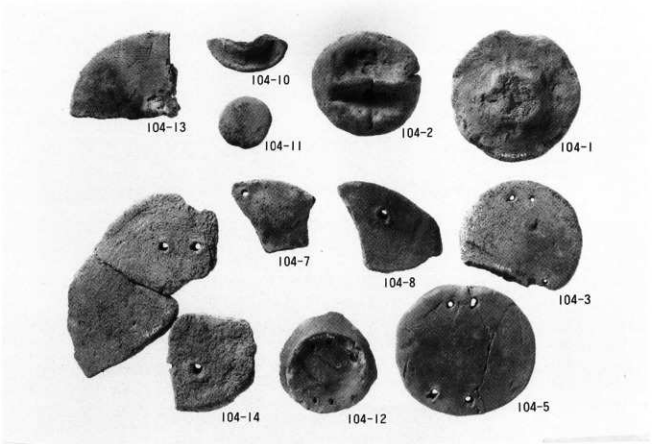
113-8

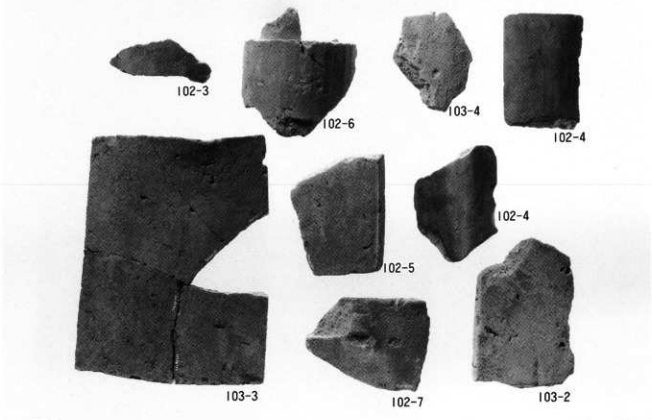
113-8

113-8

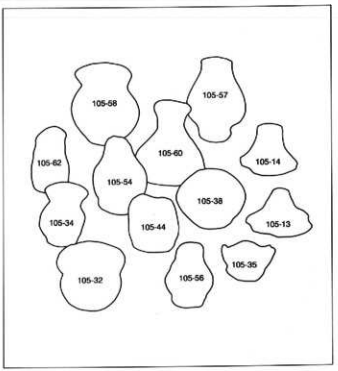
人面付壺形土器


113-5
113-4
73-10
113-6
114-30
113-1
111-15
111-17
114-35
114-26
111-20
111-14
114-37
111-16
111-21
111-22
114-31
114-25
114-32
114-27
114-33
114-34
114-29
114-38

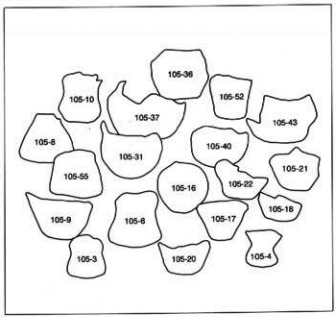

104-10
104-13
104-11
104-2
104-1
104-7
104-8
104-3
104-14
104-12
104-5


102-3
102-6
103-4
102-4
102-4
102-5
103-3
102-7
103-2

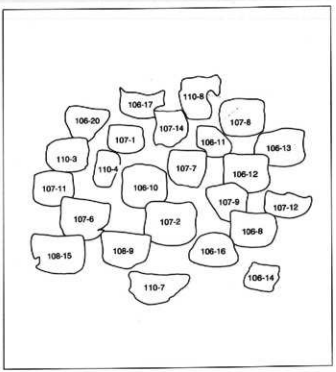
蓋形土器・瓦


105-68
105-57
105-62
105-60
105-14
105-54
105-38
105-34
105-44
105-13
105-35
105-32
105-56

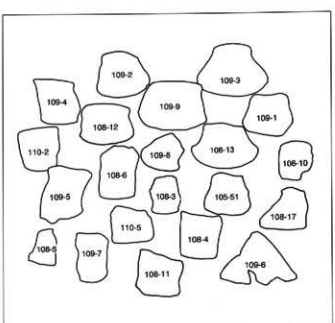
ミニチュア土器①


105-36
105-10
105-52
105-37
105-43
105-8
105-40
105-31
105-21
105-55
105-22
105-16
105-18
105-9
105-6
105-17
105-3
105-20
105-4

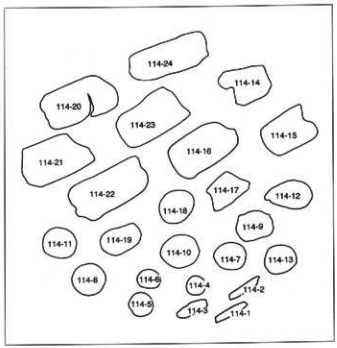
ミニチュア土器②


106-17
110-8
106-20
107-14
107-8
107-1
106-11
106-13
110-3
110-4
107-7
106-12
107-11
106-10
107-9
107-12
107-6
107-2
106-8
108-15
108-9
106-16
106-14
110-7

台盤状土製品①


109-2
109-3
109-4
109-9
109-1
108-12
110-2
109-8
108-13
105-10
108-6
109-5
108-3
105-51
108-17
110-5
108-4
108-5
109-7
109-6
108-11

台盤状土製品②


114-24
114-14
114-20
114-23
114-15
114-16
114-21
114-22
114-17
114-12
114-18
114-9
114-11
114-19
114-10
114-7
114-13
114-8
114-6
114-4
114-2
114-5
114-3
114-1

土錘・土玉

報告書抄録

ふりがな	かくえいせき
書名	角江遺跡 II 遺物編1 土器・土製品
副書名	二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進（中小）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	――
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第69集
編著者名	佐野五十三・篠原充男・岩本貴
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18－5 TEL.0543－67－1171（代）
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
角江遺跡（かくえいせき）	静岡県浜松市（しずおかけんはままつし）入野町（いりのちょう）15174他	22202		34° 41′ 51″	137° 36′ 33″	19910401 ～ 19940331	12496㎡ （延べ 36454㎡）	二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進（中小）工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
角江遺跡	集落跡	弥生中期～後期	溝 方形周溝墓 土製模造 土坑、柱穴	弥生土器（壺、甕、高杯、鉢） 台製土製品、ミニチュア土器、土錘	・人面付壺形土器や絵画土器の発見 ・獲形土器口縁内側にシカの線刻が描された絵画土器（弥生中期後葉）
		古代～中世	溝 井戸跡 土坑、柱穴 道状遺構	須恵器（坏身、坏蓋、高坏、足、長頸壺、甕、平瓶） 灰釉陶器（碗） 山茶碗（碗、小皿） 土師器（甕、鍋、高坏、鉢、甑、皿、横使坏、内耳鍋、カワラケ） 瓦、土馬、土人形、獣足、転用硯、墨書土器（女他）	・銅鐸形土製品（弥生中期中葉）県内初例。 ・弥生中期中葉から後期前半を中心とする時期の土器・土製品は静岡県西部の土器様相、中でも不明な点が多かった中期の土器様相を把握する上で重要な資料となる。また、地域間交流を知る上で参考となる資料も認められる。
	河川跡	縄紋～弥生後期	湧水点 暗渠	縄紋土器 弥生土器（甕、壺、高坏、鉢） 人面付壺形土器、絵画土器、鳥形土器、獣形土器、底部穿孔土器、籠、ミニチュア土器、土錘、土製紡錘車、土製円板、銅鐸形土製品、台製状土製品、舟形土製品、さじ状土製品	
	水田跡	弥生後期～中世	畦畔 杭列畦畔 取水口	弥生土器（壺、甕、高坏、鉢） 須恵器（坏身、坏蓋、皿、長頸瓶） 土師器（坏身） 山茶碗（碗）	

角江遺跡に関する静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書

角江遺跡		1991年
角江遺跡II	遺構編	1996年
角江遺跡II	遺物編1（土器・土製品）	1996年
角江遺跡II	遺物編2（木製品）	1996年
角江遺跡II	遺物編3（石器・金属製品他）	1996年

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第69集

角江遺跡 II

遺物編1（土器・土製品）

平成3～7年度二級河川新川住宅宅地
関連公共施設整備促進（中小）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年3月31日発行

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印　刷　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の1
ＴＥＬ(054)282-4031